

第1章

第1節 調査にいたる経緯

当該地は神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳において、北条時政邸跡(鎌倉市No.235遺跡)として周知されてきた埋蔵文化財包蔵地である。地元にはいつの頃からかこの場所が北条時政の名越山荘跡であるとの伝承があり、また敷地北側の丘陵部には唐糸やぐら、日月やぐらなどの著名なやぐらも存在し、加えて現在、東京国立博物館が所蔵する国指定重要文化財の青磁の鉢3点も当該敷地から出土している。こうした多くの歴史的要素を有するこの場所について、鎌倉市教育委員会ではかねてより当該地が市内でも歴史的に重要な場所であると認識していたところである。

平成7年以降、鎌倉市では鎌倉の歴史的な遺産を世界文化遺産に登録する機運が生じることとなった。当時は鎌倉の歴史遺産の特徴は、山稜部を中心に認められる切通や切岸等の人工的な土木遺構の存在にあるとする考え方が主体的であった。こうした状況をふまえ、平成11年度には国、県の補助を受けて切通周辺詳細分布調査を実施した。

調査の際、当該地一帯の山稜部は杉本城跡・釈迦堂切通周辺地区として位置付けられ、分布調査の結果、当該地周辺には従来から把握されていた以上にやぐらが存在し、尾根上にも幾つかの平場が存在している状況を確認するに至った。この詳細分布調査の成果に基づき、平成12年には神奈川県と鎌倉市の共同事業として『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査を実施した。このときの調査では、敷地北側の切通状の地形を呈する箇所にトレンチを設け発掘調査を実施した。当時は敷地内に家屋が存在していたため、調査はこの1箇所に限定して実施するにとどまった。

平成19年には、当該地を含む周辺一帯の土地がこれまでの土地所有者から不動産開発事業者へと売却され、宅地造成の計画が浮上することとなった。この頃より地元の市民からは開発の実施によるやぐらの消滅を危惧する声が鎌倉市をはじめ国・県の各行政機関、議会議員へ少なからず寄せられる状況となった。文化財の保護を求める開発反対の動きは平成20年に入ると一層活発になり、鎌倉市は市民の声に応え、市長、副市長が現地を確認し、文化財としての重要性を十分に認識し、文化財保護に向けた具体的な対応の検討を開始することとなった。

平成20年5月8日に文化庁、神奈川県教育委員会及び鎌倉市教育委員会の3者で発掘調査の実施に向けた協議を行ったところ、文化庁から鎌倉市に早期に学術調査を実施して埋蔵文化財の状況を把握するとともに、将来的な遺跡の保護を念頭においた準備をすすめる旨の指導がなされた。あわせてこの発掘調査を重要遺跡確認調査と位置づけ、国庫及び県費補助の対象事業として実施することについても了解を得ることとなった。

鎌倉市教育委員会は平成20年6月12日、土地所有者である有限会社ナイスプランニング代表取締役茂木幹夫宛に鎌倉市教育長名の文書により学術調査の実施を依頼した。この依頼に対しては、6月17日付けで発掘調査実施承諾書の提出を受けることとなった。

平成20年6月17日には文化庁記念物課埋蔵文化財部門の坂井秀弥主任調査官(当時)による現地視察を受け、今後の発掘調査方法等について指導を受けた。こののち調査に必要な人員及び機材等の諸準備を整え、7月31日から現地での発掘調査を開始することとなった。

なお、従来「北条時政邸跡」としてきた埋蔵文化財包蔵地の名称については、神奈川県教育委員会との協議を経て、平成21年1月31日付で「大町釈迦堂口遺跡」に名称変更を行った。

第2節 調査地とその周辺の地理的・歴史的環境

現在の名越は、名越ヶ谷を中心とした範囲(大町三丁目～七丁目)で呼ばれ、名越四ツ角から北東に約1000m、谷戸奥から南に向かって流れ下る逆川によって開かれた開析谷である(図1)。調査地点は名越ヶ谷の奥、浄明寺に抜けることのできる釈迦堂切通し(トンネル)の隣、南向きに開口している東側の谷の最奥部に位置している。大きな平場の第1調査地点と、下段の小さな平場の第2調査地点である(図2)。そして、谷奥の平場を囲むように造られている通称「唐糸やぐら」と呼ばれるやぐらを含めたやぐら群と「日月やぐら」周辺の調査も併せて行った。このやぐら群は『鎌倉市史考古編』で「衣張山やぐら群」と「釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群」として記録されている。

名越とは元々荏草郷の小字であったと考えられ、鎌倉前期において材木座を含む範囲の総称として捉えられていたと考えられる。源頼朝が鎌倉に入った後に鎌倉の内になった。西には大庭御厨、北には山ノ内庄、東と南には荏草郷があり鎌倉郷を取り囲んでいた。元仁元(1224)年十二月、北条義時が四角四境の鬼気祭を執り行っている。四角祭が都の中で行われるのに対し、四境祭は都の外の祭事である。行われた地域を見ると、東・六浦、西・稲村、南・小壺、北・山ノ内で、荏草郷とその小字である名越は鎌倉の内になっていることが明らかである。鎌倉前期における鎌倉の四境は、概ね奈良・平安時代の鎌倉郷・荏草郷の範囲を合わせたものと考えられる。古代より古東海道が名越坂を越え逗子の沼浜へ通じていた。後に鎌倉七口に数えられる名越切通しとして整備されていく交通の要所であり、北条時政が最初に拠点を置いたのも名越であった。時政の館は浜御所と呼ばれ、政子の御産所として使われたり実朝もここで元服している。この他に義時の名越山庄が知られている。義時の子、朝時に邸宅が譲られ、以降「名越氏」を名乗るようになる。更に朝時の子、時章の名越亭があるが代々受け継がれた同一の邸宅と考えられる。名越邸の位置は明らかにされていないが、北条時政の浜御所、義時の名越山庄、時章の名越亭と呼び方が異なる邸宅が同一のものならば、海に近く、また山にも近い立地だったと考えられよう。名越の範囲が海岸まで含むのならば、名越坂の南、材木座の東の山際、弁ヶ谷周辺が候補地と考えられよう。

『鎌倉攬勝考』の時政山庄の記述と、昭和28(1953)年に近在で龍泉窯青磁大鉢3個(国指定重要文化財)が出土したことが結びついたのか、第1調査地点周辺は時政名越亭(山莊)と呼ばれるが確証は何もない。

現在、名越ヶ谷には谷戸の開口部に寺院が集中している(図2)。大寶寺、妙法寺、安国論寺が主な寺院で、いずれも日蓮宗である。妙法寺・安国論寺は開山を日蓮と伝え、鎌倉時代後期に名越山麓を拠点として活動していた日蓮宗の動きをそこに見ることができよう。

一方で、谷奥には現在寺院は存在していない。しかし鎌倉の多くの谷戸に寺院伝承が残されているように、この名越ヶ谷も同様に寺院伝承が残されており、例えば山王谷は『吾妻鏡』に見える「名越山王堂」の跡地、そして花ヶ谷は慈恩寺(臨済宗)・木東寺(臨済宗)・西門寺の跡地に比定されている(『鎌倉廃寺事典』)。花ヶ谷では昭和29(1954)年に山裾から土葬人骨の納められた常滑産大甕が発見されている(図2○)。

開創の時期について記録から最も古く遡れるのは山王堂であり、『吾妻鏡』建長四(1252)年の火災の記事にその名を見る。この場所は過去に発掘調査が行われており、14世紀から16世紀までの禅宗様式の寺院遺構が検出されている(図2：8地点)。しかし13世紀の層まで掘り下げていないため、文献に現れる山王堂と同時期の遺構は検出できていない。

今回の調査地点が位置する支谷は、可住地となる平坦地も十分確保できる幅があり、北側丘陵には多くのやぐらが存在するという立地条件の点でも前述の寺院伝承を残す2支谷に劣らない。それにも関わらず、現在寺院伝承はおろか谷戸の名称すら残されていない。青磁の大鉢が出土するなど歴史的にも重要な地であったことを想定させる証拠は得られているにもかかわらず、意外なことであろう。



図1 調査地点位置図

さて、図2には今回の調査地周辺で現在までに実施された発掘調査地点を示した(図中●)。網かけの範囲は今回調査対象となった地点を含む包蔵地である。名越ヶ谷においては谷戸の開口部(図2左下)で比較的多くの調査が行われているものの、支谷内においては急傾斜地の工事に伴って行われたやぐらの調査(図中■)を除けば調査例は非常に少ない。とくに名越ヶ谷の最奥にある支谷、黄金ヶ谷から今回の調査地点が存在する支谷を経て山王堂谷の開口部までは、これまでに7箇所調査が行われているに過ぎない(図2：1～7地点)。

1～7地点ではいずれも、13世紀代における生活面や建物跡、もしくはその存在を想定させる柱穴・土坑などが検出されている。そのうち2・3・5・7地点では13世紀中葉まで遡ることのできる土地利用が確認されており、とくに5地点では15世紀初頭までの遺構が確認され、最も古い段階では掘立柱建物や板塀の跡が検出された。板塀があることから、武士クラスの館にある建物が想定されている(玉林1986)。

1・4・6地点では13世紀後半以降、14世紀にかけての生活面と掘立柱建物跡などが検出されている。4地点では、13世紀後半から14世紀にかけての建物跡や土塁が検出され、14世紀初頭の建物跡は寺院もしくは武家屋敷と想定されている(宗基1998)。

1・4・7地点では最下層の遺構を確認することができていないためさらに古い時代の遺構が残っているかもしれないが、遅くとも13世紀中頃からは武家屋敷や寺院の存在する景観があったのだろう。

谷の開口部に近づくと調査密度は高くなる(図2:10～22地点)。いずれも13世紀中葉から14世紀代を中心とする遺構が検出されており、13地点においては玉砂利敷きが出土し13世紀末から14世紀前半には寺院境内地であったと推定されている(滝沢ほか2001)。

さらに12・15・16地点では13世紀前半と考えられる遺構も検出されるようになる。谷戸奥に比べ、若干早い段階での居住が行われていると考えられようか。とくに11・12地点においては、明確な遺構は確認されていないものの中世以前の落ち込みや遺物包含層も存在しており、近隣における古代の遺跡の存在を意識させる。

ちなみに古代には名越ヶ谷の開口部付近を古東海道が東西に貫いていたとされ(現在の県道鎌倉・葉山線に重なるルートと、県道の南側の道路を通るルートが想定されている)、現在の県道を挟んで西側に広がる米町遺跡では、古代の遺構・遺物も検出されている。官道としての東海道が鎌倉を通っていたのは8世紀までであるが、道自体は引き続き東西を結ぶ主要な交通路としてあったと考えられる。人や物資が行き交う交通路周辺はおそらく旧「名越」地域でも早くから居住地として土地利用が行われていたのであろう。名越ヶ谷開口部における古代遺物の出土も、それらを裏付けるものと考えられる。

しかしながら、先述のように谷戸内で明確な遺構が確認できるのは開口部の13世紀前半が上限であり、谷戸の奥へも居住が拡大したのは13世紀中頃以降という調査成果であった。地形的な制約もあり、古代には谷間での積極的な居住は行われなかったのであろうか。

緊急調査の場合、建築によって破壊を受けない深度の遺跡は保存されるため、遺跡の最下層まで調査が及ばない場合もある。その意味では土地利用の開始について言及する資料として十分でないかもしれないが、おおよその土地利用の傾向は把握できるだろう。

丘陵部に目を移すと、名越ヶ谷にはやぐらも数多く存在していることがわかる。今回実測調査の対象となったNo.81～83のやぐら群のほか、No.452、No.145などである。山王谷の東の支谷に存在するNo.452遺跡では、実際に発掘調査が行われ、やぐら前面の掘立柱建物も検出されるなど14世紀代の様相が明らかになっている。

今回調査対象となった北側丘陵におけるやぐら内の石塔調査でも、最も古いもので14世紀前半の年代が与えられており、ほぼ同時期にやぐらの盛行を見ることができる。

同じ丘陵の反対側斜面、すなわち浄明寺側に面する斜面にも多くのやぐらが存在している。代表的なものが釈迦堂東やぐら群(No.157)、釈迦堂奥やぐら群(No.80)である。釈迦堂奥やぐら群は50基のやぐらが確認される大規模なものであった。そのうちの1基からは元弘三(1333)年銘の五輪塔地輪が出土している。銘に記された日が新田義貞の鎌倉攻めによって北条氏一門が東勝寺で自刃した日から数えて初七日に当たることから、北条氏の墓所とも言われている。

この釈迦堂谷は、東に隣接する犬懸谷とともに名越ヶ谷とは歴史的にも切り離せない存在である。『源

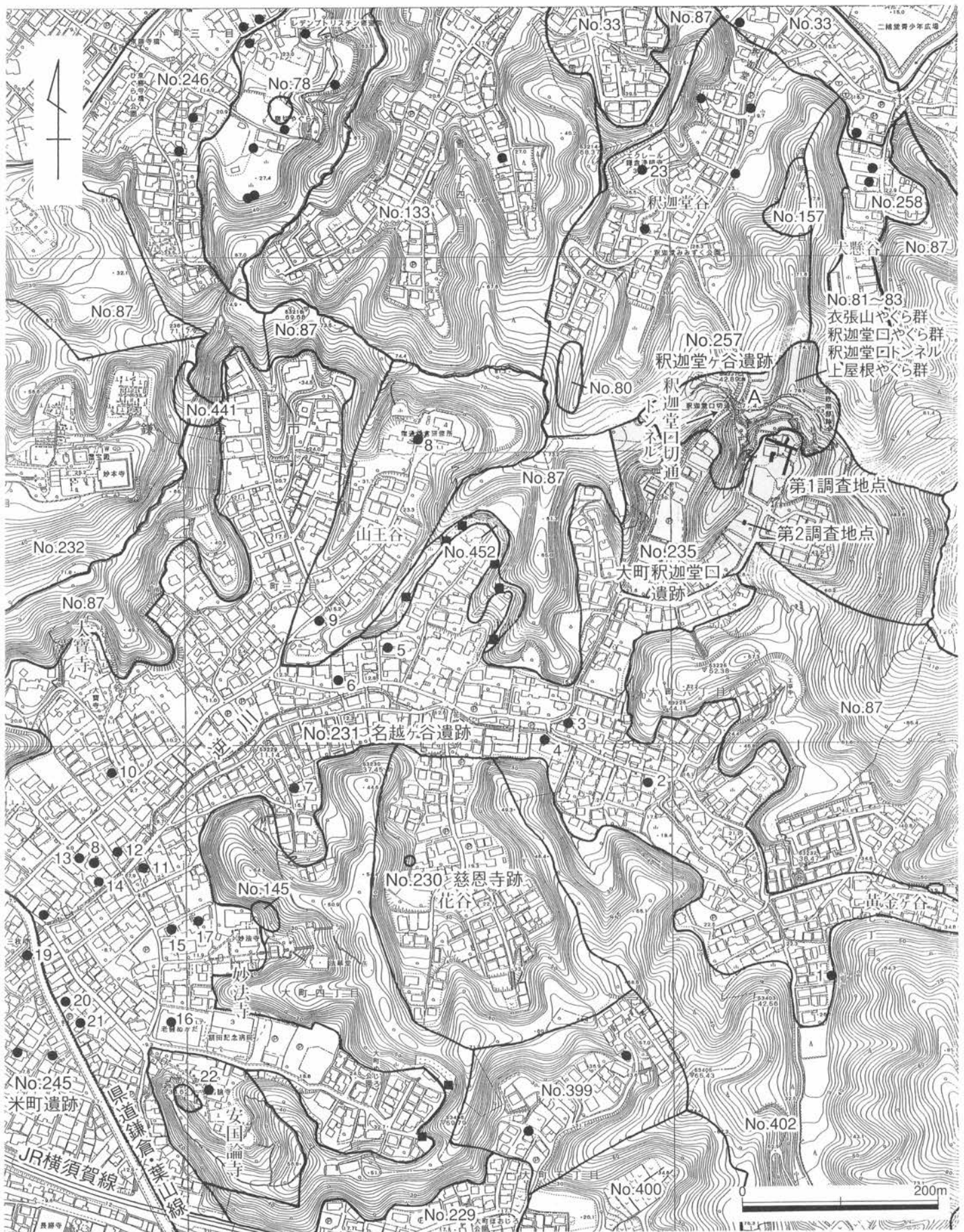


図2 調査地点と周辺の遺跡

平盛衰記』より、これらの谷の間には現在の浄明寺側と大町側を南北に繋ぐ中世以前の道が存在したことが知られる。小坪合戦の際に和田義茂が通ったとされ、杉本方面から犬懸坂を越え、名越へと向かう道である。

釈迦堂谷は現在、釈迦堂口切通(トンネル)によって今回の調査地点がある谷の西側の支谷と繋がっている。近世の地誌類にも記載はなく、当時も現在のような隧道であったかは不明であるが、隧道の上には東西方向に通じる道があり、切岸状の地形もある。さらにその東側にも、釈迦堂谷方面と当該調査地点を結ぶ箇所に崖を切通した場所がある(図2:A)。この場所は『『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査』の際に発掘調査が行われ、堀切状の遺構が確認された。過去には交通路として存在していたらうとの見解が示されている(鈴木2001)。この道が『源平盛衰記』に記された道かどうかは不明ながら、南北交通路の存在は明らかであり、少なからず人の往来はあったのだろう。

釈迦堂ヶ谷は全域が釈迦堂ヶ谷遺跡(No.257)の範囲となっており、これまでに数か所の発掘調査が行われている。23地点では谷戸奥の平場が調査対象となり、14世紀中頃から後半頃にかけての建物跡や大型土坑群、井戸などが出土した(手塚ほか1989)。今回の調査地と同様、尾根を切り崩し、谷を埋めて平坦地を造りだしている様子が見られる。削り出した平坦地の周囲ではやぐら2穴が新たに検出された。そのほかの調査地点でも14世紀代の遺構が検出されており、今回の調査地点と同時期に谷戸利用されていたことがわかる。

さて、上述のように名越ヶ谷において13世紀以降に開発された谷戸内の生活痕跡は少なくとも15世紀までは確認することができる。しかし、16世紀以降の様子となると発掘調査・文献ともにほとんど明らかにされていないのが現状である。

その後の土地利用を知ることができるのは、明治期に作成された迅速図などの地形図である。縮尺は小さいながら、当該地に住宅はなく耕地として描かれていることがわかる(後掲図48)。おそらく江戸末期の状況も同様であったのだと推定できる。

昭和21年に米軍の撮影した航空写真からは、その状況が戦後まで続いていたことがわかるが(図版1-2)、昭和30年代から40年代にかけて急速に周辺の開発も進み、現在のように谷戸奥まで住宅が建ち並ぶ景観となった(図版1-1)。

その中であって当該地は、現代に至るまで土地の所有者も数回変わったものの、丘陵のやぐらや谷戸の景観もよく残されており、往時を多少なりとも垣間見ることのできる市内でも数少ない場所となっている。

【名越ヶ谷内における発掘調査地点と既刊行報告書】

1: 森2004a 2: 汐見2004 4: 宗基1998 5: 玉林1986 6: 森2004b 8: 斉木1990

11: 田代1995 12: 手塚2002 13: 滝沢ほか2001 14: 福田2003 15: 汐見ほか2000

16: 滝沢ほか2003 18: 宮田2003 21: 滝沢2006 22: 松尾1983

3、7、9・10、17、19・20地点は現在整理作業中

やぐら: 鈴木ほか2000、池田ほか2001、鈴木ほか2002、鈴木2005、井関ほか2005、鈴木ほか2005

第3節 調査の経過

調査に用いた測量基準点は、鎌倉市3級基準点(No.53120)と鎌倉市4級基準点(D086・D087)を基に、調査地点内に調査測量基準点を設定した(図3)。

調査は2008年7月より開始し、同年12月まで行った。第1調査地点、第2調査地点の調査を同時並行で進め、途中8～10月は北側丘陵部のやぐらの測量も実施した。11月にはやぐら内の石塔調査も行い、貴重な計測結果を得ている。

第1調査地点においては、まず第1トレンチから調査を開始し、順次第2～4トレンチの掘削も行った。当初第3・4トレンチは8mの間隔を空けて設定していたが、途中の土層堆積状況等を把握するため、両者の間も調査対象として第5トレンチを設定し、9月より調査を開始した。

第5トレンチまで調査を終えたところで再度文化庁・神奈川県と今後の調査の進め方について打ち合わせを行い、10月からは第6トレンチの調査に着手した。

発掘調査が終了したのは11月末日である。12月3日には調査用の機材を全て回収し、4日に調査地点の全景空中撮影を行った。2月には遺跡見学会を実施し、約300人の来場があった。調査区の埋め戻しを行ったのは3月末日である。その際、遺構保護のため遺構面から30cmまでは山砂で覆った。これにより、調査の全工程は終了した。以下、調査日誌を抜粋する。

平成20(2008)年

- 7月31日 調査開始、重機による表土掘削開始。
- 8月1日 第1調査地点の表土掘削と併せて、発掘機材の搬入。 4日 第2調査地点の掘削開始。
 - 11日 第1調査地点第1トレンチの西側、第2トレンチの北側から面出し作業。 13日 第2調査地点1面の写真撮影。
 - 15日 第1調査地点第3・4トレンチの掘り下げ。19日 第1調査地点に測量原点の移動を行う。
 - 20日 第2調査地点と丘陵部に位置するやぐらに測量原点移動を行う。
- 9月2日 第2調査地点の位置図の作成。 11日 日月やぐら、唐糸やぐらの調査に入る。
 - 5日 第1調査地点第4・5トレンチの掘り下げ。 17日 日月やぐら、唐糸やぐらの実測作業に入る。
- 10月2日 第1調査地点第5トレンチ南側、土坑の掘り下げ。9日 第1調査地点第6トレンチ、表土掘削の立ち会い。
 - 17日 第2調査地点の西壁セクション図作成。 22日 第1調査地点第5トレンチ、火葬跡セクション図と写真撮影。
 - 23日 第1調査地点第5トレンチ、火葬跡の作図。
 - 30日 第1調査地点第6トレンチ、2面へ掘り下げ開始する。第1調査地点周囲のやぐらの分布調査に入る。
- 11月5日 第1調査地点第6トレンチの拡張を行う。礎石3個、石組み雨落ち溝の検出。第1調査地点第6トレンチ、P53で埋納された常滑壺を検出。
 - 13日 第1調査地点第6トレンチ第2面の全測図作図。
 - 21日 第1調査地点第1～6トレンチ、セクション図の作図準備が行われる。第2調査地点第4面平面実測図の作成。
 - 25日 第2調査地点東壁セクション図の作成。
- 12月3日 調査終了。すべての調査が終わり、発掘機材の撤収を行う。

平成21(2009)年

- 2月7日 現場見学会を開催。市民に発掘調査の成果を公開する。
- 3月31日 第1及び第2調査地点の埋め戻し完了。

この間、平成20年6月17日・8月22日に文化庁記念物課の坂井秀弥主任調査官(当時)、10月3日・11月26日に文化庁記念物課の佐藤正知主任調査官による現地視察・指導を受けた。また、10月1日には鎌倉市文化財専門委員の河野真知郎氏、10月2日には同じく鎌倉市文化財専門委員の山本暉久氏による現地指導を受けた。10月16日には鎌倉市文化財専門委員の現地視察、12月2日には市議会文教常任委員会の現地視察を受けた。調査終了後の12月10日には、鎌倉市文化財専門委員の鈴木亘氏に第6トレンチ建物跡と地下の版築様盛土についての見解をうかがった。

第2章 遺構と遺物

第1節 第1調査地点の調査

1. 調査区の設定(図4・5)

第1調査地点とした谷戸最奥の平場は、北・東・西の三方を崖面に囲まれている。一部は垂直に切り立ち、過去のある時期に人為的な削り出しを行い平場を拡張したものと考えられる。その時期や過去の土地利用状況、旧地形等を明らかにするため、平場の北・東・中央にトレンチ状の調査区を設けた。掘削順に第1～6トレンチとした。

第1トレンチは東西方向に長く、長さ36.4mである。両端はそれぞれ崖面に接するように設定した。トレンチ東端の崖面上数mの所にはやぐらがあり(図4：27～29)、崖面に造られた階段で前面まで上がることができるようになっている。第2トレンチは第1トレンチに接して北側に設定した。長さ10m、トレンチ北端は平場の奥に達する。第3～5トレンチは北東から南西方向に設定した。第3・4トレンチは長さ10m、それらに挟まれる第5トレンチは長さ8mで、最終的には連続して全長28mの長いトレンチとなった。北東端で第1トレンチと接している。第1～5トレンチに囲まれた平場中央には、遺構の面的な展開を確認する目的で5m×11mの第6トレンチを設定した。

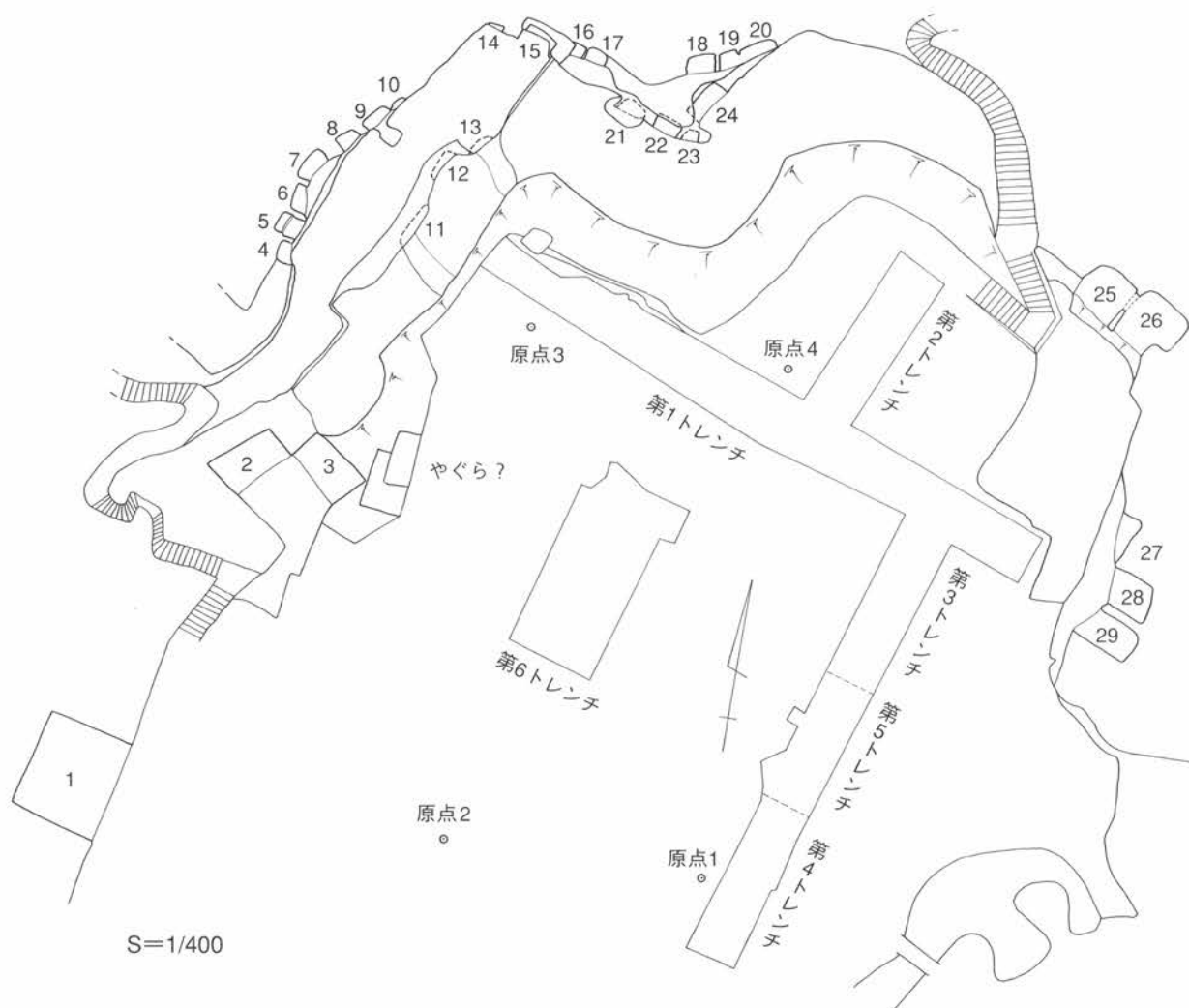


図4 第1調査地点トレンチ・やぐら位置図

2. 基本土層

土層堆積状況は、第1トレンチから第6トレンチまでの各トレンチにおいて、トレンチの壁を利用して観察した。その結果、表土下の土層は土質の違いなどから120層以上に分層することができた。そのうち、中世以前の生活面は7面確認できている。また、その下には岩盤削平面が存在する。

同時に、この第1調査地点は現在でこそ起伏の少ない同一の平場となっているが、過去の造成・土地利用の状況は谷戸の南北や東西で時期・方法が異なっており、それによって生活面の数もトレンチ間で異なることが明らかとなった。そのため発掘調査段階で記録した土層・生活面のトレンチ間での対応関係も複雑となっている。

個別遺構の記述を行う前にそれらを整理しておく必要があるだろう。まずは生活面の対応関係を記し、それらを構成する土層の説明を行うことにする。ただし120層以上に分層した土層の全内容をここで提示するのは煩雑になろう。そこで、土層については造成の時期から大きくⅠ～Ⅴの5層に分け、さらにその中を、生活面の構成時期で細分し、基本層序とした。

(1) トレンチ間における生活面の対応関係(表1)

前述の通り、トレンチごとに確認できた生活面の数が異なっているため、まずはそれらの対応関係を整理しておく。生活面の時期は面の造成・使用時期を元にして、古い順に1期～3期に分けた。使用時期・同時性の根拠は主に面の構成土中や生活面上で出土した遺物の年代である。遺物の詳細については後述する。

表1 第1調査地点 検出面・構成土対応表

	第1トレンチ		第2トレンチ	第3～5トレンチ	第6トレンチ	構成土
	西側	東側				
3期	1面 2面	1面	1面	(第3トレンチ) 1面	1面	Ⅱ層
2期	3面 4面 (5面) (6面)	2面		2面	2面	Ⅲ・Ⅳ層
1期	7面 (岩盤削平面)			3面 4面 (岩盤削平面)		Ⅴ層

(2) 土層説明(図6)

Ⅰ 層 近現代堆積土層。

Ⅱ-1層 第1トレンチ西側1面構成土。径5cm程度の砂岩を主体とする、しまりのある褐色土。トレンチ北西側に迫る崖面からの崩落土や後世の攪乱により残存状況は不良。トレンチ中央より東側には同様の層は見られない。

Ⅱ-2層 第1トレンチ西側2面構成土。砂岩粒を主体とする褐色土。Ⅱ-1層と同様、残存状況は不良で、トレンチ東側に同様の層はない。

Ⅱ-3層 第1トレンチ東側1面及び第3トレンチ1面構成土。径5～20cmまでの砂岩を多く含む暗褐色砂質土を主体とする。第2トレンチ北側は丘陵裾となっており、斜面の崩落土が堆積している。第3トレンチでは地形に沿って南ほど厚みを増す。南端は土留めがなされており(石積み1、図中E-F②：a)、Ⅲ-3層上に1段高く盛土した様子がうかがえる。

Ⅱ-4層 第6トレンチ1面構成土。しまりのある暗褐色土を主体とする。径10cmまでの土丹、砂岩

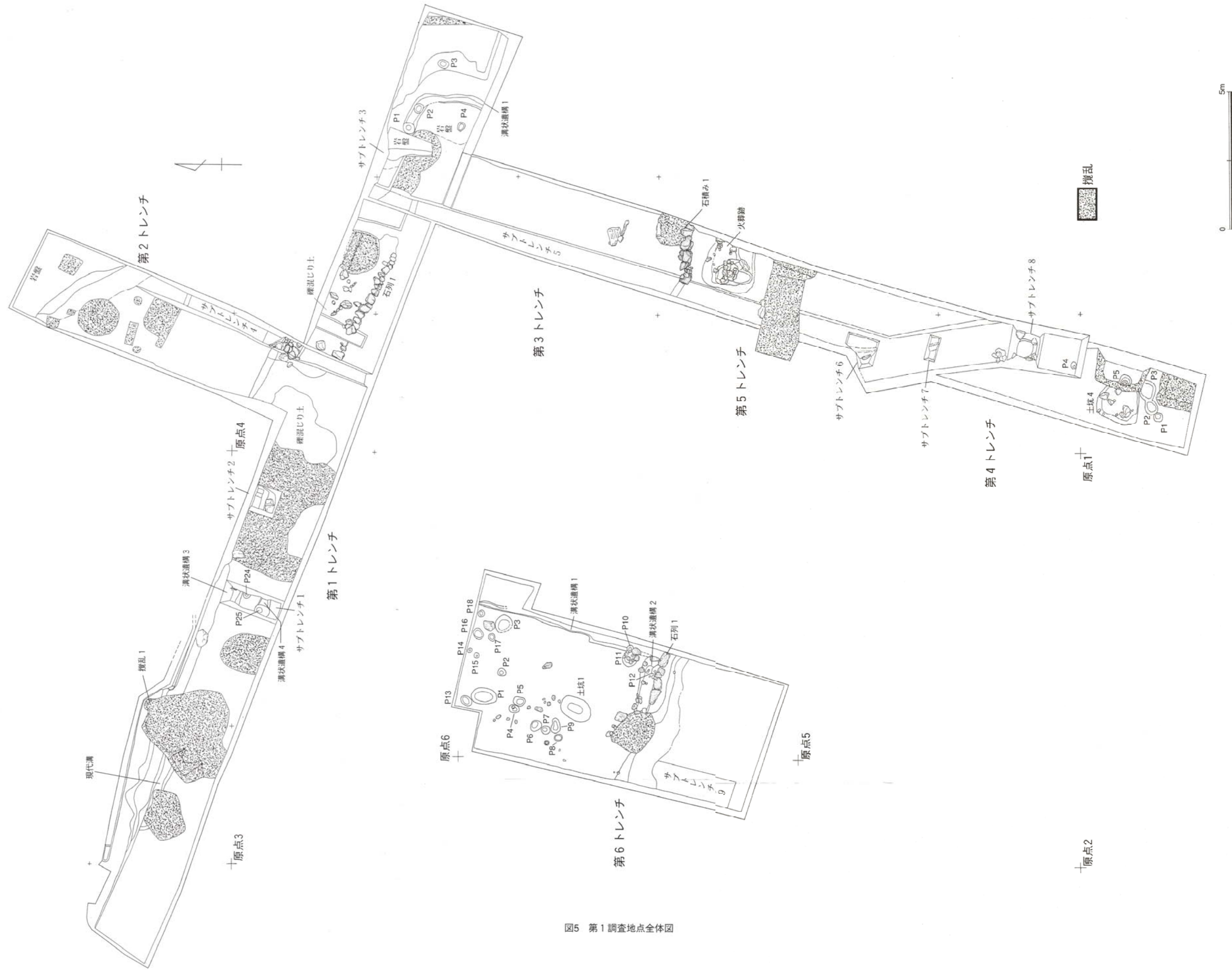


図5 第1調査地点全体図

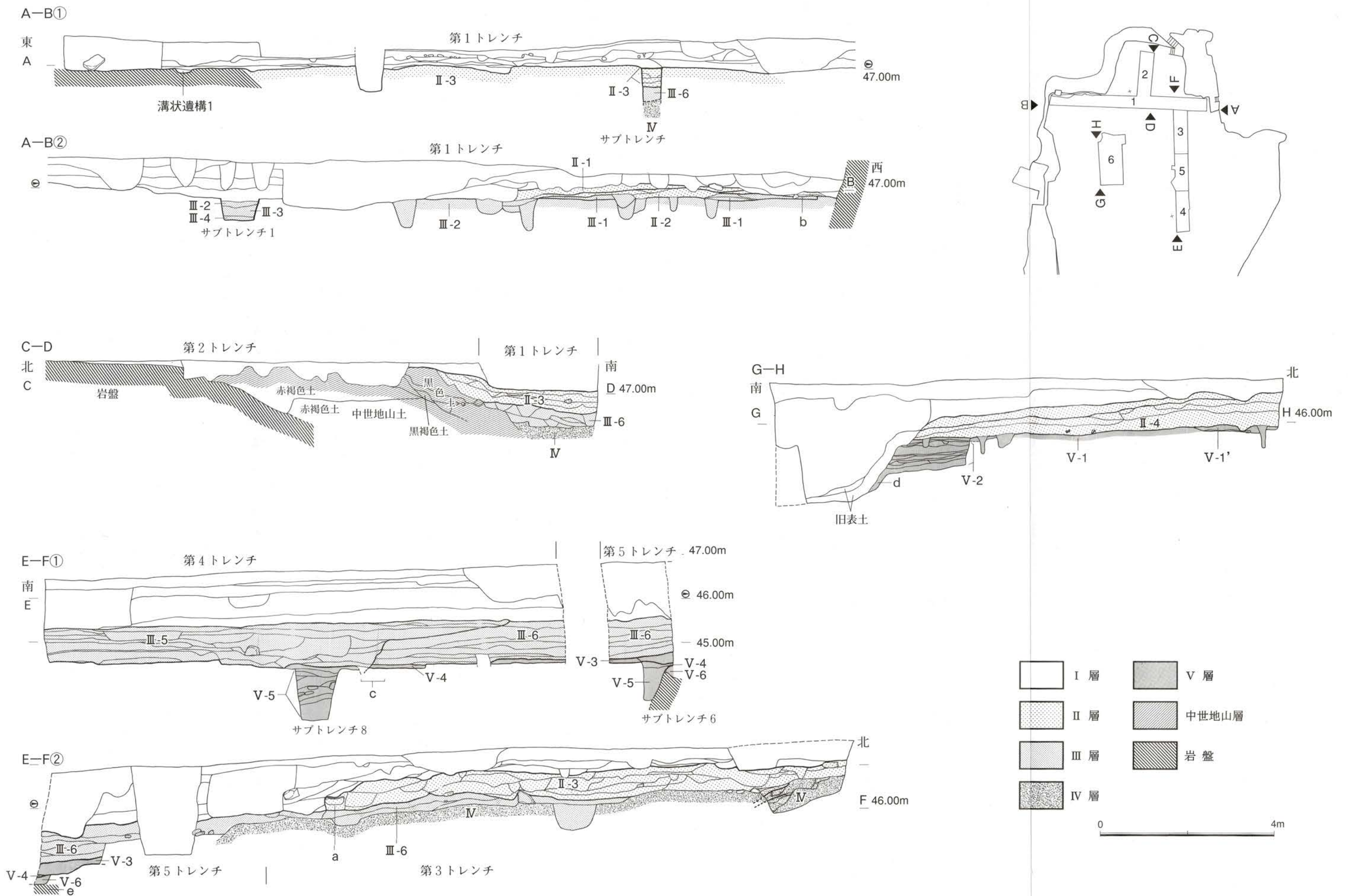


図6 第1トレンチ土層断面図

を多く含む。

- Ⅲ-1層 第1トレンチ西側3面構成土。しまりのある褐色土が主体となる。砂岩粒を多く含む。上面はしっかりした硬化面で、岩盤付近では炭化物の堆積も見られる(図中A-B②：b)。
- 2層 第1トレンチ西側4面構成土。炭化物を含む暗褐色土で、Ⅲ-1層直下で確認できる。
- 3層 第1トレンチ西側5面構成土。粘性ややあり、しまりのある暗褐色砂質土。サブトレンチ1内でのみ確認できた。
- 4層 第1トレンチ西側6面構成土。炭化物、焼土粒を含む褐色砂質土を主体とする。サブトレンチ1内でのみ確認できた。
- 5層 第4トレンチ2面構成土。Ⅲ-6層より新しい盛土。上層は径5cmまでの土丹を多めに含む淡茶灰色の砂質土を主体とするが、南半分は層間に堆積する粘質土の割合が高くなる。
- 6層 第1トレンチ東側、第3・5トレンチ2面構成土。第1・3トレンチでは比較的薄く、5トレンチでは厚く堆積する。第1・3トレンチでは、中世地山上の大型砂岩造成土(Ⅳ層)の上に盛土された整地層として確認できる。砂岩粒を主体とするしまりのある褐色砂質土で構成される。第5トレンチでは、上層は第3トレンチと同様の砂質土だが下層は淡褐色の粘質土が主体となる。第4トレンチで段差が確認できるように(図中E-F①：c)、もとは3面上に一段高く盛られた造成土である。この段差に向かって傾斜する2面上には、黒色土が薄く堆積している。
- Ⅳ層 第1トレンチ東側、第3・5トレンチ2面構成土の最下層。丘陵の自然堆積層上に盛土された大型砂岩主体層である。径50cmを超えるものも含まれる。
- Ⅴ-1層 第1トレンチ西側7面及び第6トレンチ2面構成土。小礫・砂岩粒を少量含む褐色の砂質土。サブトレンチ1内では削平された岩盤上に堆積する。第6トレンチにおいてはⅡ-4層下で確認できている。
- 1'層 第6トレンチ2面構成土。しまりのある黒色粘質土。Ⅴ-1層上に薄く堆積する。
- 2層 第6トレンチ2面下版築様盛土層。粘性・しまりのある黒色土・暗褐色土と、しまりの弱い褐色砂質土が互層となっている。それぞれの層厚は非常に薄く重なりは緻密である。確認できた最下層(図中G-H：d)は径10cmまでの土丹を多く含むしまりのある灰褐色土である。
- 3層 第4・5トレンチ3面構成土。茶灰色粘質土層。
- 4層 第4・5トレンチ4面構成土。細かい土丹を主体とした土層。硬くしまる。
- 5層 第4・5トレンチ4面下無遺物粘質土層。黒灰色粘質土と赤褐色粘質土の互層となっている。自然堆積の可能性もある。
- 6層 第5トレンチ4面構成土。灰褐色砂質土。サブトレンチ6・7において確認できた平坦な岩盤(図中E-F②：e)上に堆積している。

3. 検出した遺構

(1)第1トレンチ

1 土層堆積状況(図6～8、図版2)

第1トレンチは北西側と東端が岩盤の露出する崖面に接しているため、土層堆積状況はトレンチの南壁と、3箇所のサブトレンチ(サブトレンチ1～3)、攪乱1(図8)の壁で観察した。

その結果、谷戸奥の造成の状況がトレンチの中央を境に西と東で異なることが明らかとなった。ただ、トレンチ中央部は広範囲にわたって近現代の大幅な攪乱を受けており、トレンチ東半部と西半部の2面以

土の整地層が続いている。

トレンチ中央では現代の攪乱により1面構成土が大幅に削られている。西半部1面では北側に接する岩盤際に東西方向の溝が確認できたが、出土遺物などから判断して現代の溝の名残であると考えられたため、個別の遺構図は作成していない(前掲図5：現代溝)。

ちなみに、第1トレンチを設定した場所には、最近まで建っていた建物の基礎や枳などが存在していた。それらを解体する際、重機で撤去したようであり、所々にその痕跡が残されていた。一部は基盤の岩盤まで掘削が及んでおり、トレンチの西では期せずしてその掘削痕の側面で土層の堆積状況を確認することができた(図5・8：攪乱1)。

ピット(表2、図9、図版4)

ピットは4基検出した。ピットの大きさ・覆土は表2のとおりである。P1～3はそれぞれ80cm、185cmの間隔で一直線上に並ぶ。P1・2は溝状遺構1と重複している。P4はP2の南側に位置する。間隔は165cmである。P1～3列の東側延長には、上方の崖面にやぐら28・29が存在しており、何らかの関係性も想定できよう。遺物は出土していない。

溝状遺構1(図9、図版2・4)

トレンチ東端、表土直下の岩盤上で確認した。最大幅40cmで、確認面からの深さ10cm、確認できた長さは約3mである。トレンチ南壁から北西へ、カーブを描きながら延びており、その断面を第1トレンチ南壁で確認している(前掲図6：A-B①)。覆土は黒褐色の砂質土。西側の延長は攪乱により壊されているが、サブトレンチ3のセクションに見える第2層がその延長かもしれない。南端は調査区外へ延びるため、全体的な形状は不明である。遺物は出土していない。

石列1(図5・10)

第2トレンチとの交点付近で検出した。1面上に径10～60cmまでの砂岩が一直線に並んでいる。石に加工痕などは見られない。石列は基本的に上下に1～2段、前後も1列のみの配置であった。残存長は4.3mで、両延長は後世の土地利用によって壊されてしまった可能性がある。

石の面が揃っているのは南側であり、石列の北側には裏込めとおぼしき礫混じりの土が残っていた。第2トレンチを挟んで西側にも、石列の北側に堆積していたものと同じ礫混じりの土が堆積していた。同じく裏込めの土であれば石列の西の延長はここまで達していたかもしれない。

第2トレンチの項でも述べるが、石列の北側はある時期まで丘陵が迫っていたと考えられ、そこからの崩落土等に対する土留めとして構築されたものと判断した。

上面からかわかけ片は出土しているが、裏込め土内からの出土遺物はなく明確な構築時期は不明である。1面上に構築されていることからほぼ同時期のものと一応は結論づけておく。

表2 第1トレンチ東1面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P1	46	38	24	円形	黒褐色砂質土 しまりなし、径3cmまでの砂岩粒非常に多く含む	溝状遺構1と重複
P2	36	30	12	円形	P1と同	溝状遺構1と重複
P3	40	29	24	円形	P1と同	
P4	34	25	14	円形	P1と同	

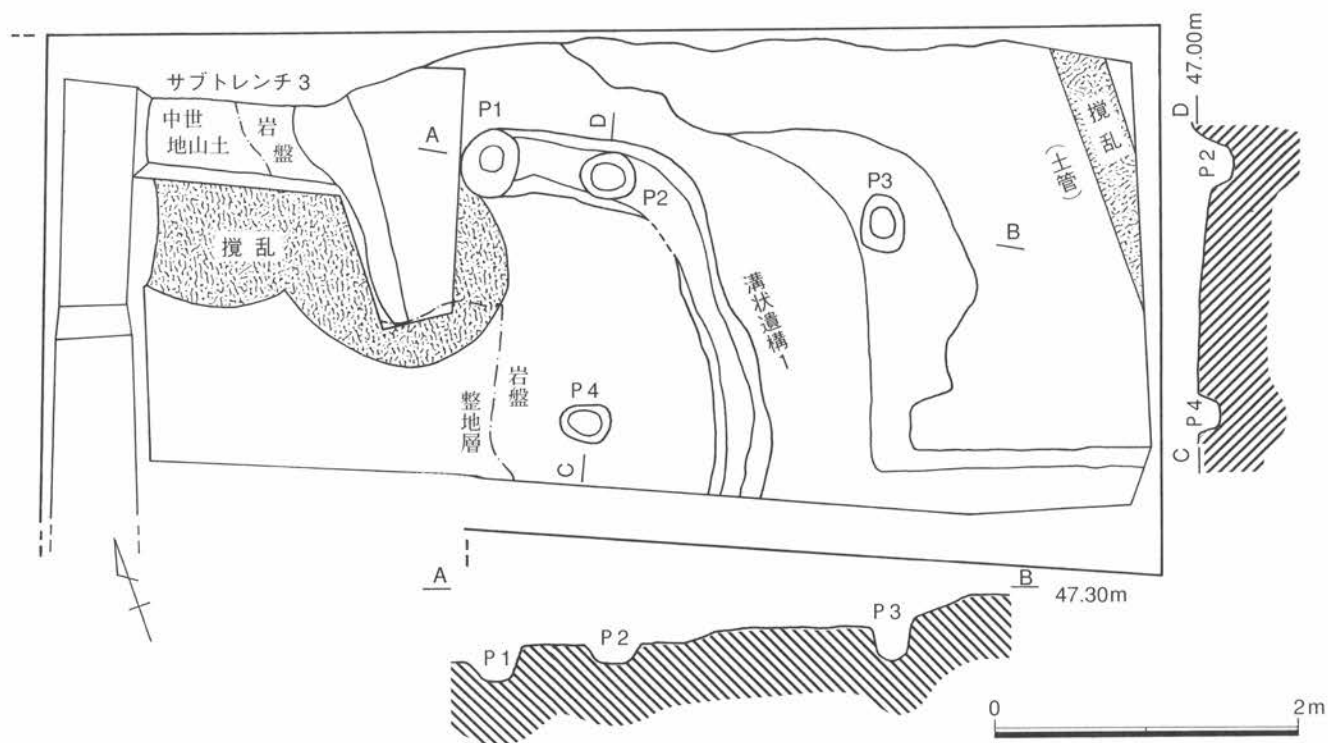


図9 第1トレンチ東1面 ピット・溝状遺構1実測図

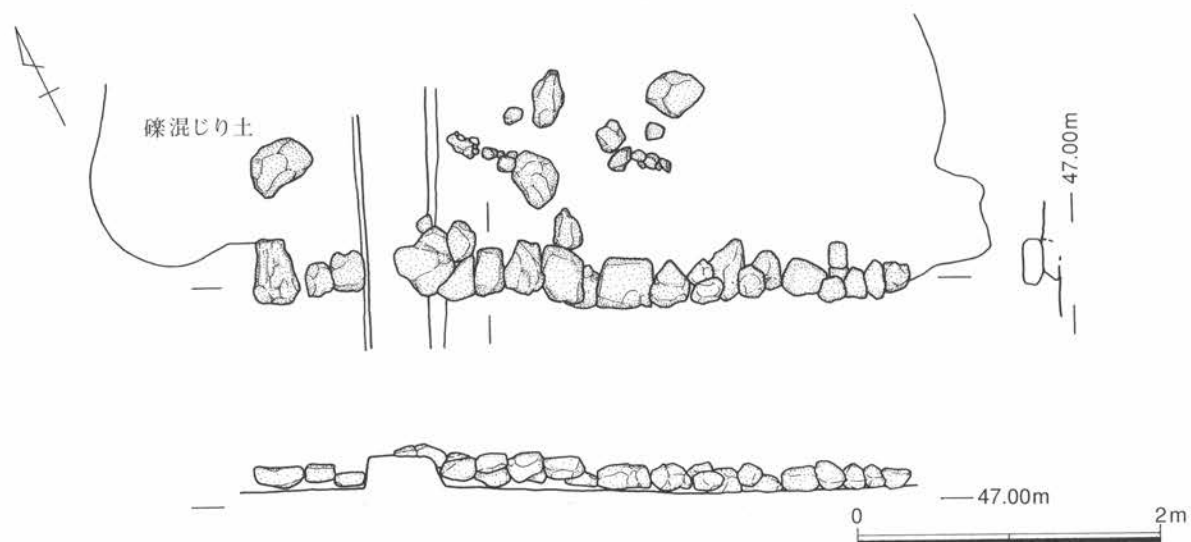


図10 第1トレンチ 石列1実測図

3 2面の遺構(表3、図11、図版4)

第1トレンチについては、西半部のみ1面下まで調査を行った。1面を構成している粒径の大きい泥岩・砂岩主体層を除去すると、より粒径の小さい泥岩による整地層が現れる。この面を2面とし、ピット・土坑を確認したが、1面と同様、上層からの掘り込みなどで面の残存状況は非常に悪い。

ピット(表3、図11、図版4)

ピットは4基検出した。東西方向に一直線上に並んでいる。P5・P6・P7bの間隔はいずれも約1mであるが、深さも浅く建物の柱穴とは考えがたい。規模と覆土については表3に記した。

土坑1(図11、図版4)

トレンチ北西角で検出した。西は岩盤に接しており、平面形は南北に長い半月状である。長さ1m、幅は最大で20cm、確認面からの深さは約30cmである。覆土は単層で、粘性のある黒色土である。径2cmまでの土丹粒を非常に多く含む。底では3面に属する炭化物層を確認している。

土坑2(図11、図版4)

土坑1の南側で検出した。南側は調査区外まで続いているため全体の形状は不明である。溝状になる可能性もある。長さ1m以上、最大幅は34cm、確認面からの深さは20cmで、覆土は土坑1と同じである。土坑1と同様、底で3面に属する炭化物層を確認した。

4 3面の遺構(図11、図版5)

2面で検出した土坑1、2の底で炭化物層を確認し、さらに攪乱1の西側壁においても2面を構成する泥岩地形層の下で炭化物層と整地層が確認できていたため(前掲図8：2層)、2面下に生活面が存在することが確実であった。そのため文化庁・神奈川県教育委員会に相談した上、許可を得て2面構成土を掘り下げた。全体的に整地層の広がり確認できたため、3面として遺構確認を行ったところ、岩盤際をめぐる溝とピット1基が確認できた。

また、とくに遺構としては報告しないが、3面上で馬の歯4本が出土した。詳細は遺物の項で述べる。

ピット(図11、図版5)

1基確認し、P8とした。西側の炭化物集中箇所(後述)の上から掘り込まれている。平面形は円形で、長径43cm、短径39cm、深さは20cmである。覆土はしまりの弱い褐色の砂質土であった。かわらけ片が4点出土した。

表3 第1トレンチ西2面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P5	40	35	10	円形	黒褐色土 粘性・しまりともにややあり径2cmまでの土丹、砂岩粒含む 底部に暗褐色土堆積	
P6	47	43	19	円形	黒褐色土 粘性・しまりともにややあり径2cmまでの土丹、砂岩粒含む	
P7a	22	16	13	方形	同上	
P7b	29	24	10	円形	P1と同	

溝状遺構 2 (図11、図版 5)

最大幅40cm、深さ10cmの溝状遺構である。北側の岩盤に接する形で東西方向へ直線的に延びている。溝中は赤く焼けた焼土で埋まり、底に炭化物の薄い層が残っている(断面は図8：1層)。トレンチ西端では溝としての掘り込みは残っておらず、炭化物が幅広く堆積していた。この炭化物集中箇所はさらに南へ展開するようであったが、なにぶん調査区外となってしまうため範囲などは括めていない。溝の東端にも一部そのような炭化物集中箇所が確認できた。それぞれ図中にスクリーントーンで示した。

溝と炭化物集中箇所以外の確認面上には焼土層などが確認できないことから、火災後の片づけにより地面が削平された結果、焼土・炭化物が堆積していた溝の底部のみ残存したものと考えられた。

遺物は上面からかわらけの小皿が2点出土している(図23：26)。

西端の炭化物集中箇所からは焼骨が出土している。そのため当初は火葬跡の可能性なども想定したが、明確な掘り込みや、焼け締まった地面などは確認できなかった。

5 4面の遺構(表4、図11、図版5・6)

攪乱1の西側壁の断面と調査区南側に設定したサブトレンチから、3面以下にさらに整地層(4面)があることを確認したため、3面上で確認できた溝状遺構1とピットを残して遺構のない部分だけ4面まで掘り下げを行った。表面は西側が非常に硬い。4面上では建物跡としての想定も可能なピットと、土坑を確認した。なお、図11には3面と4面の遺構を一緒に記載している。

ピット(表4、図11、図版5)

P9～23まで、総数15基を確認した。規模等については計測表に記した(表4)。P10・22、P11～14、P17～21はそれぞれ切り合っている。P16とP11～14、P9とP10、P10とP18、P20とP23はそれぞれ約200cmの間隔で並んでいる。柱痕などは確認できなかったが、深さも30cmを超えるものが大半であり建物の柱穴と考えてよいだろう。切り合いも見られることから、建て替えが行われていた可能性もある。ちなみにP11とP17、P11とP14で出土した常滑の甕片が接合している。

P9とP16、P10・22とP11～14の間は約1mであり、同じ建物だとすれば軒の部分と考えられるだろうか。ただ、北側のピットと崖の間は60cmしかなく背後の余裕はほとんどなかっただろう。

土坑3(図11、図版6)

P16の西側に位置する。4面を精査したところ、硬化面上にほかの遺構とは異なる、砂を覆土とする不整形の掘り込みを検出し、土坑3とした。遺構壁面で確認したところ、遺構上面で検出した砂は4面下の層からも出土するようであった。

西側は土層観察用に設定したベルトのために全容を確認することはできなかったが、短径40cm・長径90cmの楕円形と、短径50cm以上・長径70cmの方形の土坑が東西に接したような形状をしている。深さは最大で17cmである。底面からは常滑の甕が出土した。

6 5・6面の遺構(図7・8、図版2)

5・6面はサブトレンチ1、攪乱1の壁面で存在を確認した。遺構などは確認できていない。

7 7面の遺構(表5、図7、図版2)

サブトレンチ1の底で整地層を確認し、7面とした。上面で東西方向へ延びる溝状遺構2基と、ピット

2基を検出した(前掲図7)。当該面構成土の様相が第6トレンチ2面構成土と同一であることを堆積土層より確認したため、これ以上の掘り下げは行わなかった。遺構を掘削したところ、遺構の底部で基盤となる岩盤面を確認した。岩盤面の時期については不明ながら、出土遺物等から判断し、7面の時期と大きく隔たるものではないと判断した。

ピット(表5、図7)

溝状遺構3の南で確認したものをP24、溝状遺構4を切るものをP25とした。いずれも一部がサブトレンチ外へかかっており、全体形状は把握できなかった。規模などの詳細は計測表に記した(表5)。

溝状遺構3・4(図7)

北側の岩盤に接するものを溝状遺構3、その60cmほど南側にあるものを溝状遺構4とした。幅はそれぞれ50cm・40cmで、深さは26cm・30cmである。東西の延長は確認できていない。溝状遺構4はP25と重複している。遺物は溝状遺構3からかわらけの破片、常滑の甕の破片が出土した。覆土はいずれもしま

表4 第1トレンチ西4面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P9	(33)	(14)	38	円形	暗褐色土 粘性弱く、しまりやや弱い。砂質	
P10	55	(22)	43	隅丸方形	黒褐色土 粘性弱く、しまりややあり 砂岩粒含む	P22を切る かわらけ、常滑甕片、 鉄製品出土
P11	54	40	39	隅丸方形	暗褐色土 粘性弱く、しまりややあり。砂質	P13・14を切る
P12	32	30	31	円形	暗褐色土 粘性弱く、しまりややあり。砂質 径2cmまでの土丹小粒若干混じる	
P13	(33)	(8)	26	円形	暗褐色土 粘性・しまりともに弱い 径1cmまでの土丹粒含む	P11に切られる 常滑甕片出土
P14	46	(30)	30	不整 楕円形	1. 褐色土 粘性・しまりともにややあり 径8cmまでの黄色砂岩塊多く混じる 2. 暗褐色土 粘性・しまりともに弱い 砂岩粒若干含む。砂質	P11に切られる 常滑甕片出土
P15	(22)	(17)	26	円形	P9と同	
P16	50	38	41	円形	暗褐色土 粘性ややあり、しまり弱い 径2cmまでの砂岩小粒多く含む。砂質	常滑甕片出土
P17	37	(16)	9	円形	暗褐色土 粘性弱く、しまりややあり 炭化物、砂岩粒含む	P18・20に切られP21 を切る、常滑甕片出土
P18	48	(32)	53	—	P9と同。上層は、しまりあり、砂岩粒含む褐色土	P17・19・21を切る
P19	52	(24)	22	—	P9と同	P18に切られP21を 切る、常滑甕片5、 かわらけ片3出土
P20	62	(24)	36	—	暗褐色土 粘性弱く、しまりあり 炭化物、砂岩粒含む	P17・21を切る
P21	(43)	(8)	—	—	P17と同	P17～20に切られる
P22	(28)	(21)	25	円形	P9と同	P10に切られる
P23	(55)	(25)	65	円形	1. 褐色砂質土 粘性なし、しまり弱い 2. 黒褐色土 粘性なし、しまりやや弱い	

表5 第1トレンチ7面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P24	26	(20)	19	円形	黒褐色土 粘性ややあり	かわらけ小皿片出土
P25	52	(34)	30	不整円形	P24と同	溝状遺構4と重複

りのある黄褐色砂質土である。

(2)第2トレンチ

1 土層堆積状況(図6、図版2・6)

第2トレンチは平場最奥から南北方向に設定したトレンチである。南端は第1トレンチに接する。

土層確認のため第2トレンチから第1トレンチまでを南北に貫ぬくサブトレンチ4を設定した(前掲図5)。

浅い所では15cm程度の表土掘削で平坦に削平された岩盤と丘陵の自然堆積土が確認されたため、それを1面としたが、明確な生活面というわけではない。断面で見ると、それぞれ岩盤、赤褐色土・黒褐色土・黒色土が南へ傾斜しながら堆積する様子がうかがえる(図6：C-D)。

サブトレンチ4の南半は第1トレンチ内を通る。底面で大型砂岩塊による粗造成(IV層)の上面を確認したためそれ以上の掘り下げは行っていない。粗造成の上になされた盛土上面を2面としたが、明確な遺構・遺物は出土していない。2面上にはさらに盛土がなされ1面が形成されている。

第2トレンチでは、自然堆積土の直上に現代の表土層しか確認できなかったため、この場所が平らに掘削された時期については不明である。ただし、第1トレンチ東半部で検出された石列1が丘陵裾の土留めのために機能していたとするならば、掘削は石列1が機能していた時期より後の可能性が高く、第1トレンチにおける1面機能時よりも新しい段階で平らにされたものと判断できるだろう。

(3)第3・4・5トレンチ

1 土層堆積状況(図5・6・12、図版2・3・6)

第1トレンチから第3・5トレンチを通り、南端の第4トレンチまで南北に貫くサブトレンチ5を設定し、西壁で土層堆積状況を観察した(図6：E-F)。第5トレンチと第4トレンチに存在していた近現代の大型攪乱6カ所の側壁も利用した。それぞれ50cm程度の間隔で規則正しく並んでいたが、その間を掘削して攪乱どうしをつなげ、サブトレンチ5と一体にした。攪乱は一部、トレンチを北西から南東へ斜めに横断するように存在していたため、サブトレンチ5もそれに合わせて斜行している。さらに下層の状況を確認するため調査の最終段階でサブトレンチ5の底にサブトレンチ6～8を設定した(図12)。

その結果、当該平場における南北方向の造成の状況が明らかとなり、4面の生活面が確認できた。

1面は第3トレンチにおいて40～50cmほど表土を除去して検出した。上面は近代以降の土地利用で荒らされているが、第1トレンチ1面とほぼ同じ標高である。約1m下層で確認できる2面上に雛壇状の盛土をして造られており、その端部は石積みの土留めがなされている(前掲図6：E-F②a、図13)。盛土は砂岩塊を含む砂質土であり、あまり緻密に造成している様子ではない。

2面は第3～5トレンチ全てで確認できる。第3トレンチでは、大型砂岩塊による造成土(基本土層IV層)の上層にある。第4・5トレンチでは、3面上に1mほど盛土を行うことで平坦面を作り出している。その盛土は2時期に分けられ、まず北側(基本土層Ⅲ-6層)、その後南側に同じ高さで盛土している(基本土層Ⅲ-5層)。第4トレンチ南端では基本土層Ⅲ-5層中に泥岩塊を敷き詰めた層も確認できたが、断面の確認のみで、平面的な調査は行っていない。

3面は、第5トレンチ内の近現代大型攪乱の底面で確認した。茶灰色粘質土の硬化面である。基本土層Ⅲ-5、6層下に存在する。第3トレンチではその延長を確認できていないが、恐らく、基本土層IV層下へ続くと考えられる。第4トレンチ内の大型攪乱底面でも3面とほぼ同じ標高で面が確認できているが、サブトレンチ8付近では硬化面として確認できる土層の堆積(基本土層V-3層)が一部途切れている。その部分では西側に砂岩塊を硬く敷き詰めたような土層と、東側は無遺物粘質土層(基本土層V-5層)上面

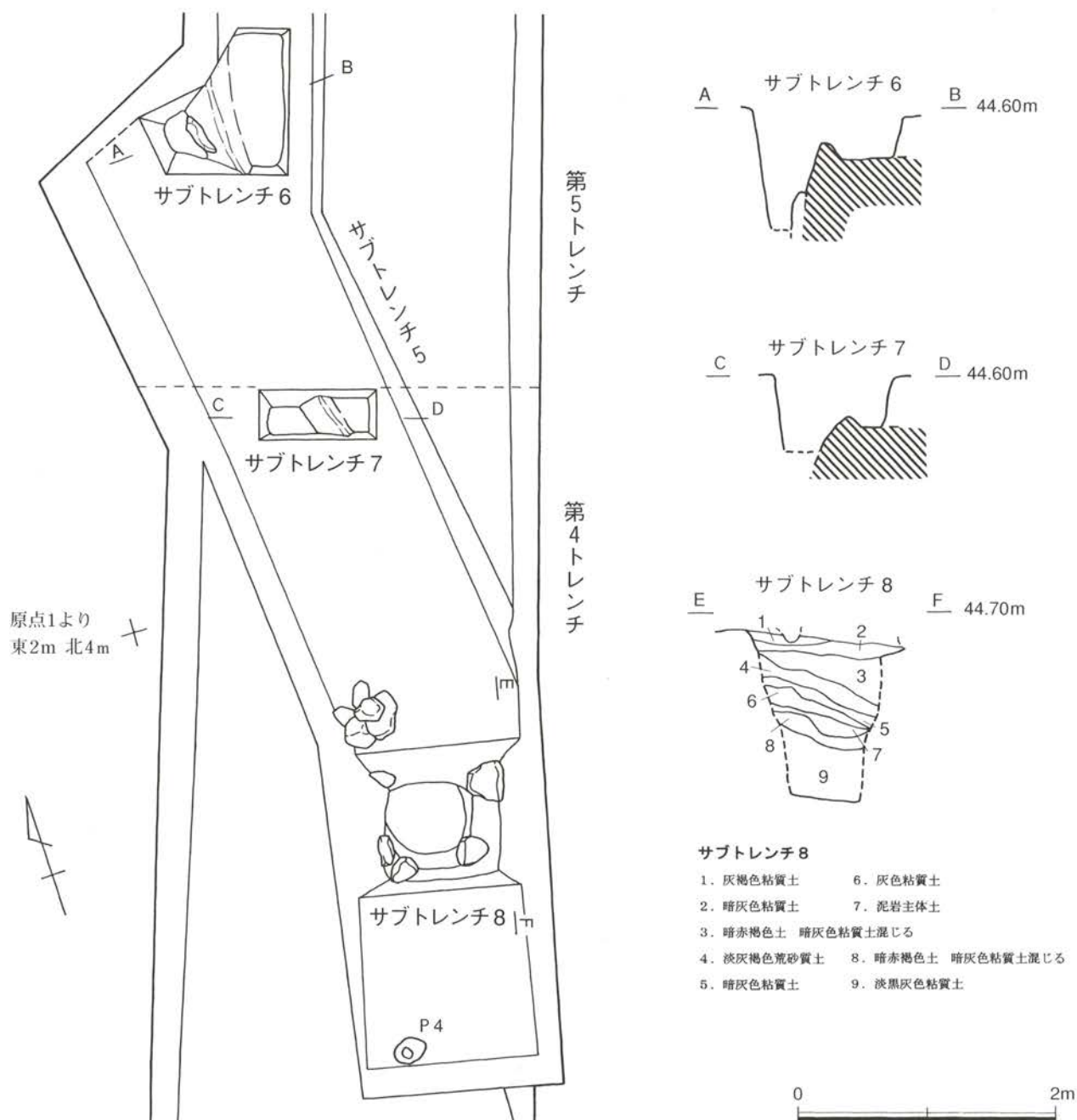


図12 サブトレンチ6～8 平面図・土層断面図

が現れた。

3面下の土層堆積状況については、断続的ながらサブトレンチ6～8を設定して確認した(図12)。サブトレンチ6・7では3面上から約50cm掘り下げたところで岩盤が露出するものの、サブトレンチ8では岩盤を確認することはできなかった。

岩盤の上面は平坦に削平されているが、サブトレンチ5の中央から西側(谷の中央)へは下方へと急激に傾斜している(図12：サブトレンチ6・7断面、図版3)。平坦面の造成のために削平された岩盤の端部であろう。平坦面と斜面との境は幅20cm、高さ10cmほど岩盤を土手状に削り残した痕跡を確認した。削平された岩盤上には整地層が確認できたためその上面を4面とした。

岩盤の平坦面が展開しない西・南側は無遺物の粘質土が堆積している。ピンボールにて状況を探ったが、下層まで同様の土が続くようであった。岩盤が全く確認できなかったサブトレンチ8も同様である。削平

された岩盤はサブトレンチ8より北東側に展開するのであろう。もし無遺物粘質土が自然堆積であるならば、地形的に考えて、谷の堆積土の可能性が高い。

ちなみに近現代の大型攪乱はいずれも平面形は1辺1.5~2.5m程度の方形で、深いものは2m以上掘り込まれている(図5:第4トレンチ南端)。

覆土は径30cmを超えるような凝灰質砂岩や泥岩が主体であり、その間には灰色の砂が充填されていた。砂岩・泥岩は北側丘陵部分の岩質と同一である。建物の基礎とも考えられず、用途は不明であるが、わざわざ砂岩や泥岩を埋める理由もわからないので、それらの石を廃棄するための穴と考えるのが現段階では妥当であろう。覆土中より出土したウィスキー瓶などの遺物から、一部は昭和25年以降に掘られたものと考えられる。すると、戦後のある時期に、付近の岩盤を削って埋めたということになるだろうか。その原因については知るよしもないが、平場最奥(第2トレンチ付近)の掘削などが考えられるだろう。

2 1面の遺構

第3トレンチにおいて検出した。第1トレンチ東端1面とほぼ同じ標高であり、第1トレンチ1面とともに当該平場の最上段面を構成していたと考えられる。ただ、近年まで存在していた建物の基礎や配管によって上面が壊されているせいか、明確な遺構はほとんど確認できない。前述のように当該面は過去に雛壇状の造成によって造られたものであり、南側に展開する2面との間には1mほどの段差がある。その部分に施された石積みの土留めを遺構として報告する(石積み1)。

石積み1(図13、図版6)

第3トレンチ南端で検出した。攪乱を掘削したところ、その南縁で東西方向に並ぶ石列の一部が出土したため延長を追い、東西の調査区外へも石列が続いていることを確認した。続けて石列前面の堆積土を除去し、石積み全体をあらわにした。土層断面から、1面造成時の段差部分であることが判明した。石列前面の堆積土中からはかわらけ片が出土している。

石材は凝灰質砂岩で、最大で長辺約80cm程度である。大小取り混ぜて比較的乱雑に3~4段ほど積まれていた。石垣と言うよりはむしろ簡易な土留めとして構築された印象である。

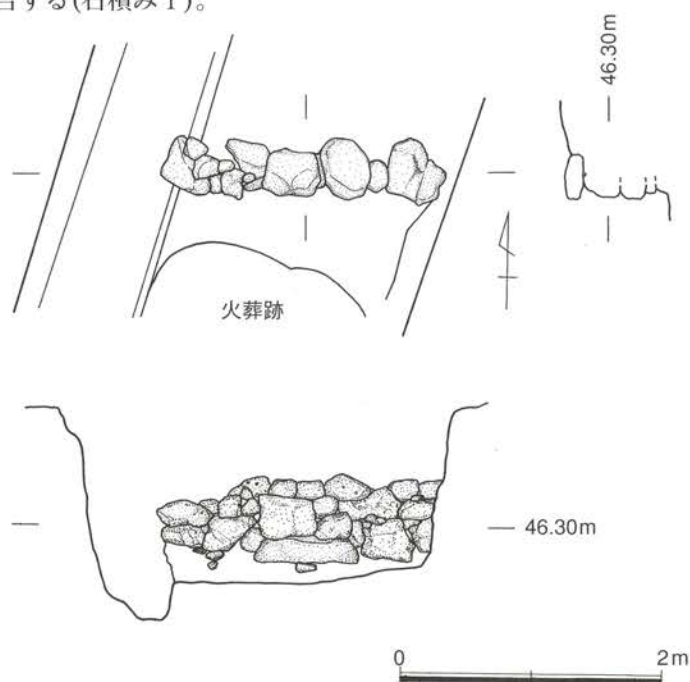


図13 第3トレンチ1面 石積み1実測図

3 2面の遺構

石積み1より南側、第4・5トレンチでは2面が中世最上面となる(図5)。サブトレンチ5西側断面を見るとこの面は北側1面下へも続いていることがわかる。この堆積状況から、もともと1面が形成される前段階として当該平場では谷戸奥へも2面が広がっていたが、ある時期2面北側に雛壇状の盛土を行って1面を形成し、石積み1で土留めをしたものと推測できた。恐らく造成後も、2面と1面は同時に生活面

として使われていたのだろう。

第3トレンチ南端から第5トレンチにかけては明確な硬化面として2面を確認できる箇所もあるが、以南は近現代の大型攪乱によって2面以下が相当掘り返されてしまっていた。そのためか2面上で検出した遺構は少ないが、かわらけ埋納遺構と土坑2基、ピット4基を検出した。

ピット(表6、図5・14、図版6)

土坑4の南側で3基検出し、東から順にP1～3とした。東西に並んでいるが、いずれも浅く掘り方もややいびつで、柱穴などになりそうな深さではない。P3は北側を攪乱に切られている。遺物は出土していない。規模等は計測表に記した。

土坑4(図5・14、図版6)

第4トレンチ南半で検出した。東側の一部が攪乱により切られている。平面形は不整円形で、最大径は170cm、確認面からの深さは20cmである。覆土1層中は土丹の塊を大量に含む暗茶褐色粘質土、2層は灰褐色砂質土であった。火葬跡と規模は類似しているが焼けた痕跡などはなく、性格については明らかではない。遺物は、青白磁梅瓶の破片、かわらけが出土している。

合わせ口かわらけ埋納遺構(図15、図版6・7)

石積み1の1mほど南で、径16cmを超える大口径のかわらけ2枚が口を合わせた状態で出土した。2面精査中に伏せたかわらけの底を確認し、存在が明らかになったものである。その出土状態から意図的に埋

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P1	34	34	21	円形	褐色土 粘性ややあり、しまりあり 径2cmまでの土丹粒多く含む	
P2	60	43	24	楕円形		P3と重複
P3	(74)	60	24	楕円形		攪乱に切られる P2と重複

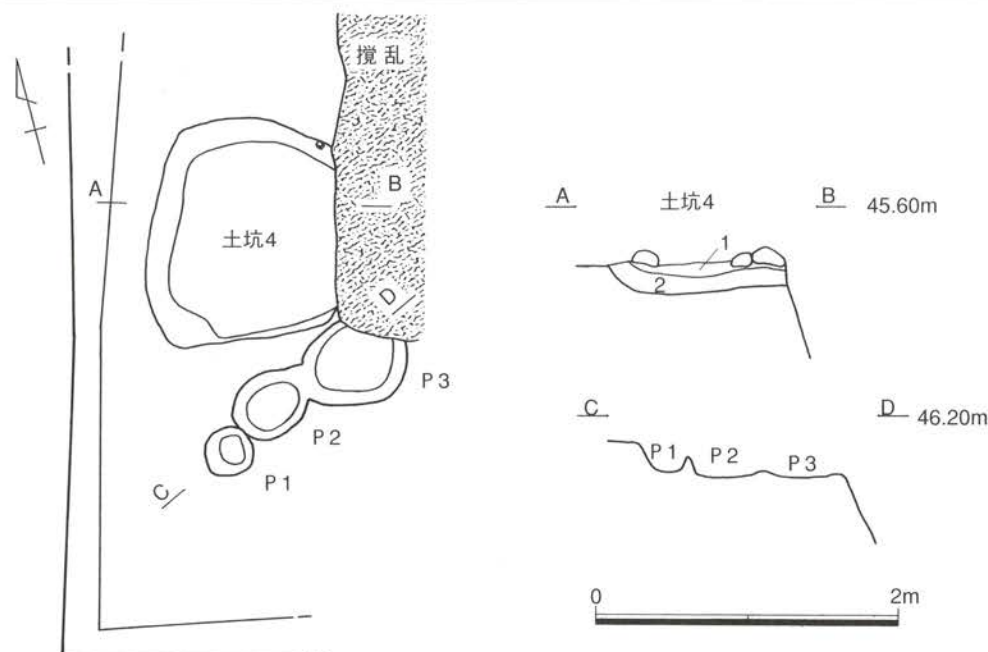


図14 第4トレンチ2面 ピット・土坑実測図

納したものと考えられるが、合わせ口にしたかわらけの中には埋納の意図を推し量れるような遺物は存在せず、流れ込みによる少量の土だけが残っていた。かわらけから少し離れて銭貨が出土している。

平面では確認できなかったものの、トレンチの断面で当該遺構の掘りこみを確認することができた。同じ場所に存在する火葬跡を切って埋納されていることがわかる。覆土は淡黄褐色砂質土で、土丹の小粒を含んでいる(図15断面図1層)。ちなみに、図中土層断面の2層は黄褐色土である。3層、4層はそれぞれ、火葬跡断面1層、2層と同層である(図16断面)。

火葬跡(図16、図版6)

石積み1下段南側で検出した。検出した範囲は南北200cm、東西160cm以上(トレンチ東壁)で、平面形は隅丸方形である。火葬跡の北東部を切ってかわらけ埋納遺構がある。検出時には焼土と細かな炭化物(小さな木片)、白い骨片と思われる極めて小さなものが僅かだが認められていた。中央で交差するように東西方向と南北方向にセクションポイントを設定した。セクションで確認しながら掘りさげていったところ、大きく3層に分かれることが確認された。

1層 淡茶灰色荒砂層で拳～人頭大の砕けた鎌倉石や土丹が含まれる。上面の一部では細かな土丹粒を叩き締めていた。約2m四方の遺構全体を埋め戻した痕跡と思われる。

2層 茶褐色粘質土層できめ細かな粘質土に焼土、焼けた鎌倉石片、細かな焼骨片が混じっていた。ほぼ中央に南北80cm、幅40cm、厚さ16cmの細長い鎌倉石が検出された。この鎌倉石は焼けていないことから、埋め戻し時に2層の上に置かれた後に1層の土砂で埋められたものと考えられる。

3層 淡茶褐色砂質土層で、焼けた鎌倉石片の隙間から2層以上に焼骨片が出土している。中央部が約1mの範囲で約24cm窪み、遺構全体の深さは40cm程であった。窪みの周囲には人頭大の鎌倉石が置かれ、その多くは表面が赤黒く変色し焼けた状況が観察された。

遺構内で火を焚いた状況、焼けた骨(細片ばかりなので断定は難しいがおそらく人骨)が出土する事から、火葬を行った遺構と考えられる。谷内での火葬跡の検出類例は、国指定史跡永福寺跡奥の杉ヶ谷内で造成した平場から、火葬跡が18基検出されている(福田1994)。

4 3面の遺構

中世の遺構面を壊さずに残すという方針から、2面以下の掘り下げはサブトレンチのみの最小限にとどめた。また、前述した近現代の大型攪乱(22ページ)も利用し、壁面で2面以下の土層堆積状況や出土遺物の様相を確認した。その結果、大型攪乱の底で土丹による整地層や硬化面が現れている箇所もあり、2面より古い時代の生活面が存在することは明らかとなった。便宜上、攪乱の底の面を3面とした。3面上ではピットが確認できた。

3面は出土遺物の様相より、13世紀末まで遡れる可能性がある。しかし攪乱の底で確認された遺物であるため、整地層の年代を確実に決定づける資料とは限らない。

さらに、サブトレンチ壁面の観察でも生活面となりうる整地層が確認できた。3面造成から2面造成までの間に、数時期の造成を繰り返していたということになるだろう。またサブトレンチ6・7では3面下に4面目を確認した。遺構は確認できていない。

ピット(表7、図17、図版6)

第4トレンチの攪乱底で2基確認した。両者は南北に190cmの間隔で並ぶ。規模等は表に記した。建物の柱穴になるかどうかは不明である。遺物は出土していない。

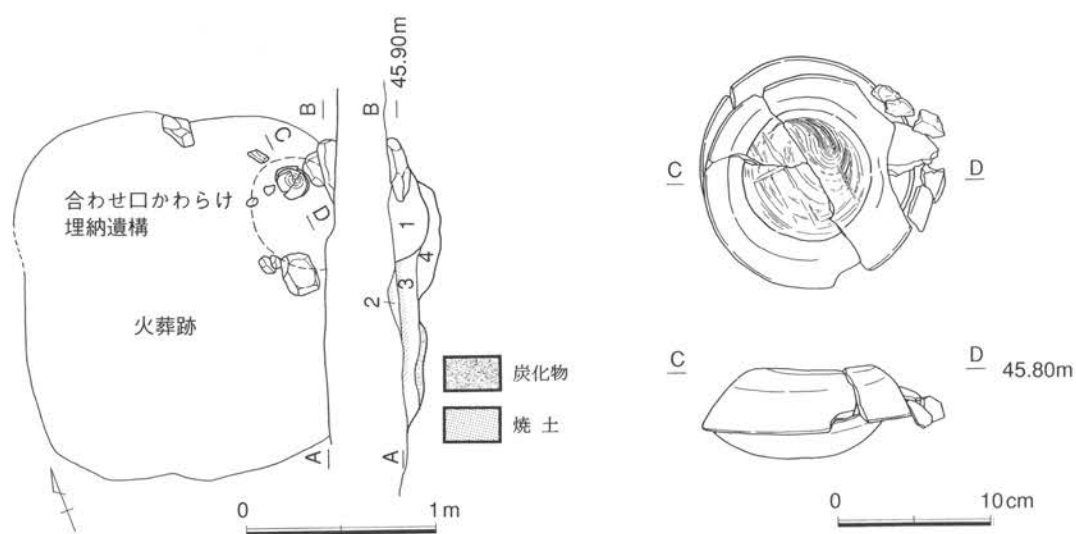


図15 第5トレンチ2面 合わせ口かわらけ埋納遺構実測図

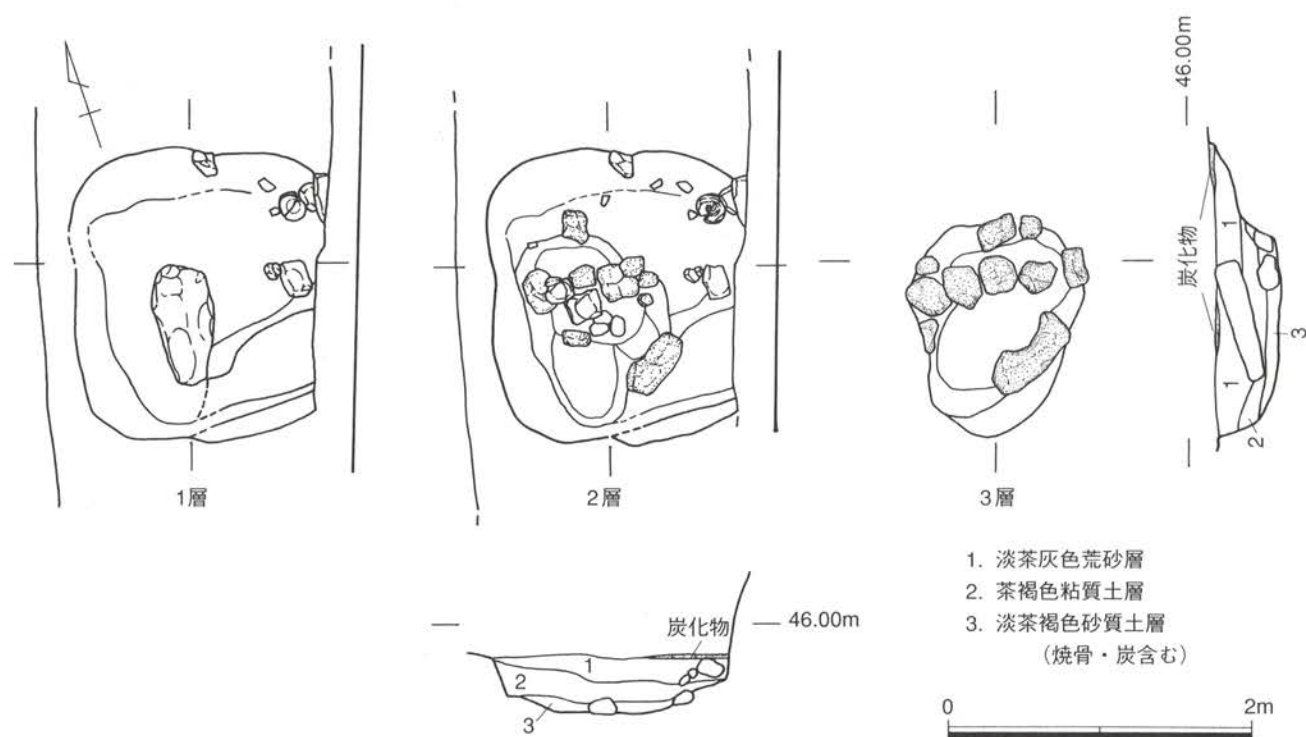


図16 第3・5トレンチ2面 火葬跡実測図

表7 第4トレンチ3面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P 4	26	19	22	円形	灰褐色荒砂	
P 5	41	(40)	44	円形	P 4 と同	

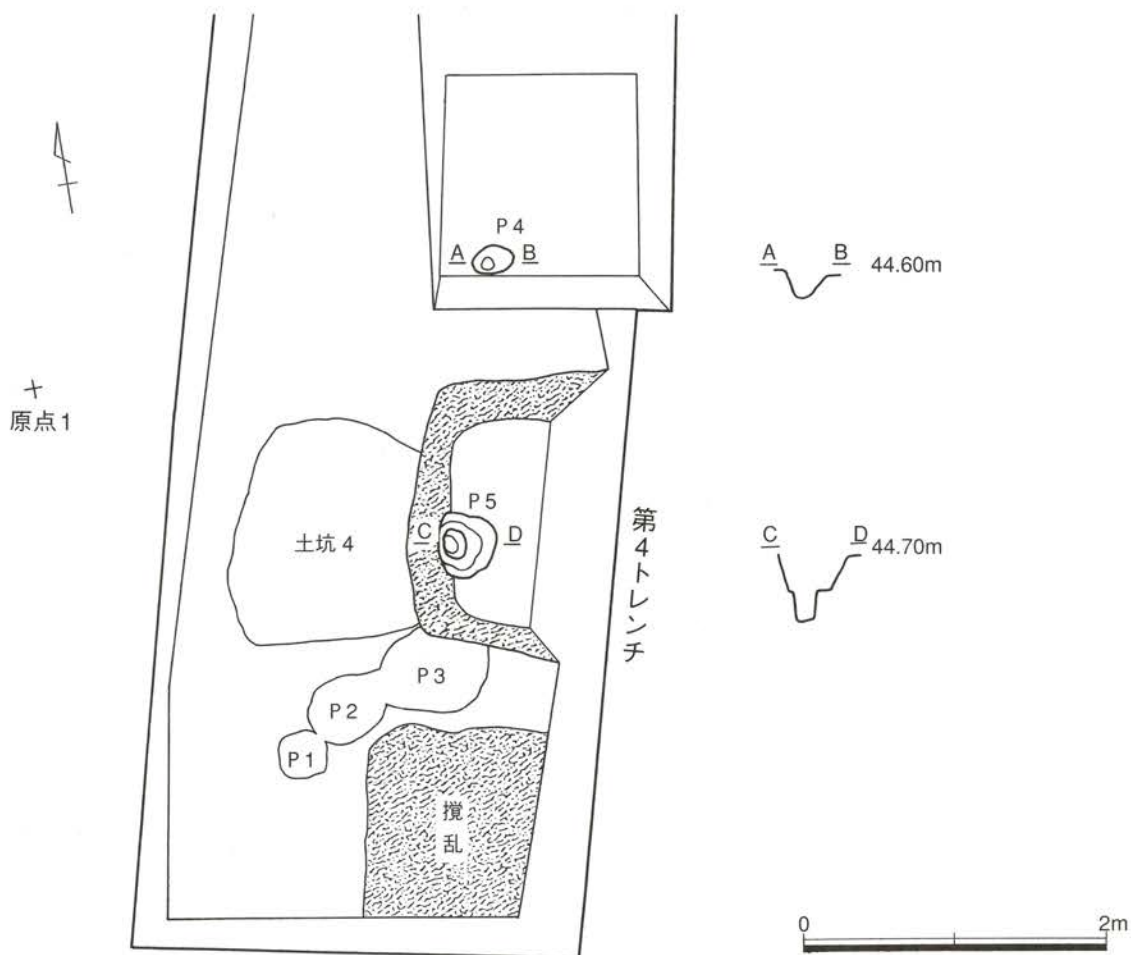


図17 第4トレンチ3面 ピット実測図

(3)第6トレンチ

1 土層堆積状況(図5・6、図版3・17)

調査区の西壁で観察した(図6：G-H)。地表下40~80cmまでは近現代の造成土が堆積しており、その下で確認した小礫混じりの硬化面が1面である。上面は地形にあわせて南へと傾斜している(標高46.7m~46.2m)。トレンチの南側は段差があり近現代の造成土が深くまで堆積していたため、1面を確認できたのは調査区の北側7.5mまでであった。1面構成土は砂岩小塊を多く含む砂質土で、厚いところでは80cmほど盛土して平場を造成している(基本土層Ⅱ-4層)。

2面も1面と同様の理由から、確認できたのは調査区の北側7.5mまでである。1面構成土を除去したところ、比較的締まりのよい褐色土層を確認し、遺構も確認できたため2面とした。標高は46m程度であり、1面と比べて傾斜は少ない。2面下には版築様盛土が確認できた(基本土層Ⅴ-2層)。

第6トレンチ南側の厚い堆積土は、北側に堆積する表土や第1面の構成土と異なり、褐色の粘性土である。近現代の大型攪乱とも思えたが、1・2面構成土の間には旧表土と考えられる土層が20cmほどの厚さで堆積していることから、もともと存在した段差を、ある段階で一気に盛土して埋め、現在の平坦面を形成したと考えられよう。

当該トレンチを含む第1調査地点がもともと、現在見るような広い平場だったのではなく数段の平坦面に分かれていたことは住宅地図や航空写真から明らかとなっている(後掲図50、図版1-2)。各平坦面には高低差がかなりあったと考えられ、今回掘削した範囲では段下の平坦面まで確認することはできなかった。

たが、過去の造成工事の一端を発掘調査によっても垣間見られたということになろう。

この埋土の中から製作年代が20世紀第1～2四半期に比定できる遺物が出土していることから、昭和以降の盛土と考えられる。

2 1面の遺構

現地地表下80cmほどで小礫混じりの整地層を確認し、1面とした。上面の標高は南へ向かって緩やかに下がっている。1面上ではピット群、土坑、溝状遺構、石列を検出した。遺構配置は前掲図5を参照していただきたい。

ピット(表8、図5、図版7)

1面上ではピット18基を確認し、それぞれP1～P18とした。いずれも掘り込みは浅く、柱穴としての並びも確認できていない。各ピットの規模・覆土等は計測表に記載した。

土坑1(図5・18、図版7)

トレンチ中央付近で検出した。平面形は楕円形で、短径76cm、長径116cmである。確認面からの深さは37cmである。覆土は1層で、粘性・しまり共に弱い暗褐色砂質土である。遺物は中世瓦質火鉢片と鉄製品が出土した。

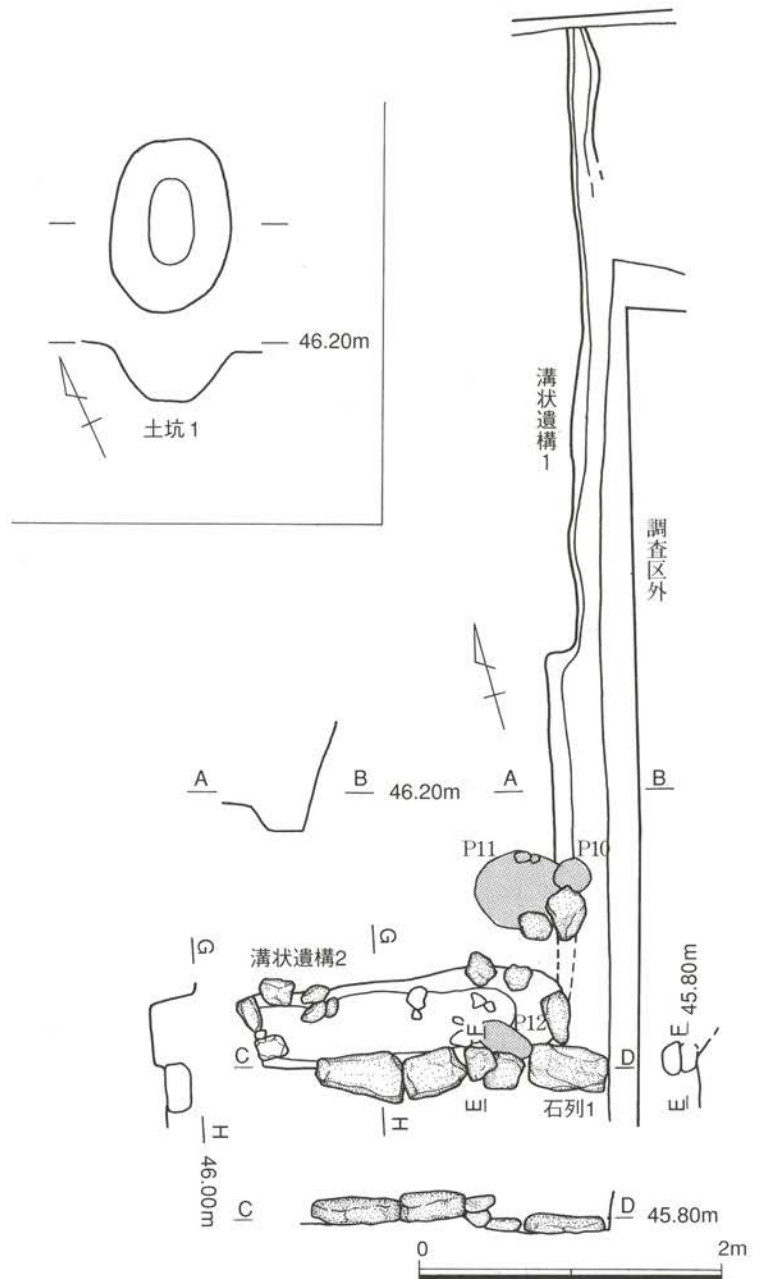
表8 第6トレンチ1面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P1	92	60	18	楕円形	暗褐色土 粘性・しまりともに弱い。 砂質。炭化物・かわらけ片を含む	
P2	18	16	11	円形	P1と同	
P3	66	47	7	不整円形	褐色土 黄色砂質粒含む	
P4	35	28	12	楕円形	P1と同	
P5	42	32	9	不整楕円形	P1と同	
P6	40	36	13	不整円形	暗褐色土 粘性・しまりともに弱い。 土丹小粒、砂岩粒含む	
P7	30	28	15	円形	P6と同	
P8	28	24	6	円形	P6と同	
P9	53	26	10	不整楕円形	P6と同	古代土師器片出土
P10	25	24	26	円形	暗褐色土 粘性・しまりともに弱い。 炭化物を含む	P11を切る 常滑甕片出土
P11	(60)	52	20	楕円形	暗褐色土 粘性・しまりともに弱い。 砂岩粒を多く含む。	P10に切られる
P12	38	18	53	楕円形	暗褐色土 粘性・しまりともに弱い。 炭化物を含む。	溝状遺構2を切る
P13	43	32	27	楕円形	暗褐色土 粘性弱く、しまりややあり 砂岩粒若干含む。	
P14	18	12	14	円形	P13と同	
P15	20	18	26	円形	P13と同	
P16	40	30	5	不整楕円形	P13と同 やや色調明るい	
P17	27	23	10	不整円形	P13と同 やや色調明るい	
P18	26	22	7	円形	P3と同	

溝状遺構 1 (図5・18、図版7)

トレンチ東端を南北方向に走る。東端と北端は一部調査区外となってしまうため正確な最大幅・長は不明であるが、残存している範囲では幅35cm、最大長6.7mとなる。確認面からの深さは最大で20cmである。南端は石列1に接している。P10・11と溝状遺構2に切られる。出土遺物は鉄製品が1点である。覆土は1層、粘性弱く、締まりのややある暗褐色土で、径2mm以下の白色砂岩粒と、炭化物を微量含んでいる。



溝状遺構 2 (図5・18、図版7)

トレンチ中央やや南よりに存在する。東西に長い。幅は最大で50cm、西端を攪乱に切られているため全長は不明だが、2.1m残存している。石列の北に接している。覆土は1層で、粘性のある暗褐色土が堆積していた。しまりはある。炭化物やかかわらけ小片を含み、やや砂質である。遺物はかわらけ、古瀬戸折縁深皿、鉄釘など、総数17点出土した。

石列 1 (図5・18、図版7)

トレンチ中央、やや南よりに存在する。東西方向に砂岩が6個並ぶ。切石というほど形は揃ってはいないが、長辺50cm、幅40cm程度の直方体の石を用いている。上下には重ならず第3トレンチで確認された石積み1より簡易に見えるが、構成する石質・方向ともに類似している(図5)。

第3トレンチ石積み1の最下段の石の上面は当該遺構の石の上面の標高より20cmほど高いが(石積み1の最下段石列上面は約46.2m)、石積み1は当該調査地点でもより丘陵に近いという地形的な条件も考慮すれば、同時存在した構築物と考えても差し支えないだろう。遺物は出土していない。

3 2面の遺構

第1面から80cmほど下層で黄褐色土の硬化面を確認し、2面とした。2面まで掘り下げたところ、当初設定したトレンチ範囲の北端で礎石列の一部を確認したため、その延長を確かめるべく調査区の北東側は幅1.5mほどの帯状に拡張した。2面ではピット群、土坑、溝状遺構、礎石列、石組みの溝、玉石敷きなどが出土している。

図18 第6トレンチ1面 遺構実測図

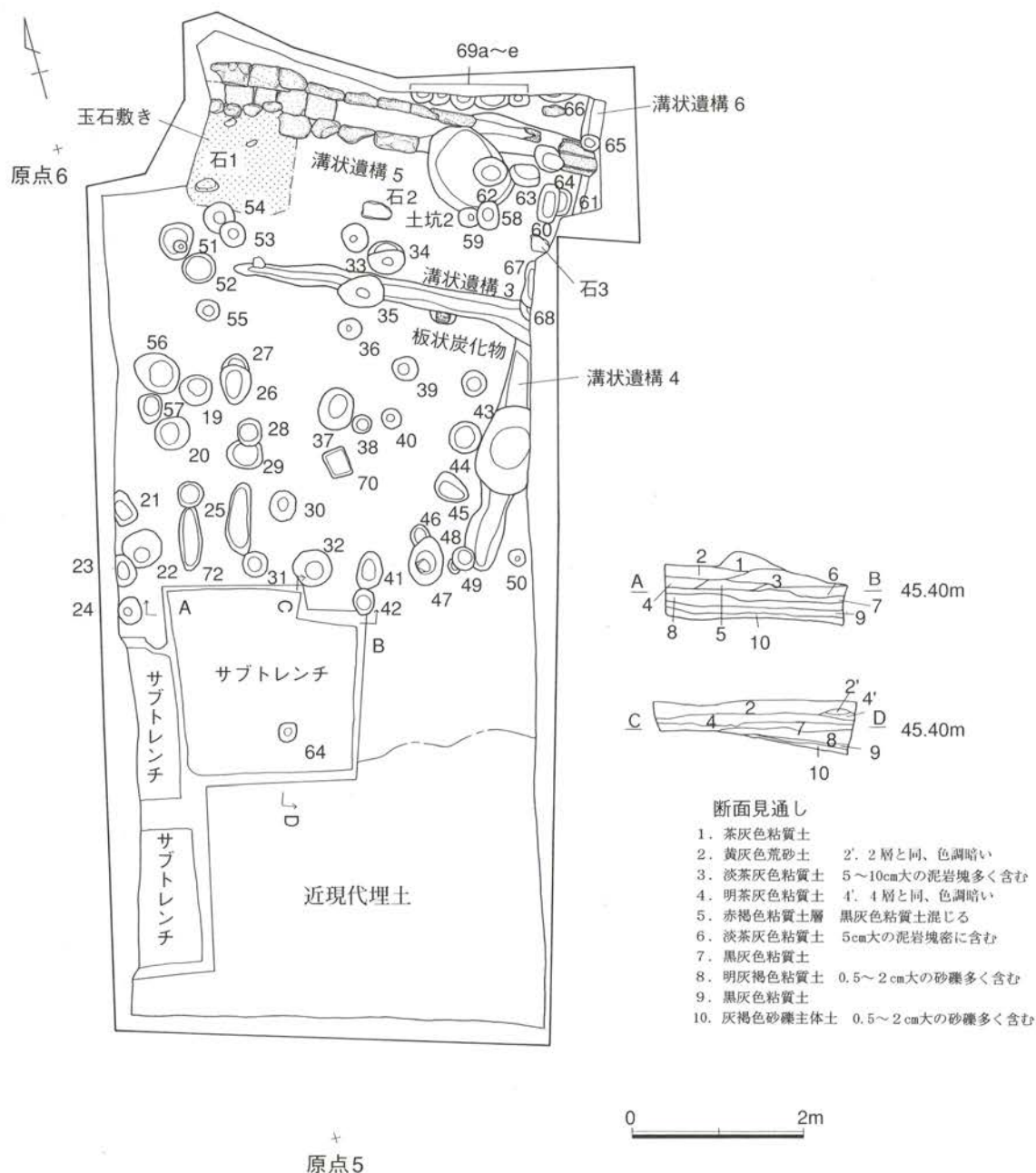


図19 第6トレンチ2面 全体図

ピット(掘立柱建物跡)(表9、図19・21、図版7)

調査区全体で確認した。総数58基である。ピットの規模等は計測表に記した。

大半のピットは掘り込みも浅いが、その中でP22、32、33、37、51、56は際立って掘り込みも深く、1間×2間の柱の並びを復元することもできた。掘立柱建物の柱穴と考えられる(表19網かけ、図21)。

柱穴間の距離は、P51・56・22がそれぞれ155cm・213cm、P33・37・32がそれぞれ200cm・196cmであり、東西にはP51・33、P56・37、P22・32でそれぞれ210cm、210cm、205cmであった。さらに東側に拡張するかと思われたが、調査区内でP32、33、37に対応する柱穴は確認できなかった。最小で1×2間の建物が想定できるが、おそらく調査区西側へも拡張し、2間以上になるものと予想される。

表9 第6トレンチ2面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P 19	38	34	17	円形	暗褐色土 粘性なし、しまり強い。 径2cmまでの砂岩粒、炭化物粒含む	
P 20	41	40	17	円形	P 19と同	
P 21	40	(20)	9	隅丸方形	褐色土 粘性ややあり、しまりなし。砂質 土丹粒少量、細礫やや多い	
P 22	44	43	41	不整円形	P 21と同	掘立柱建物跡柱穴
P 23	35	(23)	22	楕円形	褐色土 粘性あり、しまりなし、土丹粒少量	P 22を切る
P 24	31	28	30	不整円形	P 21と同	
P 25	30	28	16	円形	暗褐色土	P 72を切る
P 26	49	28	14	不整楕円形	暗褐色土	P 27を切る
P 27	(32)	(10)	8	円形	暗褐色土	P 26に切られる
P 28	30	30	7	円形	暗褐色土	P 29を切る
P 29	42	32	7	不整楕円形	暗褐色土	P 28に切られる
P 30	34	30	10	円形	淡茶灰色弱粘質土	
P 31	32	31	7	円形	淡茶灰色弱粘質土	
P 32	45	43	17	円形	淡茶灰色弱粘質土	掘立柱建物跡柱穴
P 33	34	32	54	円形	暗褐色土	掘立柱建物跡柱穴
P 34	43	40	28	円形	暗褐色土	
P 35	54	34	16	不整楕円形	暗褐色土	
P 36	28	24	19	円形	暗褐色土	
P 37	50	40	42	円形	暗褐色土	掘立柱建物跡柱穴 常滑片口Ⅱ類出土
P 38	22	21	20	円形	暗褐色土	
P 39	31	26	7	不整円形	暗褐色土	
P 40	24	23	12	円形	暗褐色土	
P 41	44	28	11	不整楕円形	淡茶灰色弱粘質土	
P 42	32	24	5	不整円形	淡茶灰色弱粘質土	
P 43	31	30	30	円形	暗褐色土	
P 44	38	36	6	円形	暗褐色土	
P 45	44	32	13	不整楕円形	暗褐色土	
P 46	(18)	23	3	楕円形	暗褐色土	P 47に切られる
P 47	58	32	11	楕円形	暗褐色土	P 46を切る
P 48	28	26	7	円形	暗褐色土	溝状遺構4、 P 49を切る
P 49	16	(8)	1	円形	暗褐色土	P 48に切られる
P 50	21	18	24	円形	暗褐色土	
P 51	43	40	47	不整円形	暗褐色土	掘立柱建物跡柱穴
P 52	38	34	11	円形	暗褐色土	
P 53	30	29	19	円形	暗褐色土 粘性ややあり、しまりあり	常滑壺埋納遺構
P 54	36	(36)	18	円形	暗褐色土 粘性ややあり、しまりあり	P 53に切られる
P 55	28	26	14	円形	暗褐色土	
P 56	56	43	38	不整楕円形	P 19と同	掘立柱建物跡柱穴
P 57	34	27	22	不整楕円形	P 19と同	
P 58	33	26	13	不整楕円形	暗褐色土 粘性ややあり、しまり弱い。 やや砂質	土坑2、 P 59を切る
P 59	(23)	23	4	円形	P 58と同	
P 60	47	23	22	隅丸長方形	P 58と同	P 61を切る
P 61	32	14	4	隅丸長方形	P 58と同	P 60に切られる

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P 62	40	33	9	楕円形	P 58と同	土坑 2 を切る
P 63	37	(25)	14	不整楕円形	P 58と同	
P 64	24	22	19	不整円形	暗褐色土 粘性弱く、しまりあり	
P 65	23	16	14	円形	P 58と同	溝状遺構 6 を切る
P 66	40	(9)	6	—	P 58と同	
P 67	(56)	(10)	18	—	暗褐色土 粘性・しまりともになし 砂岩粒微量、炭化物若干含む	P 68を切る
P 68	(13)	(10)	11	—	P 67と同 砂岩粒は含まず	溝状遺構 3 を切る P 67に切られる
P 69 a	30	(12)	2	円形	黒色土 粘性ややあり、しまりあり 白色・赤色粒若干含む	安山岩石列の 続き 石の抜き跡か
P 69 b	(20)	(12)	4	円形	P 69 a と同	
P 69 c	30	(16)	4	円形	P 69 a と同	
P 69 d	40	(17)	4	楕円形	P 69 a と同	
P 69 e	24	(14)	3	楕円形	P 69 a と同	
70	34	26		方形	暗褐色土	
71	86	30		楕円形	淡茶灰色弱粘質土	
72	(72)	28		楕円形	淡茶灰色弱粘質土	

土坑 2 (図19・20、図版 7)

トレンチ北側拡張区で検出した。平面形は不整楕円形で、短径86cm、長径112cm、確認面からの深さは25cmである。溝状遺構 5 を切り、P 58・59、62に切られる。玉砂利が16個出土した。覆土は1層で、粘性のある黒褐色土が堆積している。

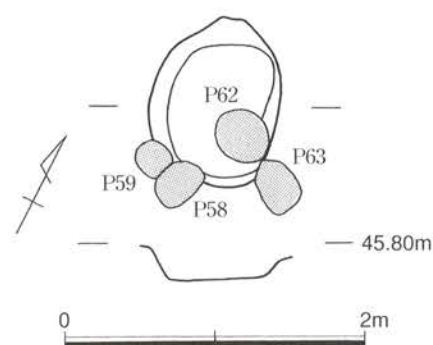


図20 第6 トレンチ 2 面 土坑 2 実測図

礎石列(図19・21、図版 7)

調査区北側で検出した。当初設定していた調査区の範囲において石 2 を発見したためピンポールを用いて地中の探査をしたところ、直線上に並ぶ石 1 と 3 をそれぞれ石 2 の西側・東側で確認した。しかしいずれも調査区外となっていたため、調査区を北・東方向に拡張し連続を明らかにした。同時に、礎石の約90cm北側に存在した石組み溝も検出することができた。

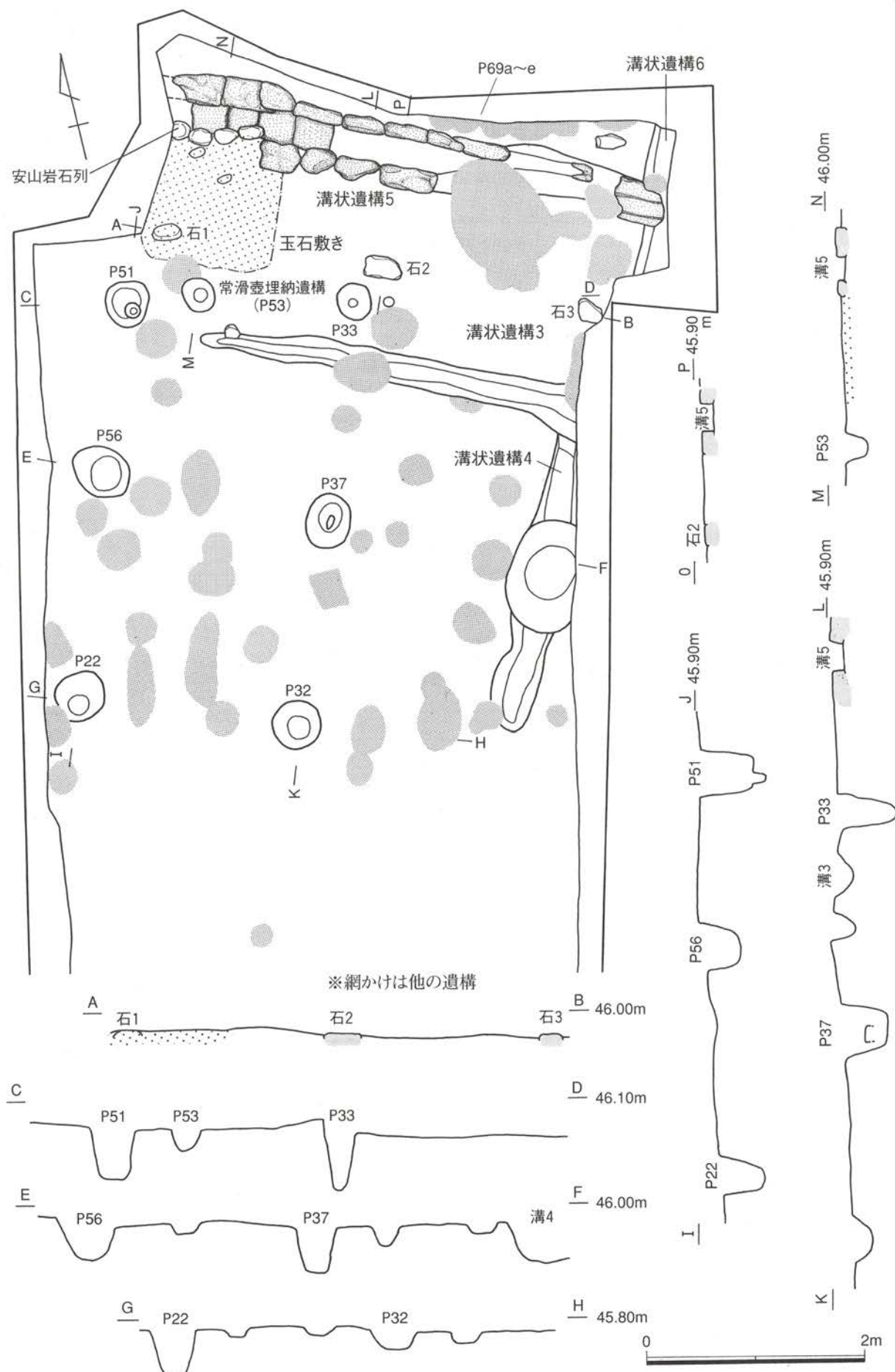
礎石列も柱穴と同様およそ210cmの間隔で東西方向に並んでいる。確認できたのは3点だが、調査区外へ続いていると考えられる。いずれも安山岩で最大でも短径20cm、長径33cm程度と比較的小振りで、建物の中心的な柱を支える礎石よりはむしろ縁の礎石と考えられようか。

溝状遺構 3 (図19・21、図版 7)

礎石列の60cmほど南側に、礎石列とほぼ並行して存在する。幅は最大で50cm、長さは350cmまで確認できている。西側は調査区壁の手前150cmほどのところで収束し、東側は調査区外へさらに延びている。覆土は1層で、しまりのある褐色粘質土が堆積している。炭化物を含み、褐色土ブロックを多量に含んでいる。遺物は出土していない。P 35、67・68に切られ、溝状遺構 4 を切る。東壁から1mの部分では、溝状遺構の南側に板状の炭化物が接して出土している。

溝状遺構 4 (図19・21、図版 7)

南北方向に延びる溝である。中央部分が平面楕円形の掘り込みを伴っておりその部分がやや不自然に幅



広がっている。トレンチ東壁に接しているため本来の最大幅は不明であるが、規模は確認できている範囲で幅70cm、長さ250cm、確認面からの深さは40cmである。北側は溝状遺構3に切られており、その延長は確認できない。P48に切られる。覆土は溝状遺構3に類似する。遺物は出土していない。

溝状遺構5(図19・21、図版7)

トレンチの北側拡張部分で検出した、石組みの溝である。礎石列の1mほど北側に位置しており、礎石列とほぼ平行している。両端は調査区外へ延びて行くため全体の長さは不明だが、確認できたのは440cmであった。最大幅は80cm、深さは10～15cmである。基本的には凝灰質砂岩の切石を並べて側壁を構築しているが、溝の西側と東側では作られ方が異なるようである。壁の構築材は西から3個目までは幅・長さ共に30cm程度の切石であるのに対し、4個目以降は幅12cm・長さ40cm前後の石となり、形状が異なっている。遺構の西側は底にも凝灰質砂岩が敷かれており、平坦な切石が4個確認できた。一方で溝東側は底石は敷かれていない。

また、西端部分は南壁が凝灰質砂岩ではなく安山岩の円礫となっている。4個とも上部をうち欠いて平坦にしており、砂岩の切石と上面がそろっている。しかし安山岩列が溝状遺構の側壁として配置されたものかどうかは不明であり、溝側壁を壊して作られた別の施設である可能性もあるだろう。これらの円礫に接して南には、後述するように玉砂利が敷かれている。また、東には安山岩列の抜き跡と見られるP69a～eが直線に並ぶ。

東の端は土坑2やP64などに切られてしまっているため側壁の切石の残存状況も悪いが、かろうじてトレンチ東端では溝底石のような石材が確認できた。中央に幅15～18cmほどの浅い溝があり、断面が凹形をしている。

この溝状遺構の用途としては、建物に接していることなどから考えても南側に存在していた建物の雨落ち溝と考えるのが現段階では妥当であろう。

溝状遺構6(図19・21、図版7)

トレンチ北東隅で検出した。南北方向に延びる溝で、溝状遺構5の東端と直角に接している。当該遺構の東側壁は調査区に接し、両端は調査区外へ延びて行くため全体の形状・規模は不明であるが、幅は30cm以上、長さは140cm以上になる。確認面からの深さは最大で16cmであり、南へ向かってごく緩やかに傾斜している。覆土は1層、粘性のややある暗褐色土である。砂岩粒や炭化物を微量含む。遺物は出土していない。P65に切られる。

玉石敷き(図19・21、図版7)

トレンチ北西端に位置する。溝状遺構5の南側、ちょうど安山岩列の部分に接している。西側は調査区外となってしまうため正確な分布範囲は不明だが、南北120cm、東西で110cmの範囲に径5cm程度の玉石が敷かれていた。検出時はだいぶまばらになってしまっていたが、当初はもう少し密に敷かれていたであろう。礎石列の石1を覆うように敷かれていることから、礎石列より新しいと考えられる。また、ここで敷かれている玉石が土坑2中より出土していることから、土坑2埋没以前に存在していた施設と判断できるだろう。

P54に切られる。

常滑壺埋納遺構(P53)(図19・21・22、図版8)

調査区北西、玉石敷きの南側で確認した。当初、単にピット上にかわらけ大皿が伏せた状態で出土しているだけと考えており、P53として調査を開始した。しかし実際にはかわらけは2枚重なっており、さら

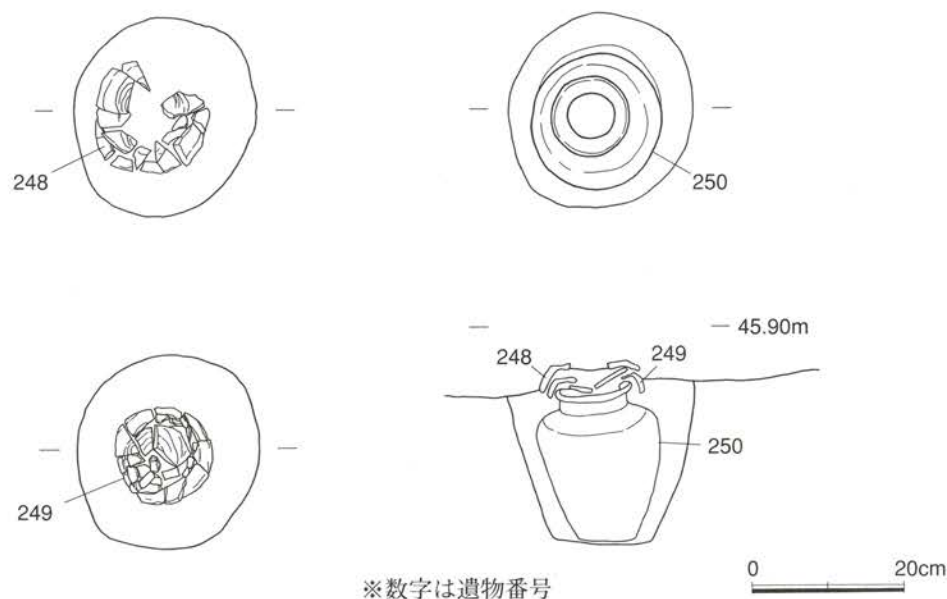


図22 第6トレンチ2面 常滑壺埋納遺構(P53)実測図

にその下には常滑の壺が正位で据えられていた。伏せたかわらけ2枚は蓋だったわけである。また、その常滑の壺の中には、かわらけ小皿6枚と、かわらけ大皿2枚が割られた状態で納められていた(図30-240～250)。土も一緒に入っていたが、藁の様な繊維が確認できる炭化物が若干混じっていた程度で、それ以外のものは入っていなかった。

壺中のかかわらけには接合しても完形にならない個体があった。確かに壺の口径はかわらけの口径よりも小さいため、かわらけは割らないと入らないのだが、割ってまで壺に納めているのにもかかわらず破片を全て埋納しない理由は何だったのか、腑に落ちない点が多い。

当該遺構はP54を切り、P54は玉石敷きの一部を切っていることから、常滑壺の埋納は玉石敷きよりも新しい時期のことと考えられる。

4. 出土した遺物(図23～30、表10、図版15～20)

第1調査地点出土の遺物は総数4069点であり、そのうち56点を図示した。なお出土した国産陶器の分類に関しては「全国シンポ『中世窯業の諸相』生産技術の展開と編年」を参考とした(中野2005、藤澤2005)。また、第1トレンチ出土のウマの歯は阿部常樹氏に分析をお願いし、第3トレンチから出土した常滑産鳶口壺と第6トレンチから出土した常滑産の壺については、愛知県常滑市教育委員会の中野晴久氏にその生産年代についてご教示いただいた。

(1)第1トレンチ出土の遺物(表10、図23～25、図版15・16)

1面と1面構成土から15世紀前葉、口径大(13cm)、中(10～12cmまで)、小(～8cm)の轆轤成形かわらけ、常滑編年6b型式の甕や7、9型式の片口鉢、古瀬戸中期様式Ⅱ期の卸皿、南伊勢系羽釜、舶載品では建窯天目茶碗、龍泉窯系酒会壺蓋小片が出土している。概観して13世紀後葉・14世紀前半～15世紀前半代と幅のある遺物が出土している。

2面は遺物が出土していない。

3面と3面構成土から常滑編年6a型式の甕、9型式の片口鉢(図23-25)が出土した。この片口鉢は南に

6～7m程離れた第6トレンチ1面構成土出土の破片と接合している。

3面上ではウマの下顎歯も出土した(図版5・20)。部位は写真図版に記載した。擦り減り具合より第3前臼歯は5～6歳、第4前臼歯は4～5歳、第1後臼歯・第2後臼歯は6～7歳の歯であるとの分析結果が出た。同一個体とした場合、一般的なウマに比べて前臼歯をあまり使わない顎の使い方か、逆に後臼歯の擦り減りの激しい顎の使い方をしていたことになるとのことである。

以上の内容より、1面から3面は15世紀前半代以降に使用が開始されたと考えられる。

4面と4面サブトレンチ内から常滑編年6b型式の甕、古瀬戸中期様式Ⅱ期の平碗が出土している。4面は14世紀前葉以降に使用が開始されたと考えられる。

(2)第2トレンチ出土の遺物(表10、図25、図版16～19)

轆轤成形のかわらけ大小の皿が各1点ずつ出土している。小片のため図示していないが、他にかわらけ大皿2点、小皿8点、滑石鍋1点が出土している。

(3)第3～5トレンチ出土の遺物(表10、図25～28、図版16～19)

第3トレンチの1面と1面構成土から口径大(13cmを越えるもの)、中(11cm前後)、小(8cm)の轆轤成形で灯明皿に使われたかわらけ、常滑編年7型式の片口鉢、古瀬戸中期様式Ⅰ期の折縁皿、舶載品では龍泉窯系折縁鉢、白磁口元皿等が出土している。1面は概観して14世紀代以降に使用が開始されたと考えられる。

第3～5トレンチ2面と2面構成土から口径大(12cm前後)、中(11cm前後)、小(8cm)、器高が高く器壁が薄い轆轤成形かわらけ、常滑7型式Ⅱ類片口鉢、菊花文スタンプの瓦質火鉢、南部系尾張型7～8型式山茶碗、瀬戸卸皿、龍泉窯系青磁折縁皿、白磁口元皿等が出土している。2面の遺構では埋納遺構から口径16.2cmの大きなかわらけの口を合わせた、合わせ口かわらけが出土している。また、火葬跡から常滑5型式Ⅰ類片口鉢、龍泉窯系青磁鉢、古瀬戸中期Ⅲ期の折縁皿が出土している。2面は14世紀前半代に使用が開始されたと考えられる。

第4トレンチ3面から轆轤成形かわらけ、龍泉窯系蓮弁文碗、白磁四耳壺・口元皿、瀬戸卸皿、山茶碗の小片が出土している。脇の撓乱抗の底部際からは13世紀後半代の手捏ね成形かわらけ小皿も出土している。3面は13世紀後葉には使用が開始されたと考えられる。

(4)第6トレンチ出土の遺物(表10、図29・30、図版19・20)

1面と1面構成土から口径大(13cm以上)、小(～8cm)轆轤成形かわらけ、常滑6b～9型式の甕・Ⅱ類片口鉢、南伊勢系羽釜、龍泉窯系折縁皿、瓦質火鉢等出土した。1面出土の常滑片口鉢破片と、北に6～7m程離れた第1トレンチ3面出土の片口鉢破片(図23-25)が接合している。また、溝状遺構2からは古瀬戸中期Ⅰ期の折縁鉢片が出土している。概観すると13世紀後葉～15世紀前葉の遺物が見られることから、1面の使用は15世紀前半代以降に始まったと考えられる。

2面から口径大(12.9cm)轆轤成形かわらけ、泉州窯産の黄釉洗、常滑7型式と思われるⅡ類片口鉢が出土している。また、P53に埋納された完形品の常滑6a型式の常滑玉縁口縁壺がある。蓋として被せられた轆轤成形かわらけ2点、壺の中に割って納められていたかわらけは、復元すると轆轤成形かわらけ大3点(口径12.3～12.7cm)、中1点(口径11.9cm)、小6点(口径8cm前後)になる。2面は13世紀末～14世紀前半代に使用が開始され、1面の使用が始まる15世紀前半まで比較的長期間にわたり使用され続けた面であると考えられる。

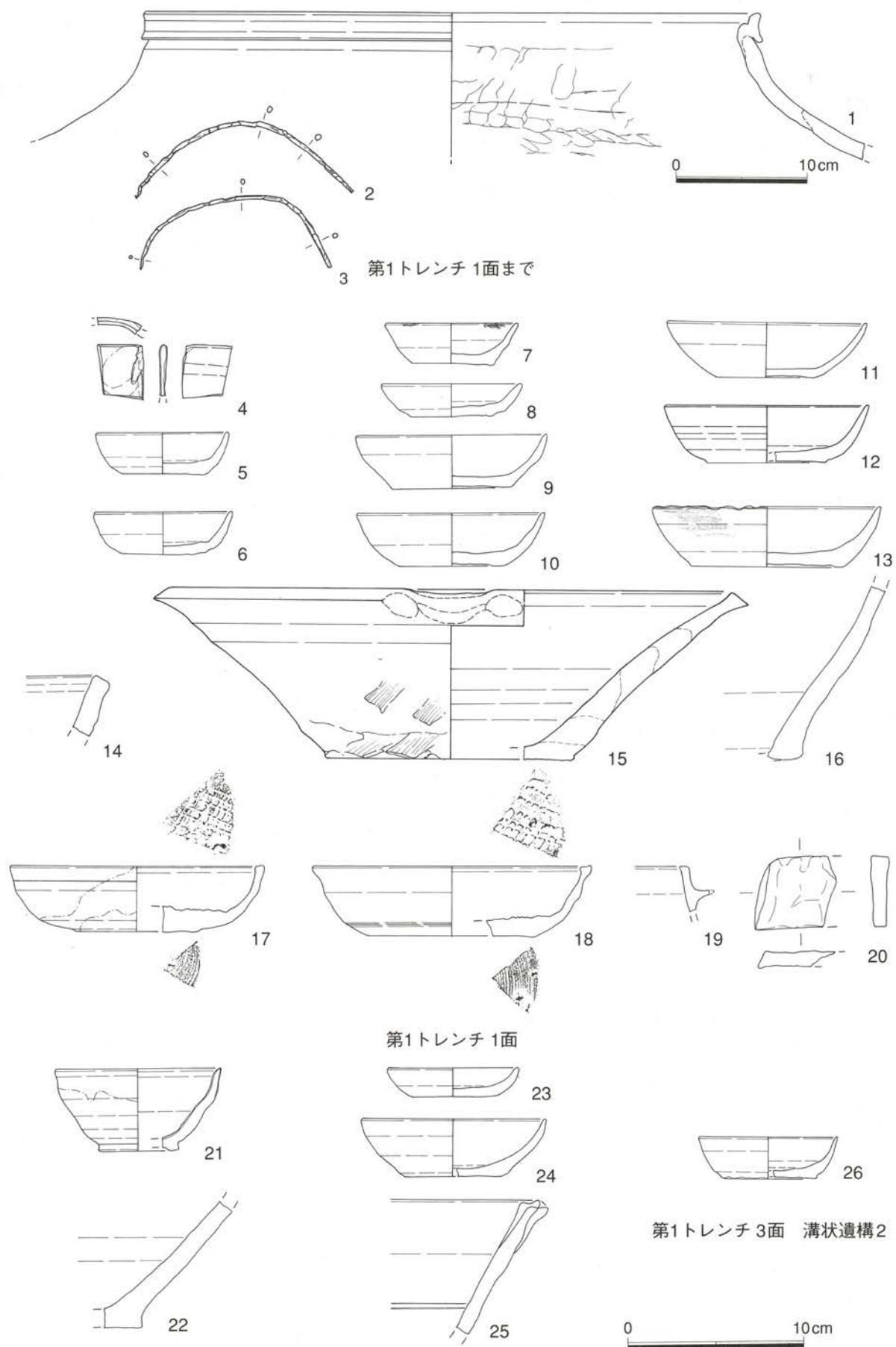
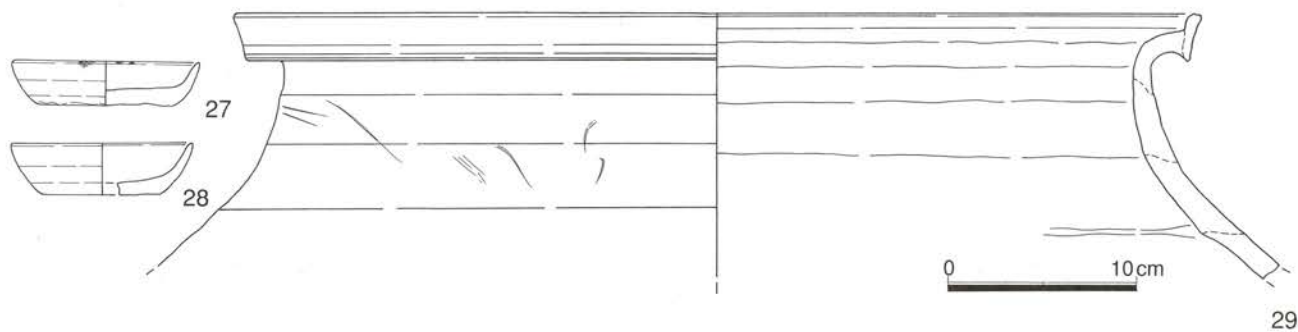
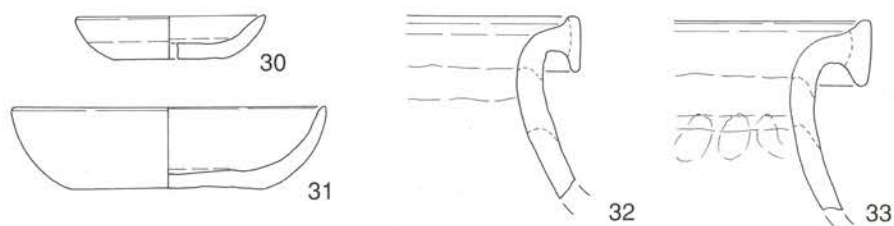


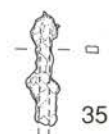
図23 第1トレンチ出土遺物(1)



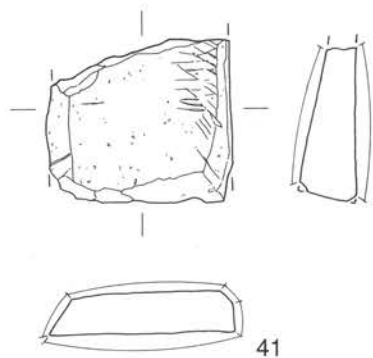
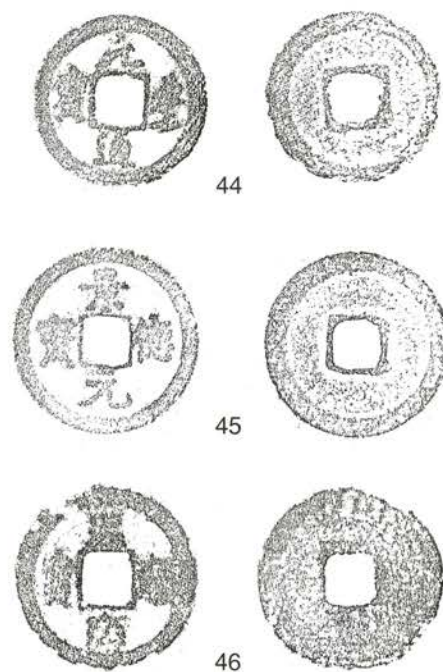
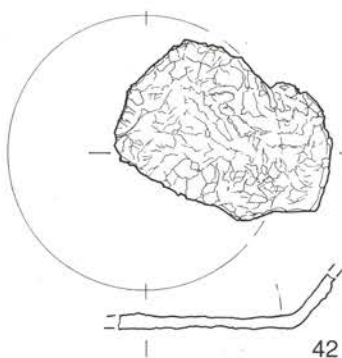
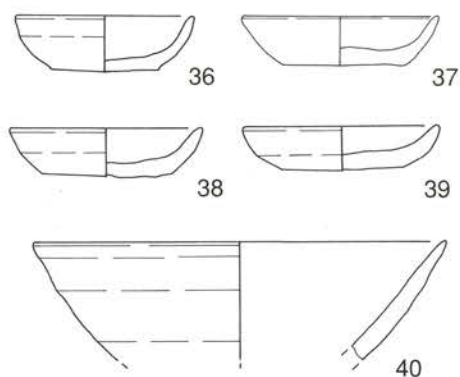
第1トレンチ 3面 構成土



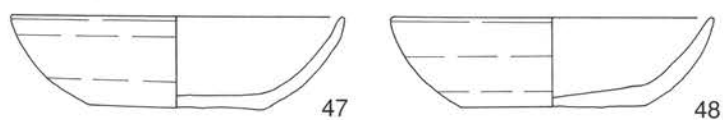
第1トレンチ 4面



第1トレンチ 4面 P 10



第1トレンチ サブトレンチ内



第1トレンチ サブトレンチ内 溝状遺構



※銭は原寸

図24 第1トレンチ出土遺物(2)

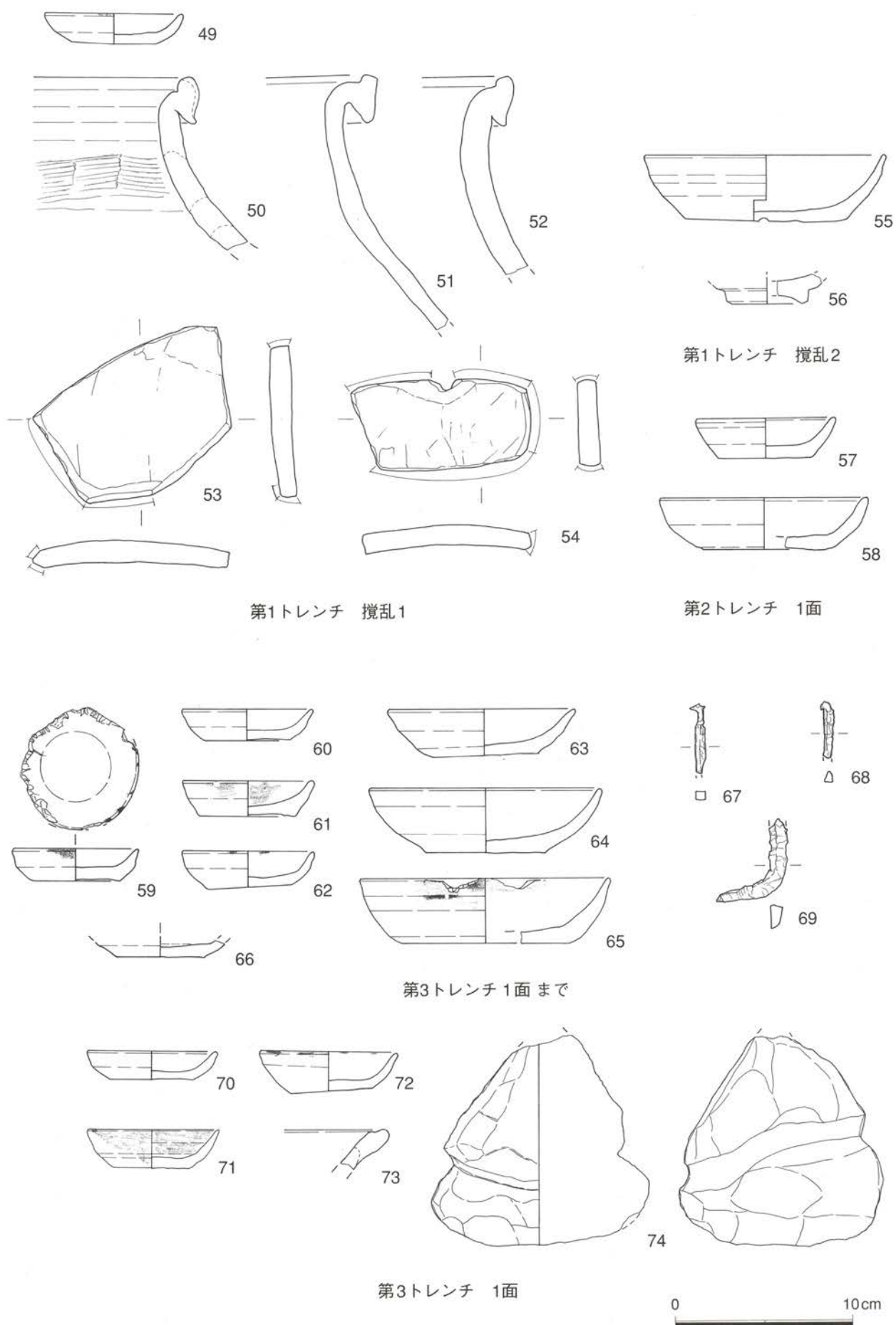
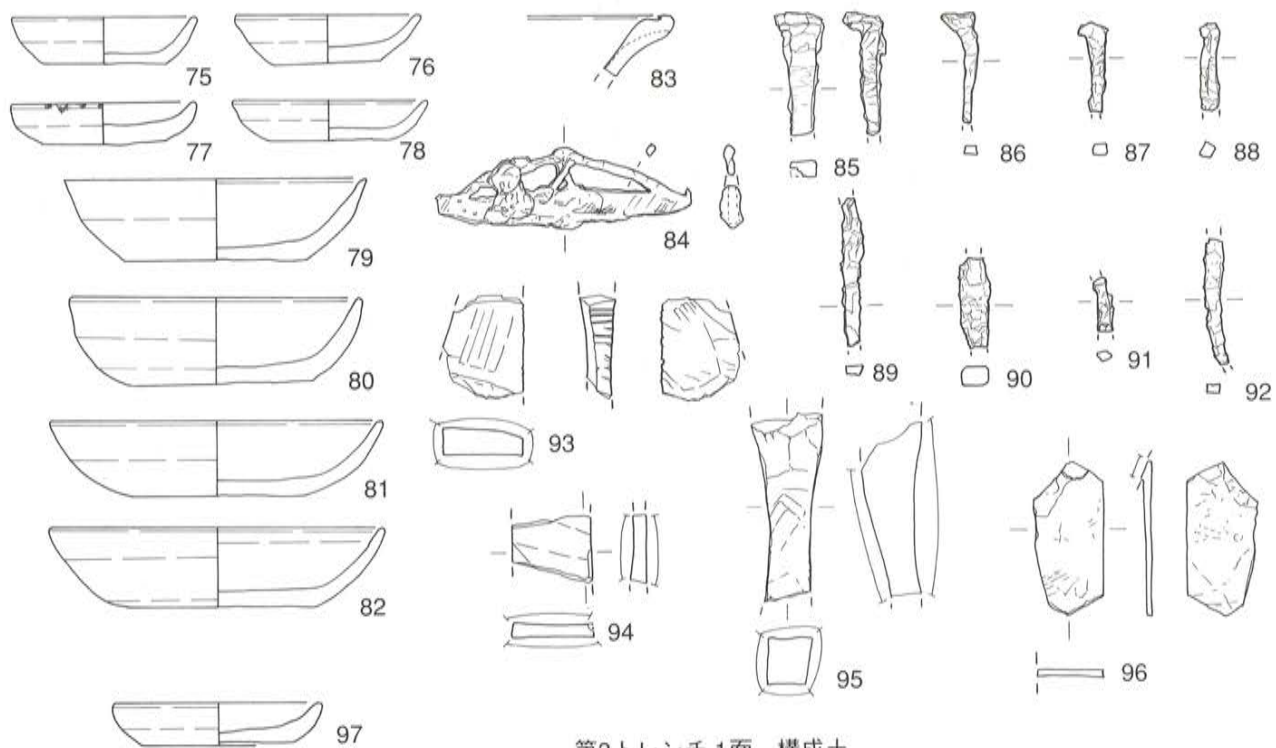
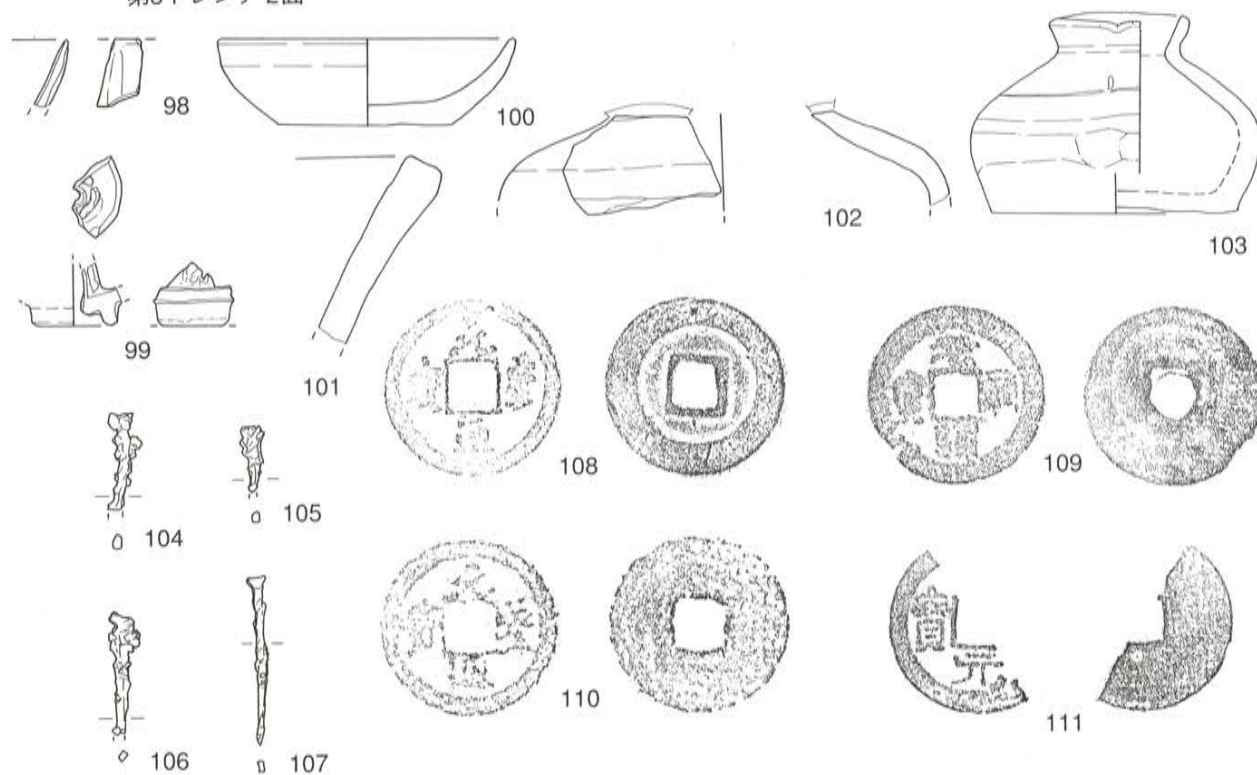


図25 第1トレンチ出土遺物(3)・第2トレンチ出土遺物・第3トレンチ出土遺物(1)



第3トレンチ 1面 構成土

第3トレンチ 2面



第3トレンチ サブトレンチ内

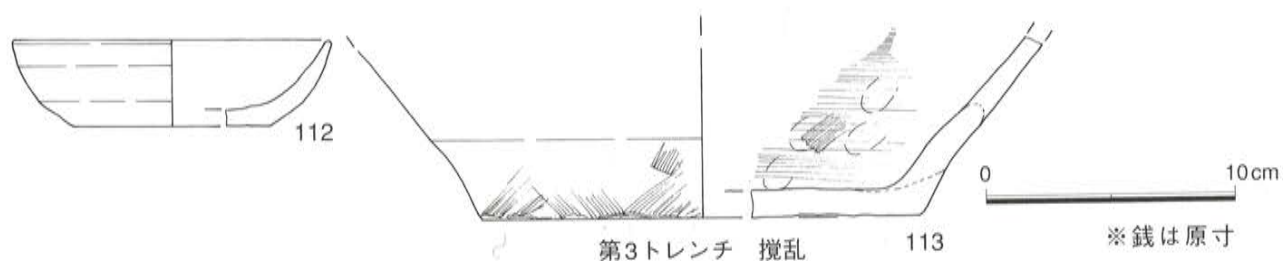
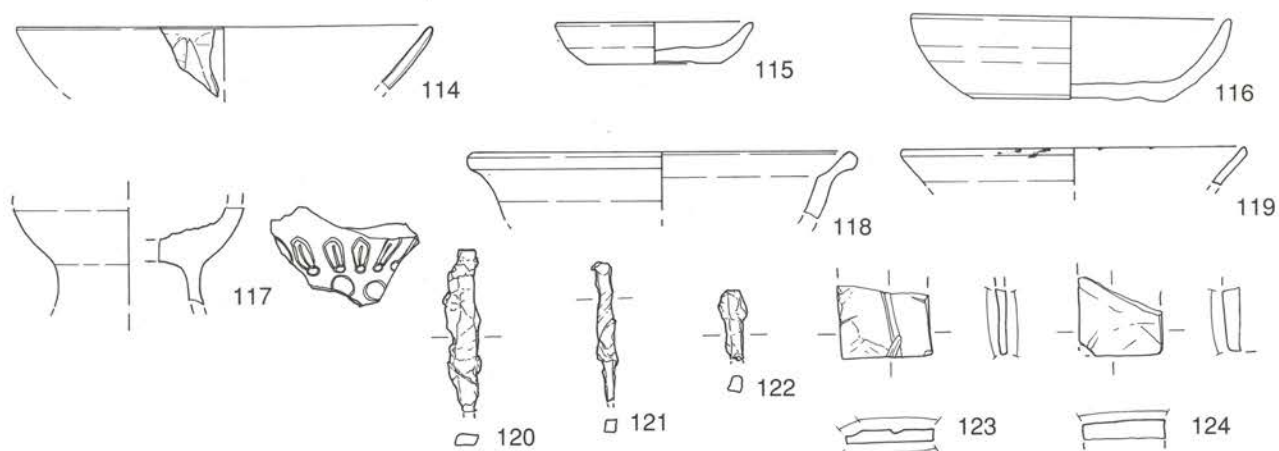
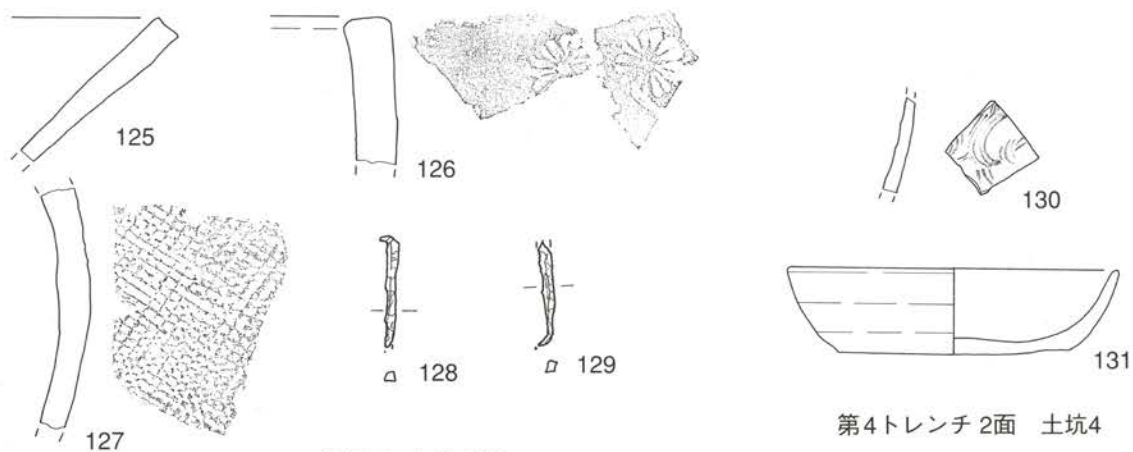


図26 第3トレンチ出土遺物(2)

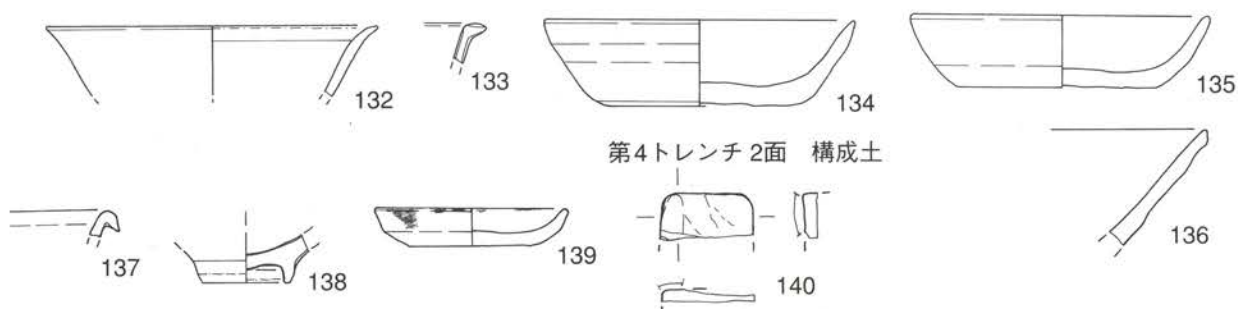


第4トレンチ 2面まで



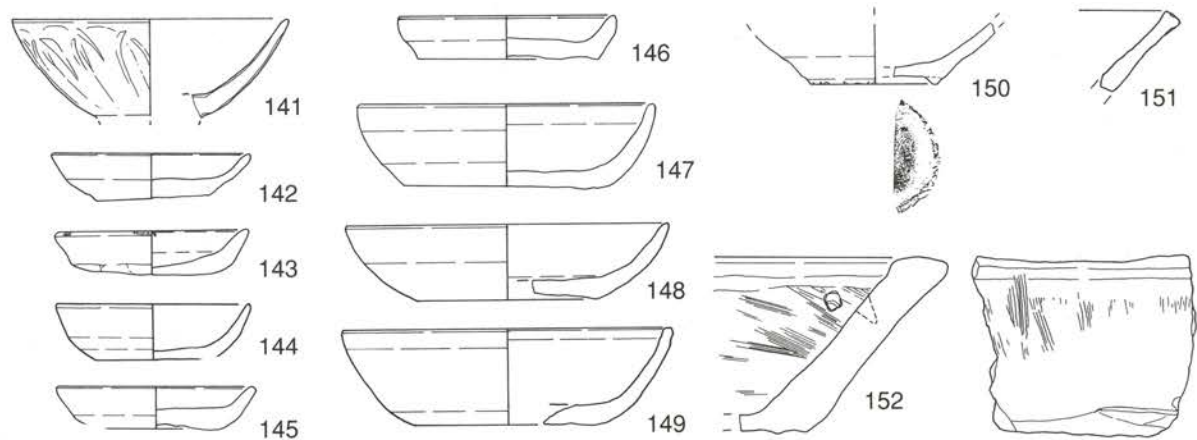
第4トレンチ 2面 土坑4

第4トレンチ 2面



第4トレンチ 2面 構成土

第4トレンチ 3面



第4トレンチ 攪乱

0 10cm

図27 第4トレンチ出土遺物

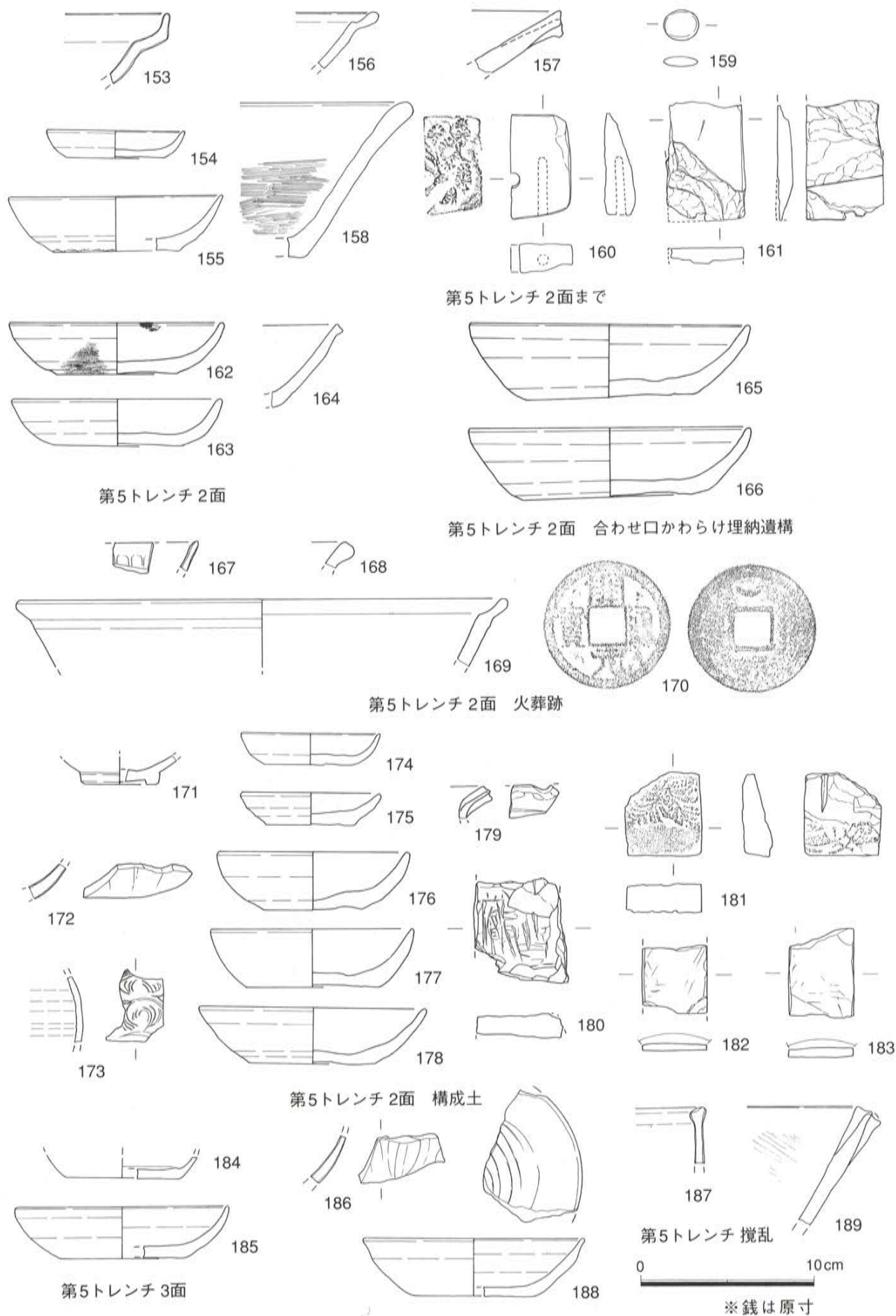
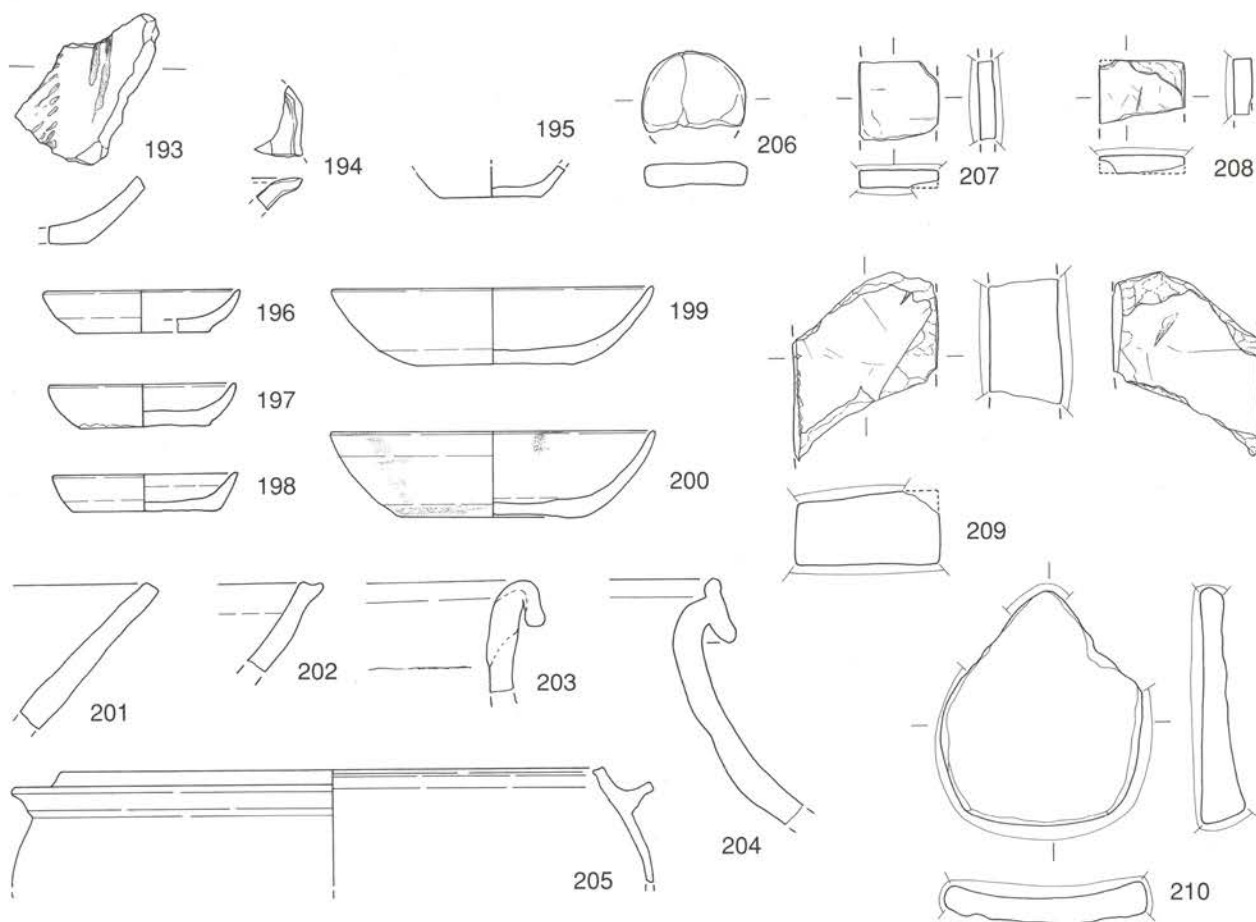


図28 第5トレンチ出土遺物



第6トレンチ 1面まで



第6トレンチ 1面

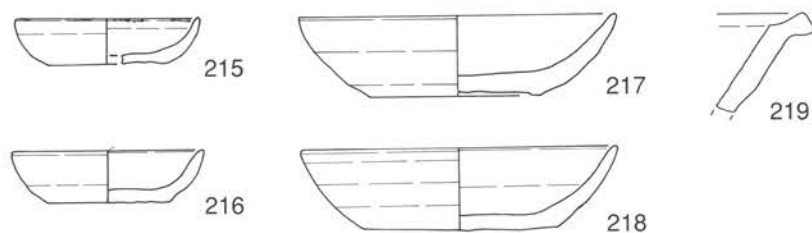


第6トレンチ 1面 P9

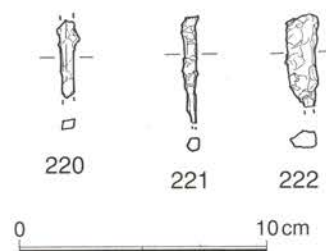


214

第6トレンチ 1面 溝状遺構1

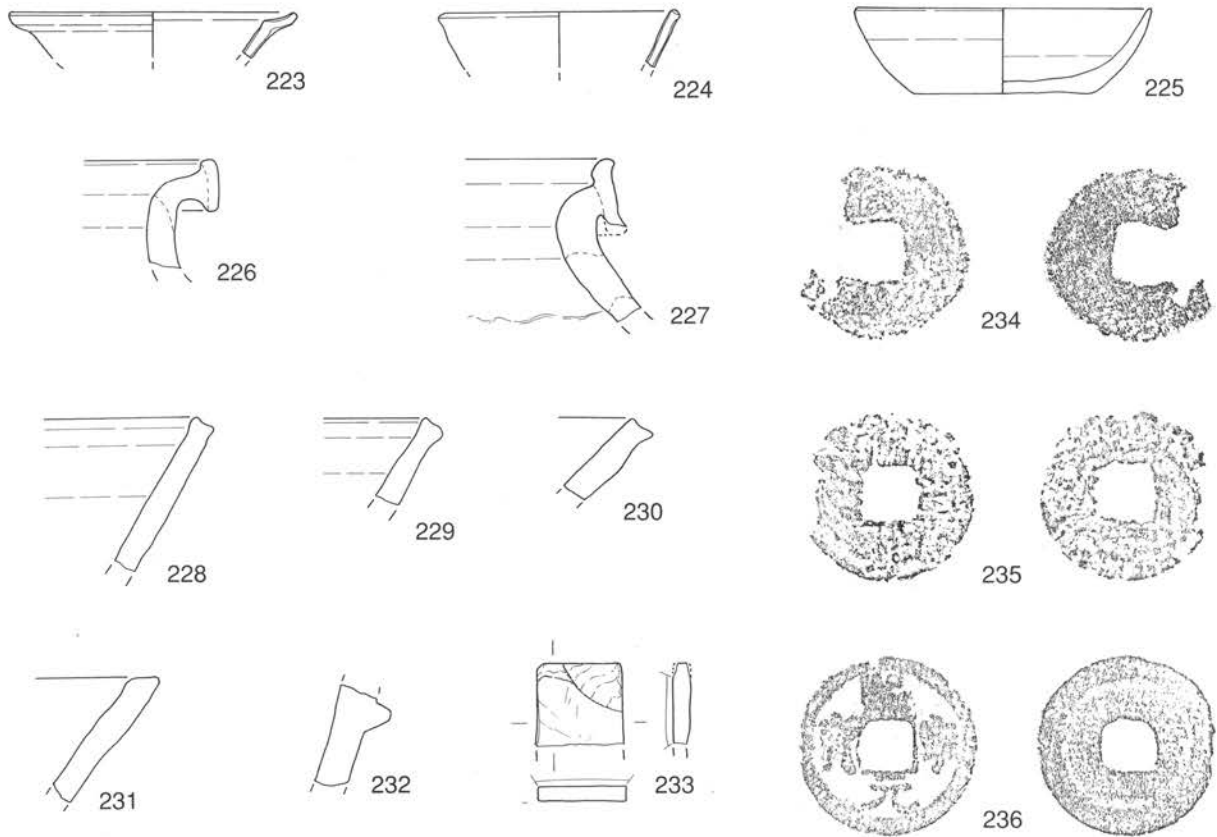


第6トレンチ 1面 溝状遺構2

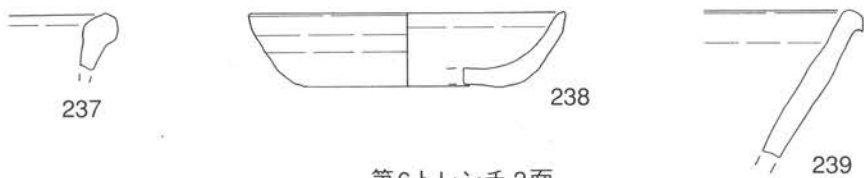


0 10cm

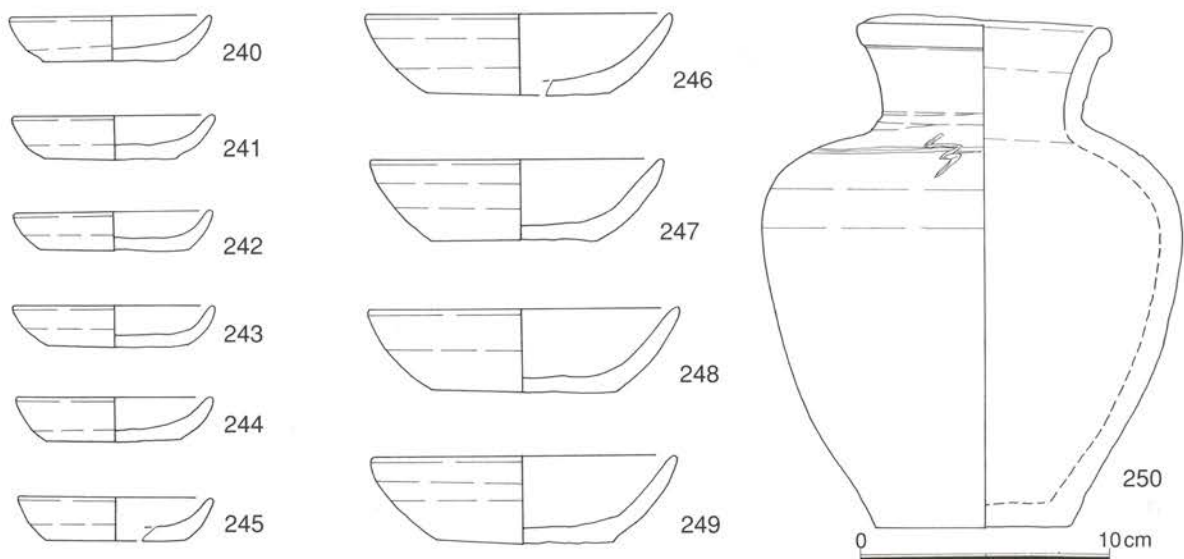
図29 第6トレンチ出土遺物(1)



第6トレンチ 1面 構成土



第6トレンチ 2面



第6トレンチ 2面 常滑壺埋納遺構 (P53)

※銭は原寸

図30 第6トレンチ出土遺物(2)

表10 第1調査地点出土遺物観察表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

層位・出土地点	番 号	遺 物 名		法 量			特 徴 等
		器 種	器 形	口径	底径	器高	
1 Tr 1 面まで	図23-1	常滑	甕	(46.2)	—	—	常滑 6 b 型式
	— 2	鉄製品		径0.3	—	残16.8	鉄鍋の弦?
	— 3	鉄製品		径0.2	—	残16.0	鉄鍋の弦?
1 Tr 1 面	— 4	青磁	酒会壺	—	—	—	蓋の縁部分か 龍泉窯系
	— 5	かわらけ	小皿	(7.4)	4.7	2.3	轆轤成形
	— 6	かわらけ	小皿	(7.8)	4.9	2.4	轆轤成形
	— 7	かわらけ	小皿	7.5	4.7	2.2	灯明皿 轆轤成形
	— 8	かわらけ	小皿	8.0	4.7	1.8	轆轤成形
	— 9	かわらけ	大皿	(10.8)	6.9	3.0	轆轤成形
	— 10	かわらけ	大皿	(10.7)	(6.0)	3.0	轆轤成形
	— 11	かわらけ	大皿	(11.5)	(5.7)	3.1	轆轤成形
	— 12	かわらけ	大皿	(11.7)	(6.9)	3.2	轆轤成形
	— 13	かわらけ	大皿	13.0	8.8	3.5	灯明皿 轆轤成形
	— 14	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑 7 型式
	— 15	常滑	片口鉢	(32.4)	(14.0)	9.4	Ⅱ類 常滑 9 型式
	— 16	常滑	片口鉢	—	—	—	内面摩滅
	— 17	瀬戸	卸皿	(14.5)	(7.0)	3.7	糸切り 古瀬戸中期Ⅱ期
	— 18	瀬戸	卸皿	(16.0)	(9.6)	3.9	糸切り 古瀬戸中期Ⅱ期
	— 19	土器質	羽釜	—	—	—	南伊勢系
	— 20	滑石製品	加工品	—	—	—	鍋の転用品
1 Tr 1 面構成土	— 21	陶器	天目茶碗	(9.4)	(4.6)	4.6	建窯鉄釉
	— 22	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類
1 Tr 3 面	— 23	かわらけ	小皿	7.5	4.9	1.6	轆轤成形
	— 24	かわらけ	小皿	(10.5)	5.5	3.3	轆轤成形
	— 25	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑 9 型式 6 Tr 1 面構成土と接合
1 Tr 3 面溝状遺構2	— 26	かわらけ	小皿	(8.0)	5.3	2.3	轆轤成形
1 Tr 3 面構成土	図24-27	かわらけ	小皿	(7.4)	5.5	1.8	燈明皿 轆轤成形
	— 28	かわらけ	小皿	(7.1)	(4.8)	2.1	轆轤成形
	— 29	常滑	甕	(51.0)			常滑 6 a 型式
1 Tr 4 面	— 30	かわらけ	小皿	(7.5)	(4.2)	1.7	轆轤成形
	— 31	かわらけ	大皿	(11.5)	(7.8)	3.3	轆轤成形
	— 32	常滑	甕	—	—	—	常滑 6 b 型式
	— 33	常滑	甕	—	—	—	常滑 6 b 型式
	— 34	鉄製品	釘	長(2.0)	幅0.3	厚0.2	
1 Tr 4 面 P 10	— 35	鉄製品	釘	長(4.3)	幅0.4	厚0.2	
1 Tr サブトレンチ内	— 36	かわらけ	小皿	7.0	4.3	2.2	轆轤成形
	— 37	かわらけ	小皿	7.8	4.9	2.0	轆轤成形
	— 38	かわらけ	小皿	7.7	5.2	2.0	轆轤成形
	— 39	かわらけ	小皿	7.8	4.9	2.0	轆轤成形
	— 40	瀬戸	平碗	(16.5)	—	—	灰釉ツケガケ 古瀬戸後期Ⅱ期
	— 41	石製品	砥石	長(6.6)	幅7.5	厚2.2	鳴滝 仕上砥
	— 42	鉄製品	皿	—	(6.0)	—	鋳物
	— 43	鉄製品	釘	長(4.5)	幅0.5	厚0.2	
	— 44	銅製品	銭	径2.3	重2.9g		元豊通寶 初鋳1078年 北宋
	— 45	銅製品	銭	径2.4	重3.1g		景德元寶 初鋳1004年 北宋
	— 46	銅製品	銭	径2.4	重(2.4)g		皇宋通寶 初鋳1038年 北宋
1 Tr サブトレンチ内 溝状遺構	— 47	かわらけ	大皿	13.3	7.1	3.8	轆轤成形
	— 48	かわらけ	大皿	(12.8)	7.4	3.6	轆轤成形
1 Tr 攪乱 1	図25-49	かわらけ	小皿	7.9	4.8	1.8	燈明皿 轆轤成形
	— 50	常滑	甕	—	—	—	常滑 6 b 型式 52 と同一個体か
	— 51	常滑	甕	—	—	—	常滑 6 b 型式
	— 52	常滑	甕	—	—	—	常滑 6 b 型式 50 と同一個体か
	— 53	常滑	加工品	—	—	—	甕の転用品(すり常滑)
	— 54	常滑	加工品	—	—	—	甕の転用品(すり常滑)
1 Tr 攪乱 2	— 55	かわらけ	大皿	(13.8)	9.2	3.9	轆轤成形 外底部中央に焼成後の穴有り
	— 56	瀬戸	天目茶碗	—	(4.7)	—	鉄釉ツケガケ 古瀬戸後期

(*)は復元値及び残長 単位はcm

層位・出土地点	番 号	遺 物 名		法 量			特 徴 等
		器 種	器 形	口径	底径	器高	
2 Tr 1 面	図25-57	かわらけ	小皿	(7.8)	(5.4)	2.3	轆轤成形
	-58	かわらけ	大皿	(11.9)	(7.0)	3.0	轆轤成形
3 Tr 1 面まで	-59	かわらけ	小皿	7.0	5.0	1.8	灯明皿 轆轤成形 歯牙痕有
	-60	かわらけ	小皿	7.4	4.8	1.8	轆轤成形
	-61	かわらけ	小皿	7.4	5.6	2.0	轆轤成形
	-62	かわらけ	小皿	7.4	4.7	2.0	轆轤成形
	-63	かわらけ	大皿	10.6	6.0	2.6	灯明皿 轆轤成形
	-64	かわらけ	大皿	(13.2)	6.8	3.7	轆轤成形
	-65	かわらけ	大皿	(14.2)	(9.6)	3.7	轆轤成形
	-66	瀬戸	皿	—	5.0	—	糸切り
	-67	鉄製品	釘	長(3.9)	幅0.5	厚0.5	
	-68	鉄製品	釘	長(3.2)	幅0.5	厚0.6	
	-69	鉄製品	釘	長(7.0)	幅0.7	厚1.2	
3 Tr 1 面	-70	かわらけ	小皿	(7.2)	4.8	1.6	轆轤成形
	-71	かわらけ	小皿	7.5	4.4	2.2	灯明皿 轆轤成形
	-72	かわらけ	小皿	7.8	4.6	2.2	灯明皿 轆轤成形
	-73	常滑	片口鉢	—	—	—	I 類
	-74	五輪塔	空風輪	—	—	—	鎌倉石製 風化著しい
3 Tr 1 面構成土	図26-75	かわらけ	小皿	7.4	5.0	1.9	轆轤成形
	-76	かわらけ	小皿	7.4	4.9	1.9	轆轤成形
	-77	かわらけ	小皿	(7.5)	5.0	1.2	轆轤成形
	-78	かわらけ	小皿	(7.8)	4.8	1.6	轆轤成形
	-79	かわらけ	大皿	12.4	7.4	3.2	轆轤成形
	-80	かわらけ	大皿	11.8	7.5	3.5	轆轤成形
	-81	かわらけ	大皿	13.4	7.0	3.0	轆轤成形
	-82	かわらけ	大皿	13.6	7.5	3.2	轆轤成形
	-83	常滑	片口鉢				I 類
	-84	鉄製品	火打ち金	長10.5	幅3.4	厚0.4	
	-85	鉄製品	釘	長(5.1)	幅0.9	厚0.6	
	-86	鉄製品	釘	長(3.7)	幅0.5	厚0.6	
	-87	鉄製品	釘	長(3.7)	幅0.5	厚0.5	
	-88	鉄製品	釘	長(4.6)	幅0.6	厚0.3	
	-89	鉄製品	釘	長(6.2)	幅0.7	厚0.3	
	-90	鉄製品	釘	長(5.2)	幅0.6	厚0.4	
	-91	鉄製品	釘	長(2.2)	幅0.5	厚0.4	
	-92	鉄製品	釘	長(3.7)	幅1.1	厚0.9	
	-93	石製品	砥石	長(4.2)	幅3.3	厚1.6	天草 中砥
	-94	石製品	砥石	長(2.8)	幅3.3	厚0.6	鳴滝 仕上砥
	-95	石製品	砥石	長(6.2)	幅1.6	厚1.1	上野 中砥
	-96	石製品	硯	長(7.2)	幅2.7	厚4.4	剥離片
3 Tr 2 面	-97	かわらけ	小皿	(8.5)	(6.3)	1.7	轆轤成形
3 Tr サブトレンチ内	-98	青磁	蓮弁文碗	—	—	—	龍泉窯系
	-99	青磁	燭台か	—	—	—	
	-100	かわらけ	大皿	12.0	7.1	3.6	轆轤成形
	-101	土器質	火鉢	—	—	—	煤付着
	-102	常滑	壺	—	—	—	研磨痕有り
	-103	常滑	鷹口壺	5.2	10.1	8.2	完形品 常滑 6 a 型式
	-104	鉄製品	釘	長(4.0)	幅0.4	厚0.6	
	-105	鉄製品	釘	長(2.7)	幅0.2	厚0.4	
	-106	鉄製品	釘	長(5.0)	幅0.4	厚0.2	
	-107	鉄製品	釘	長(6.9)	幅0.2	厚0.4	
	-108	銅製品	銭	径2.4	重3.4g		元豊通寶 初鑄1078年 北宋
	-109	銅製品	銭	径2.4	重4.2g		元祐通寶 初鑄1086年 北宋
	-110	銅製品	銭	径2.3	重2.5g		元豊通寶 初鑄1078年 北宋
	-111	銅製品	銭	径2.4	重(1.3)g		○元○寶 銭種不明
	-112	かわらけ	大皿	(12.8)	8.0	3.5	轆轤成形
	-113	常滑	甕	—	(18.0)	—	

(*)は復元値及び残長 単位はcm

層位・出土地点	番 号	遺 物 名		法 量			特 徴 等
		器 種	器 形	口径	底径	器高	
4 Tr 2 面まで	図27-114	青磁	蓮弁文碗	(17.0)	—	—	龍泉窯系
	-115	かわらけ	小皿	(7.8)	(5.4)	1.7	轆轤成形
	-116	かわらけ	大皿	(13.0)	7.8	3.4	轆轤成形
	-117	瀬戸	仏華瓶	—	—	—	灰釉 印花文 竹管文 古瀬戸中期
	-118	瀬戸	折縁皿	(15.4)			ハケヌリ 古瀬戸中期Ⅰ期
	-119	陶器	山茶碗	(14.0)	—	—	
	-120	鉄製品	釘	長(6.6)	0.9	0.4	
	-121	鉄製品	釘	長(5.7)	0.5	0.5	
	-122	鉄製品	釘	長(2.8)	0.5	0.6	
	-123	石製品	砥石	長(3.0)	幅3.6	厚0.6	鳴滝 仕上砥
	-124	石製品	砥石	長(2.6)	幅3.4	厚0.7	鳴滝 仕上砥
4 Tr 2 面	-125	常滑	片口鉢	—	—	—	
	-126	瓦質	火鉢	—	—	—	
	-127	亀山	甕	—	—	—	
	-128	鉄製品	釘	長(4.5)	0.5	0.4	
	-129	鉄製品	釘	長(4.9)	0.4	0.5	
4 Tr 2 面土抗 4	-130	青白磁	梅瓶	—	—	—	
	-131	かわらけ	大皿	(13.4)	9.4	3.6	轆轤成形
4 Tr 2 面構成土	-132	白磁	口元皿	(13.6)	—	—	
	-133	青磁	折縁皿	—	—	—	龍泉窯系
	-134	かわらけ	大皿	(12.6)	(8.5)	3.5	轆轤成形
	-135	かわらけ	大皿	12.1	8.1	3.0	轆轤成形
	-136	陶器	山茶碗	—	—	—	南部系尾張型 7～8 型式
4 Tr 3 面	-137	白磁	四耳壺	—	—	—	
	-138	青磁	碗	—	3.6	—	貫入多い 龍泉窯系
	-139	かわらけ	小皿	7.8	5.0	1.5	灯明皿 轆轤成形
	-140	石製品	砥石	長(2.0)	幅3.8	厚0.6	鳴滝 仕上砥
4 Tr 攪乱	-141	青磁	蓮弁文碗	(11.2)	—	—	龍泉窯系
	-142	かわらけ	小皿	8.0	4.6	1.8	轆轤成形
	-143	かわらけ	小皿	7.7	—	1.8	灯明皿 手捏ね成形
	-144	かわらけ	小皿	(7.8)	(4.7)	2.3	轆轤成形
	-145	かわらけ	小皿	(8.0)	5.2	1.7	轆轤成形
	-146	かわらけ	小皿	(8.8)	(7.4)	1.8	轆轤成形
	-147	かわらけ	大皿	(12.0)	8.2	3.4	轆轤成形
	-148	かわらけ	大皿	(13.2)	(7.2)	3.1	轆轤成形
	-149	かわらけ	大皿	(13.4)	(7.4)	3.9	轆轤成形
	-150	陶器	山茶碗	—	(5.2)	—	初殻高台 北部系東濃型
	-151	瀬戸	卸皿	—	—	—	ハケヌリ 古瀬戸後期Ⅰ期
	-152	瓦質	火鉢	—	—	—	体部穿孔
5 Tr 2 面まで	図28-153	青磁	折縁鉢	—	—	—	龍泉窯系
	-154	かわらけ	小皿	(8.0)	(5.7)	1.6	轆轤成形
	-155	かわらけ	大皿	(12.5)	(7.4)	3.3	轆轤成形
	-156	瀬戸	折縁皿	—	—	—	
	-157	常滑	片口鉢	—	—	—	
	-158	瓦質	火鉢	—	—	—	
	-159	石製品	碁石	径2.1	—	厚0.5	黒色
	-160	石製品	滑石スタンプ	長6.1	幅3.5	厚1.6	滑石製鍋の転用品 菊花文 孔有り
	-161	石製品	砥石	長(6.8)	幅4.5	厚(0.9)	転用品
	-162	かわらけ	大皿	(12.4)	7.0	3.0	轆轤成形
5 Tr 2 面	-163	かわらけ	大皿	12.1	7.5	2.8	轆轤成形
	-164	瀬戸	卸皿	—	—	—	ハケヌリ 古瀬戸中期Ⅱ期
5 Tr 2 面合わせ口 かわらけ埋納遺構	-165	かわらけ	大皿	16.2	9.7	4.3	合わせ口かわらけ 上
	-166	かわらけ	大皿	16.2	9.7	4.0	合わせ口かわらけ 下
5 Tr 2 面火葬跡	-167	青磁	鉢	—	—	—	内面蓮弁文 龍泉窯系
	-168	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅰ類 常滑 5 型式

(*)は復元値及び残長 単位はcm

層位・出土地点	番 号	遺 物 名		法 量			特 徴 等
		器 種	器 形	口径	底径	器高	
5 Tr 2 面火葬跡	図28-169	瀬戸	折縁深皿	(28.1)	—	—	灰釉 ハケヌリ・ツケガケ 古瀬戸中期Ⅲ期
	-170	銅製品	銭	径2.4	重2.6g	—	開元通寶 初鑄621年 唐 背文月
5 Tr 2 面構成土	-171	白磁	碗	—	(4.6)	—	
	-172	青磁	蓮弁文碗	—	—	—	龍泉窯系
	-173	青白磁	梅瓶	—	—	—	
	-174	かわらけ	小皿	8.0	5.4	1.9	轆轤成形
	-175	かわらけ	小皿	(8.1)	5.2	1.9	轆轤成形
	-176	かわらけ	大皿	11.0	5.8	3.4	轆轤成形
	-177	かわらけ	大皿	(11.8)	(7.8)	3.4	轆轤成形
	-178	かわらけ	大皿	(13.2)	7.5	3.4	轆轤成形
	-179	常滑	蔦口壺	—	—	—	
	-180	石製品	滑石スタンプ	長(6.1)	幅5.3	厚(1.4)	滑石鍋の転用品
	-181	石製品	滑石スタンプ	長4.9	幅4.5	厚1.7	滑石鍋の転用品 両面文様 孔3
	-182	石製品	砥石	長(4.0)	幅3.8	厚0.5	鳴滝 仕上砥
	-183	石製品	砥石	長(5.2)	幅3.8	厚0.6	鳴滝 仕上砥
5 Tr 3 面	-184	白磁	口元皿	—	(6.6)	—	
	-185	かわらけ	大皿	(12.4)	(7.4)	3.0	轆轤成形
5 Tr 攪乱	-186	青磁	蓮弁文碗	—	—	—	龍泉窯系
	-187	青磁	香炉	—	—	—	
	-188	かわらけ	大皿	(12.8)	(6.9)	3.4	轆轤成形 内底面に轆轤目残る
	-189	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑7型式
6 Tr 1 面まで	図29-190	白磁	皿	—	—	—	
	-191	青白磁	梅瓶	—	—	—	
	-192	かわらけ	小皿	7.2	4.4	2.0	
6 Tr 1 面	-193	陶器	黄釉洗	—	—	—	泉州窯
	-194	青磁	皿	—	—	—	輪花型 貫入有り 龍泉窯系
	-195	瀬戸	入子	—	4.0	—	内面に紅付着
	-196	かわらけ	小皿	(7.9)	(5.4)	1.7	轆轤成形
	-197	かわらけ	小皿	7.5	5.2	1.7	轆轤成形
	-198	かわらけ	小皿	(7.5)	(6.0)	1.5	轆轤成形
	-199	かわらけ	大皿	(13.0)	6.2	3.1	轆轤成形
	-200	かわらけ	大皿	13.2	7.4	3.5	灯明皿 轆轤成形
	-201	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑7型式
	-202	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑9型式
	-203	常滑	壺	—	—	—	常滑6～7型式
	-204	常滑	甕	—	—	—	常滑6b型式
	-205	土器質	羽釜	(22.2)	—	—	南伊勢系
	-206	土製品	円盤状	径4.2	—	厚0.9	かわらけ質
	-207	石製品	砥石	長(3.2)	幅3.2	厚0.8	鳴滝 仕上砥
	-208	石製品	砥石	長(2.3)	幅3.5	厚0.8	鳴滝 仕上砥
	-209	石製品	砥石	長(5.1)	幅5.8	厚3.0	上野?中砥
	-210	常滑	転用砥石	長9.6	幅8.1	厚1.8	片口鉢の転用
6 Tr 1 面土抗1	-211	瓦質	火鉢	—	—	—	
	-212	鉄製品	釘	長(4.3)	幅0.2	厚0.3	
6 Tr 1 面P9	-213	土師器	碗	(14.4)	—	—	
6 Tr 1 面溝状遺構1	-214	鉄製品	釘	長(4.0)	幅0.4	厚0.3	
6 Tr 1 面溝状遺構2	-215	かわらけ	小皿	(7.4)	(4.8)	1.9	灯明皿 轆轤成形
	-216	かわらけ	小皿	(7.8)	(5.0)	2.1	轆轤成形
	-217	かわらけ	大皿	(12.8)	7.0	3.3	轆轤成形
	-218	かわらけ	大皿	(12.8)	8.0	3.4	
	-219	瀬戸	折縁深皿	—	—	—	
	-220	鉄製品	釘	長(3.2)	幅0.5	厚0.3	ハケヌリ 古瀬戸中期Ⅱ期
	-221	鉄製品	釘	長(4.4)	幅0.4	厚0.5	
	-222	鉄製品	釘	長(3.8)	幅1.0	厚0.7	
6 Tr 1 面構成土	図30-223	青磁	折縁皿	(11.7)	—	—	龍泉窯系
	-224	青磁	折腰皿	(9.1)	—	—	龍泉窯系

(*)は復元値及び残長 単位はcm

層位・出土地点	番 号	遺 物 名		法 量			特 徴 等
		器 種	器 形	口径	底径	器高	
6 Tr 1 面構成土	図30-225	かわらけ	大皿	(12.0)	7.0	3.5	轆轤成形
	-226	常滑	甕	—	—	—	常滑 6 a型式
	-227	常滑	甕	—	—	—	常滑 6 b型式
	-228	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑 7 型式
	-229	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑 7 型式
	-230	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑 7 型式
	-231	瓦質	火鉢	—	—	—	
	-232	滑石製品	鍋	—	—	—	
	-233	石製品	砥石	長(2.3)	幅3.5	厚0.8	鳴滝 仕上砥
	-234	銅製品	銭	径2.1	重(0.9)g		銭種不明
	-235	銅製品	銭	径2.2	重(1.5)g		至和通寶 初鑄1054年 北宋
	-236	銅製品	銭	径2.4	重(1.6)g		熙寧元寶 初鑄1068年 北宋
6 Tr 2 面	-237	陶器	黄釉洗	—	—	—	泉州窯
	-238	かわらけ	大皿	(12.9)	(8.4)	3.0	
	-239	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑 9 型式
6 Tr 2 面常滑壺 埋納遺構(P53)	-240	かわらけ	小皿	8.1	5.4	1.9	轆轤成形 常滑壺中
	-241	かわらけ	小皿	8.1	5.4	1.3	轆轤成形 常滑壺中
	-242	かわらけ	小皿	8.0	6.1	1.7	轆轤成形 常滑壺中
	-243	かわらけ	小皿	8.2	5.7	1.8	轆轤成形 常滑壺中
	-244	かわらけ	小皿	7.9	5.3	1.9	轆轤成形 常滑壺中
	-245	かわらけ	小皿	(7.8)	5.6	1.8	轆轤成形 常滑壺中
	-246	かわらけ	大皿	12.4	7.4	3.4	轆轤成形 常滑壺中
	-247	かわらけ	大皿	11.9	6.8	3.4	轆轤成形 常滑壺中
	-248	かわらけ	大皿	12.7	7.4	3.5	轆轤成形 常滑壺蓋(上)
	-249	かわらけ	大皿	12.3	7.1	3.6	轆轤成形 常滑壺蓋(下)
	-250	常滑	壺	9.7	7.9	21.1	肩口に凹線 篋書き記号 常滑 6 a型式

第2節 第2調査地点の調査

1. 調査区の設定

第2調査地点は、第1調査地点とは道を挟んで南に隣接する土地である。現況は竹林であった。隣接とはいえ第1調査地点からは12～13mほど標高が低い。その中央に東西3m、南北5mの調査区を設定した。調査の結果、13世紀後半から14世紀を中心とする泥岩地形面とピット群、礎石列などを検出した。

2. 基本土層

土層堆積状況は調査区の西・南・東壁で観察した。遺構覆土も含めて61層に分層でき、生活面は大きく分けて4面確認することができた。全時期で泥岩による地業が行われており、各層の層厚は第1調査地点とは様相を異にしている。当該地点での調査区は1カ所のみであるため、各層の土層を説明し、後段で堆積状況の説明を行う。

(1)土層説明(図31、図版8)

近現代堆積土

- 1層 竹林用客土。赤褐色土、粘性ややあり、しまりなし。
- 2層 近現代攪乱 コンクリート片、布等を含む。
- 3層 近現代整地層。暗褐色土、粘性あり、しまり強い。上面は硬くしまる。
- 4層 暗褐色土、粘性あり、しまりあり

中世堆積土

- 5層 1面上堆積土。暗褐色土、粘性あり、しまりあり 径1～3cmの土丹小粒を含む。
- 6層 P2覆土。暗褐色土、9層と同
- 7層 P3覆土。暗褐色土、粘性・しまりともにややあり 径5cmまでの土丹粒多く含む。
- 8層 P3覆土。黄褐色土、粘性あり、しまりあり 土丹微細粒を主体とし径10cmまでの土丹粒含む。
- 9層 P1覆土。暗褐色土、粘性あり、しまりややあり 径5cmまでの土丹粒含む。
- 10層 P5覆土。褐色土、粘性ややあり、しまりややあり 径2cmまでの土丹粒多く含む。
- 11層 P6覆土。褐色土、粘性あり、しまりあり 泥岩粒含む。
- 12層 褐色土、粘性ややあり、締まりやや弱い 泥岩粒多い。
- 13層 褐色土、粘性あり、しまりやや弱い 泥岩粒多い。
- 14層 暗褐色土、粘性ややあり、しまりあり 泥岩粒混じる。
- 15層 暗褐色土、粘性あり、しまりややあり 泥岩粒多い。
- 16層 褐色土、粘性あり、しまりあり 径2cmの泥岩多く含む。
- 17層 褐色土、粘性あり、しまり弱い 泥岩粒を主体とする。
- 18層 1面泥岩地形層。黄褐色土、しまりあり 径5cmまでの泥岩を主体とし径15cmの塊も混じる。
- 19層 泥岩地形面下1面構成土。褐色土、粘性あり、締まりやや弱い。
- 20層 土坑1覆土。褐色土、粘性あり、しまりやや弱い 砂岩粒、泥岩塊多く含む。
- 21層 土坑1覆土。褐色砂、砂岩塊多い 径70cmまでの砂岩塊の間に砂が充填されている。
- 22層 褐色土、粘性ややあり、しまり弱い 径2cmの泥岩粒、炭化物多く含む。
- 23層 褐色土、粘性ややあり、しまり弱い 炭化物、径7、8cmの泥岩多く含む。
- 24層 P14覆土。黄褐色土、粘性ややあり、しまり弱い 泥岩粒多く含む。
- 25層 P13覆土上層。褐色土、粘性あり、しまりあり 泥岩塊含む。
- 26層 P13覆土。暗褐色土、粘性弱く、しまり弱い 径2cmまでの泥岩粒多く含む。
- 27層 P13覆土。褐色土、粘性少なく、しまり弱い 径5cmまでの泥岩粒多く含む。
- 28層 黄褐色土、粘性あり、しまりあり 径2cmまでの泥岩を主体とする。
- 29層 2面泥岩地形層上堆積土。黒色土、粘性・しまりあり。
- 30層 褐色土、粘性あり、しまりややあり 径2cmまでの泥岩粒多く含む。
- 31層 2面泥岩地形層。黄褐色土、粘性あり、しまりあり 泥岩主体土。
- 32層 根攪乱
- 33層 黒色土、粘性、しまりあり。29層と同層か。
- 34層 P38覆土。暗褐色土、粘性あり、しまり弱い 炭化物含む。
- 35層 P38覆土。褐色土、粘性少なく、しまり弱い やや砂質。混入物少ない。
- 36層 P38覆土。35層に似る。径2cmの泥岩粒含む。炭化物少量含む。
- 37層 褐色土、粘性あり、しまりややあり 泥岩塊多く含む。
- 38層 褐色土、粘性ややあり、しまり弱い。径5cmまでの泥岩粒を多く含む。
- 39層 暗褐色土、粘性・しまりあり。炭化物・泥岩粒含む。
- 40層 褐色土、粘性あり、締まりやや弱い。炭化物・泥岩粒含む。
- 41層 暗褐色土、粘性・しまりあり 炭化物、径5cmまでの泥岩、砂岩粒含む。
- 42層 暗褐色土、粘性・しまりややあり 炭化物、泥岩粒、砂岩粒含む。やや砂質。
- 43層 暗褐色土、16層に似る、色調やや明るい。

- 44層 褐色土、粘性ややあり、しまり弱い やや灰色がかかる。炭化物、泥岩粒・砂岩礫多く含む。
- 45層 褐色土、粘性ややあり、しまり弱い 炭化物含む。
- 46層 P30覆土。褐色土、粘性あり、しまりややあり 泥岩粒少量含む。炭化物含む。
- 47層 P30覆土。暗褐色土、しまりややあり 42層に似る。
- 48層 P30覆土。褐色土、粘性ややあり、しまりあり 径5 cmまでの泥岩粒含む。
- 49層 P30覆土。暗褐色土、粘性弱く、しまり弱い 径3 cmまでの泥岩粒、炭化物多く含む。
- 50層 P29覆土。暗褐色土、粘性弱く、しまりややあり 混入物少ない。炭化物含む。
- 51層 P29覆土。暗褐色土、粘性ややあり、しまりあり 径2 cmまでの泥岩粒含む。
- 52層 P29覆土。暗褐色土、粘性・しまりともに弱い やや砂質。混入物少ない。
- 53層 P39覆土。褐色土、粘性ややあり、しまりあり
- 54層 P39覆土。褐色土、粘性ややあり、しまりあり 径2 cmまでの泥岩粒含む。
- 55層 P39覆土。暗褐色土、粘性やや弱く、しまりややあり 径3 cmまでの泥岩粒含む。
- 56層 3 a面構成土。褐色土、粘性やや弱い、しまりあり 径5 cmまでの泥岩粒、砂岩粒含む。
- 57層 3 a面構成土。褐色土、粘性少なく、しまりややあり 径5 cmまでの泥岩粒非常に多く含む。
- 58層 3 b面構成土。黄褐色土、粘性あり、しまりややあり 径8 cmまでの泥岩塊多く含む。
- 59層 3 b面構成土。明褐色土、粘性・しまりともに弱い 泥岩粒非常に多く含む。
- 60層 明褐色土、粘性・しまりともに弱い 泥岩粒主体層。
- 61層 明褐色土、粘性ややあり、しまり弱い 泥岩粒を主体とする。上層から湧水あり

(2)土層堆積状況(図31、図版8)

1面は現地地表下1 mで確認できた。泥岩の搗き固めを行っている18層上面である。その上層にはかわらけ片などを含む中世遺物包含層、その直上は上面が非常に堅固な硬化面となる現代整地層(3層)、その上層に竹林を作るために客土された赤土(1層)の順で堆積している。

2面は1面下20cmで確認した。泥岩による地形面である。調査区東側ではしっかりと地形がなされているが、中央より西側はやや弱いようである。東側では泥岩地形面である31層とその上層に薄く堆積する黒色土層(29層)上面を2面とした。

2面下層から調査区の東西で堆積状況の違いが顕著になる。調査区中央から東側では2面以下に泥岩による堅固な搗き堅めを確認し3面としたが(56層下)、西側にはその地層が見られなかった。ただ、東側の地形面上面と同レベルで泥岩粒を主体とする土層が堆積しており(南壁58・59層)、その上面で礎石も確認していることから、生活面としては成り立っていたようである。

南壁断面を見ると58・59層は途中から東側に傾斜している状況が見られ、その上層には西壁で見られる3 a面下の土層(38～45層)が堆積している。調査区の西側に溝状の遺構が存在した可能性もあるが、2面の調査段階でちょうどこの場所にサブトレンチを設定して掘り下げてしまったため、平面的に確認することはできなかった。

3面下は、造成土の堆積が岩盤まで続いている。60・61層がそれである。60層上面でピットを確認しており、この面を4面とした。調査区東側で現地地表下1.8 m、西側で現地地表下2.7 mの深さに岩盤を確認した。調査区中央で1 m近く西側へ落ち込む様子がわかる。岩盤上面は比較的平坦であるが、遺構等は確認できない。人為的に削平された可能性もある。

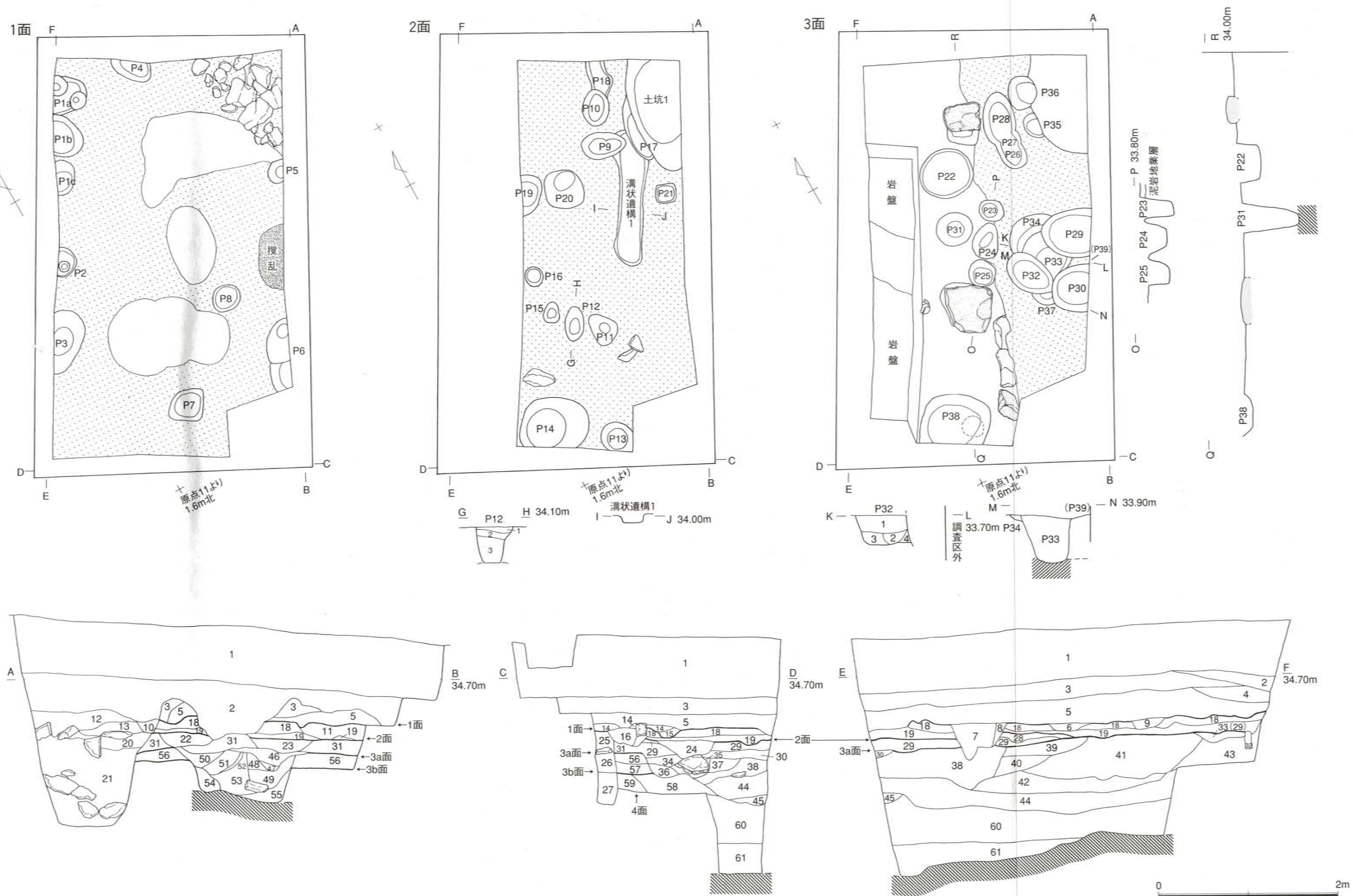


図31 第2調査地点1～3面遺構実測図・土層断面図

3. 検出した遺構

1 1面の調査

現地表面から1mで泥岩による地形面を確認し、第1面とした。上面は平坦ではなく泥岩の大きな塊がごつごつしており、もとの生活面はだいぶ壊されているようであったが、数箇所ですく状の掘り込みを確認することができた。表面の荒れは調査区中央で顕著であった。とくに大きな泥岩塊が見られた北東隅は、下層に深い遺構があり、それを埋めたものと考えられた。

ピット(表11、図31、図版9)

10基検出した。ほとんどが浅いものであり、等間隔で並ぶものもとくに見受けられず、建物跡を想定することはできなかった。そのなかで西壁にかかっているP3だけがしっかりと掘り込みをもつ。規模・覆土については計測表に記した。遺物は、P1aからかわらけ小皿が出土した。

表11 第2調査地点トレンチ1面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P1a	42	(30)	5	不整円形	基本土層5層に相当	かわらけ小皿出土
P1b	42	(32)	9	不整円形	P1aと同	
P1c	30	(20)	13	円形	P1aと同	
P2	33	(20)	5	円形	基本土層6層に相当	
P3	40	(30)	91	楕円形	1～2. 基本土層7、8層に相当	
P4	45	(20)	12	楕円形	褐色土	
P5	26	(17)	13	円形	褐色土 粘性・しまりともにややあり 径2cmまでの泥岩粒多く含む	
P6	(83)	(24)	21	楕円形	褐色土 粘性ややあり、しまりあり 泥岩粒多く混じる	
P7	38	36	20	方形	褐色土 粘性・しまりともにややあり	
P8	32	30	9	円形	黒色土 粘性ややあり、しまりあり 径0.5～1cmの泥岩粒を多く含む	

2 2面の調査

第1面の泥岩地形面を除去したところで褐色粘質土層(16層)が現れた。さらにその土層を除去したところで2枚目の泥岩地形面を確認し、第2面とした。調査区東側は地形面がしっかりと確認できるが、西側はやや弱い。ピット、土坑、溝状遺構を確認した。

ピット(表12、図31、図版9)

13基検出した。1面と同様、建物の柱穴としての並びは確認できなかったが、何かしらの生活痕跡ではあろう。とくにP14からは多くの遺物が出土している。それぞれの規模については計測表に記した。

溝状遺構1(図31、図版9)

調査区の中央東寄りに存在する。南北方向に長く、長さ150cm、最大幅は37cm、確認面からの深さは8cmと浅い。P9、17に切られる。遺物は出土していない。

土坑1(図31、図版10)

調査区北東隅で検出した。遺構の北と東は調査区外であるため全体の平面形・規模は不明であるが、全体の2/3程度を検出したであろうか。短径60cm以上、長径120cm以上の楕円形になると考えられる。確認面から110cmの深さまで掘削した。上層は大型の泥岩塊が多く、下層は砂岩塊が多い。遺構は深くなるにつれ幅が狭まり調査区外へ続く砂岩塊も多くなったため、それらを碎きながらの掘削となった。遺物は

表12 第2調査地点トレンチ2面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P 9	48	30	30	楕円形	暗褐色土 粘性・しまりともにあり 径3cmまでの泥岩粒多く含む	
P 10	40	30	11	楕円形	暗褐色土 粘性・しまりともにややあり 泥岩微細粒若干含む	かわらけ小皿出土
P 11	30	30	30	不整 楕円形	黒褐色土 粘性あり、しまりややあり 径2cmまでの泥岩小粒微量含む	
P 12	40	20	40	楕円形	1. P10と同 2. 黒褐色土 粘性・しまりともにややあり 3. 黒色土 粘性・しまりともにあり 泥岩粒含む	
P 13	36	30	51	円形	黒褐色土 粘性あり、しまりなし	かわらけ大皿、銭貨出土
P 14	75	56	51	不整円形	基本土層26層に相当	かわらけ大皿・小皿、 泉州窯産洗破片出土
P 15	24	17	20	不整円形	P10と同	
P 16	22	20	12	円形	暗褐色土 粘性、しまりともにやや あり。緻密	
P 17	(144)	60	53	楕円形	黒褐色土 粘性・しまりともにややあり。砂質 径3cmまでの泥岩粒を多く含む	かわらけ片出土
P 18	(32)	24	8	—	暗褐色土 粘性・しまりともにややあり	かわらけ片出土
P 19	47	(20)	16	不整円形	黒色土 粘性・しまりともにあり 大型の泥岩塊を含む	
P 20	44	42	23	不整円形	黒褐色土 粘性・しまりともにややあり 大型泥岩塊、泥岩小粒含む	
P 21	22	20	4	方形	暗褐色土 粘性・しまりともにややあり	

出土していない。

3 3面の調査

第2面の泥岩地形層を除去すると、暗褐色粘質土が現れた。そのさらに下層では、東半分のみ泥岩地形層が広がっていた。それらの上面でピット等を確認し、3面とした。ピットの中には暗褐色粘質土の上面でプランを確認することのできたものもあることから、暗褐色粘質土上面を3a面、泥岩地形面上を3b面とした。西半分はとくに搗き固めたような地形層はなく岩盤上に盛土した造成土が露出していた。地形面と造成土の境で礎石を検出した。地形面が途切れる部分には、大型の泥岩、砂岩が地形層を押さえるように並んでいた。

ピット(表17、図31・32、図版10)

総数17基検出した。建物として復元できるような並びはやはり認められない。しかし、重複するP29・30、32～34、37や、P31は、比較的深く掘られており、柱穴の可能性はある。P22やP38については径も大きく遺物の出土も多いため、柱穴ではなく廃棄土坑のような用途で掘られたものかもしれない。各ピットの規模等については計測表に記した。P23とP25から出土したかわらけが接合した。

また、P29・30、32～34、37の完掘後、その下層も遺構覆土であることが判明し、さらに掘削を行っている。それがP39である(図32)。上層は他遺構の重複により壊されていたため、明確な範囲は不明であるが、東壁土層断面をもとに可能な限り復元した。径は110cm以上、深さは50cm程度と考えられる。

表13 第2調査地点トレンチ3面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P 22	60	54	31	円形	暗褐色土 粘性あり、しまりなし 炭化物多く含む	かわらけ大皿多数出土
P 23	28	22	37	円形	暗褐色土 粘性あり、締まりやや弱い。砂質	かわらけ大皿出土
P 24	40	30	24	不整 楕円形	暗褐色土 粘性あり、しまりなし 泥岩塊、炭化物を含む	
P 25	30	30	23	不整円形	暗褐色土 粘性あり、しまりなし。炭化物含む	かわらけ大皿出土
P 26	29	(20)	10	楕円形	黄褐色土 粘性あり、締まりやや弱い 泥岩小粒を主体とする	かわらけ大皿 ・小皿出土
P 27	30	(20)	6	—	暗褐色土	
P 28	50	36	8	—	暗褐色土	中世土器鉢?出土
P 29	(54)	50	31	楕円形	1～3, 東壁セクション44～46層に相当	かわらけ小皿出土
P 30	50	(40)	35	楕円形	1～4, 東壁セクション42・43, 47・48層に相当	常滑甕片出土
P 31	40	38	27	円形	暗褐色土 粘性あり、しまり弱い 泥岩の小粒を多く含む	銭貨出土
P 32	58	37	27	楕円形	1. 暗褐色土 粘性あり、しまり弱い。やや砂質 泥岩小粒・炭化物を多く含む。 2. 暗褐色土 粘性やや弱く、しまり弱い。砂質 3. 暗褐色土 粘性・しまりともにあり 小礫含む、炭化物あり 4. 暗褐色土 粘性・しまりともにあり 泥岩小粒多く含む。	かわらけ大皿出土
P 33	53	(20)	49	—	暗褐色土 粘性あり、しまりややあり。炭化物含む 泥岩小粒、径15cmまでの泥岩塊多く含む	P 34を切る
P 34	(60)	(22)	9	—	暗褐色土 粘性あり、しまりややあり。炭化物含む 泥岩塊多く含む	P 33に切られる
P 35	30	(17)	23	円形	暗褐色土 粘性・しまりともにあり 径8cmまでの泥岩塊多く含む	土坑1に切られる
P 36	38	(32)	21	不整円形	暗褐色土 粘性・しまりともにあり 炭化物微量含む	土坑1に切られる
P 37	(23)	(12)	31	—	暗褐色土	
P 38	76	(56)	14	不整円形	1～3, 基本土層28, 31, 34層に相当	
P 39	(20)	(7)	(49)	—	1～3, 基本土層51, 49・50層に相当	

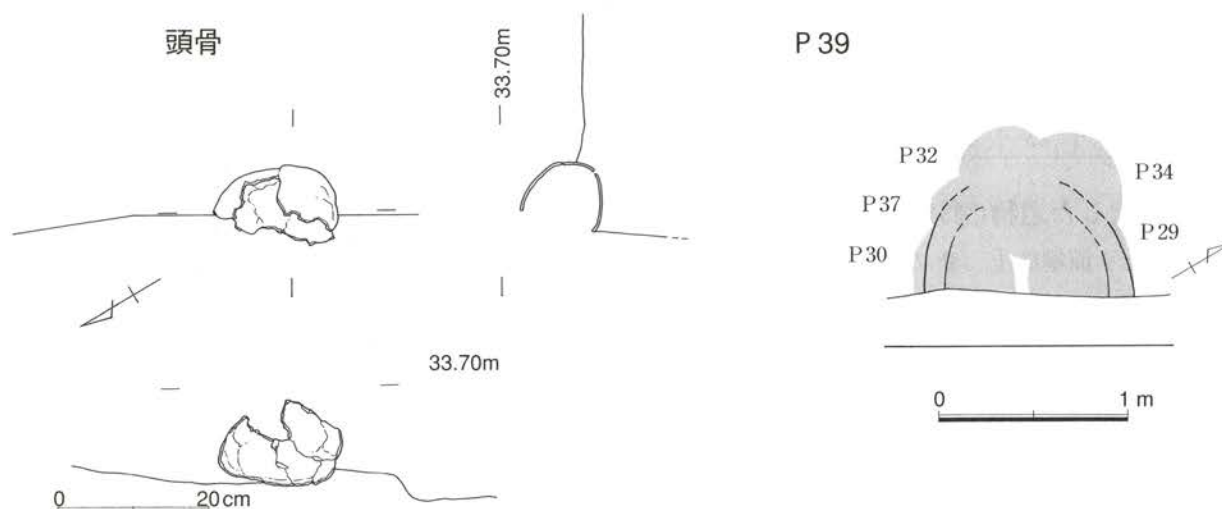


図32 第2調査地点3面 ピット、頭骨出土状況

礎石列(図31、図版10)

調査区中央で南北方向に並んで出土した。ちょうど東側に展開する泥岩の地形面と造成土との境に並ん

でいる。いずれも平面形が四角形の砂岩で、芯心距離で220cm離れている。北側の石が30×40cm、南側が50×55cmと大きく、両者の辺の向きも東西・南北共に揃っている。礎石と考えると差し支えないだろう。ただ、上面の標高を比較すると南側の石が15cm低い。

建物の礎石だとすれば当然東西方向にも同程度の距離で礎石が存在する可能性がある。しかし東も西も調査区外になってしまうため確認はできなかった。礎石列東側に堅固な地形面が存在することを考慮すれば建物は東側に展開すると考えるのが妥当であろう。

建物の性格については現状では不明とせざるを得ないが、礎石の大きさや第1調査地点との関係が手掛かりになるであろうか。北側の礎石の据え方より、かわらけ大皿片が出土した。

頭骨(図32、図版10)

3面までの掘り下げを行っていたところ、サブトレンチの東側で人頭骨を検出した。頭骨の1/3程度が残っており、部位は後頭部である。サブトレンチ掘削時に東側の壁で検出したものであるが、周囲に掘り込みはなく、造成土の中に混入しているような状況であった。調査地点を取り囲むやぐらなどから落ちてきたものとも考えることもできるが、しかしその来歴は不明である。

4 4面の調査

3面の調査後、調査区南端の一部を掘削して下層の状況を確認した。その結果、調査区南側でピットを2基確認した。ちょうど60層上面にあたる。さらに広げることで遺構数も増加する可能性はあったが、礎石列を確認した3面を壊さないよう一部のみの調査にとどめた。

ピット(図33、図版10)

2基確認した。遺物などは出土していない。規模等については計測表に記した。

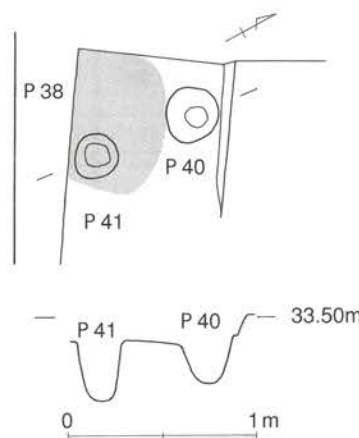


図33 第2調査地点3面下ピット実測図

表14 第2調査地点トレンチ4面 ピット計測表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

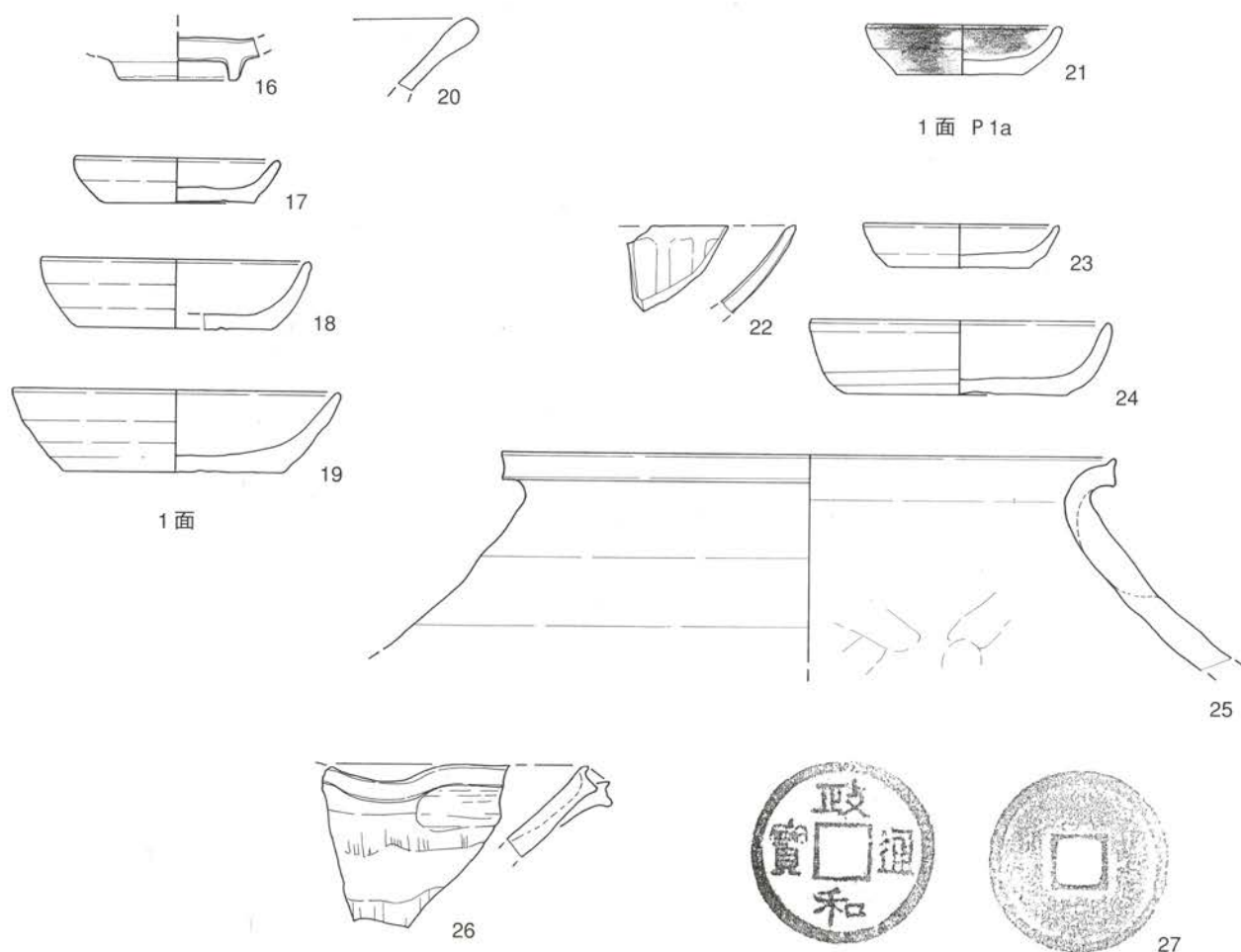
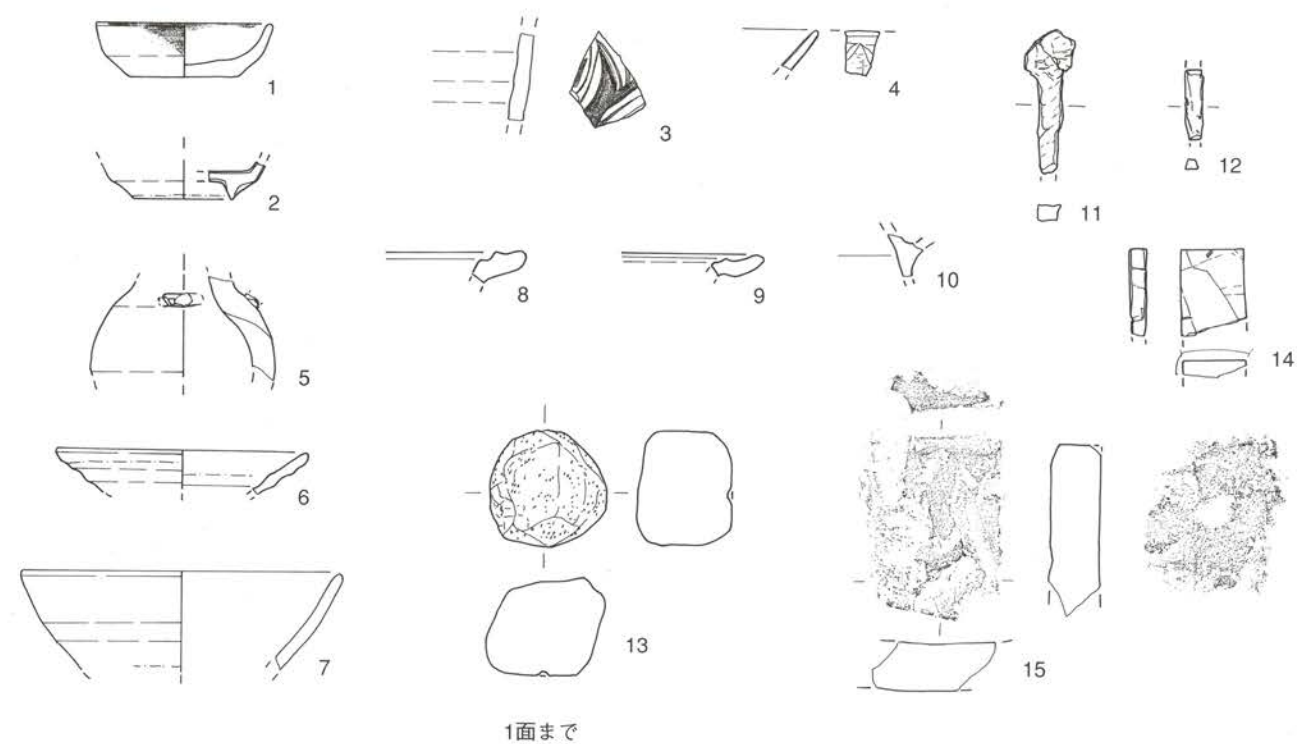
ピットNo.	長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P40	30	27	23	円形	褐色土 粘性、しまりともにややあり	
P41	25	20	37	円形	P40と同	

4. 出土した遺物(図34・35、表15、図版20・21)

1面と1面構成土、サブトレンチからは、轆轤成形かわらけ、常滑5型式甕、常滑6a型式Ⅰ類片口鉢、常滑10型式Ⅱ類片口鉢、龍泉窯系鉢が出土している。一番新しいⅡ類片口鉢を基準とするならば15世紀前半代の年代が考えられる。第1調査地点の第1トレンチ～第6トレンチまでの年代観と同じである。サブトレンチ出土の常滑5型式甕は今回調査した中世遺物の中で一番古いものである。

2面と2面構成土からは、口径大(12～13cm)、中(10.4～11.2cm)、小(8cm前後)轆轤成形かわらけ、常滑6a型式Ⅰ類片口鉢、龍泉窯系碗、青白磁梅瓶等が出土している。遺構のP14から出土した轆轤かわらけにも、口径10.4cm、器高3.5cmの中サイズの轆轤かわらけが含まれている。14世紀代の年代が考えられる。

3面からは薄手丸深口径大(12.8cm)、小(7.4cm)轆轤成形かわらけ、常滑Ⅰ類片口鉢、龍泉窯系蓮弁文碗小片等が出土している。年代を決定できる遺物が少ないが、一応14世紀前葉を考えたい。



サブトレンチ

0 10cm

※銭は原寸

図34 第2調査地点出土遺物(1)

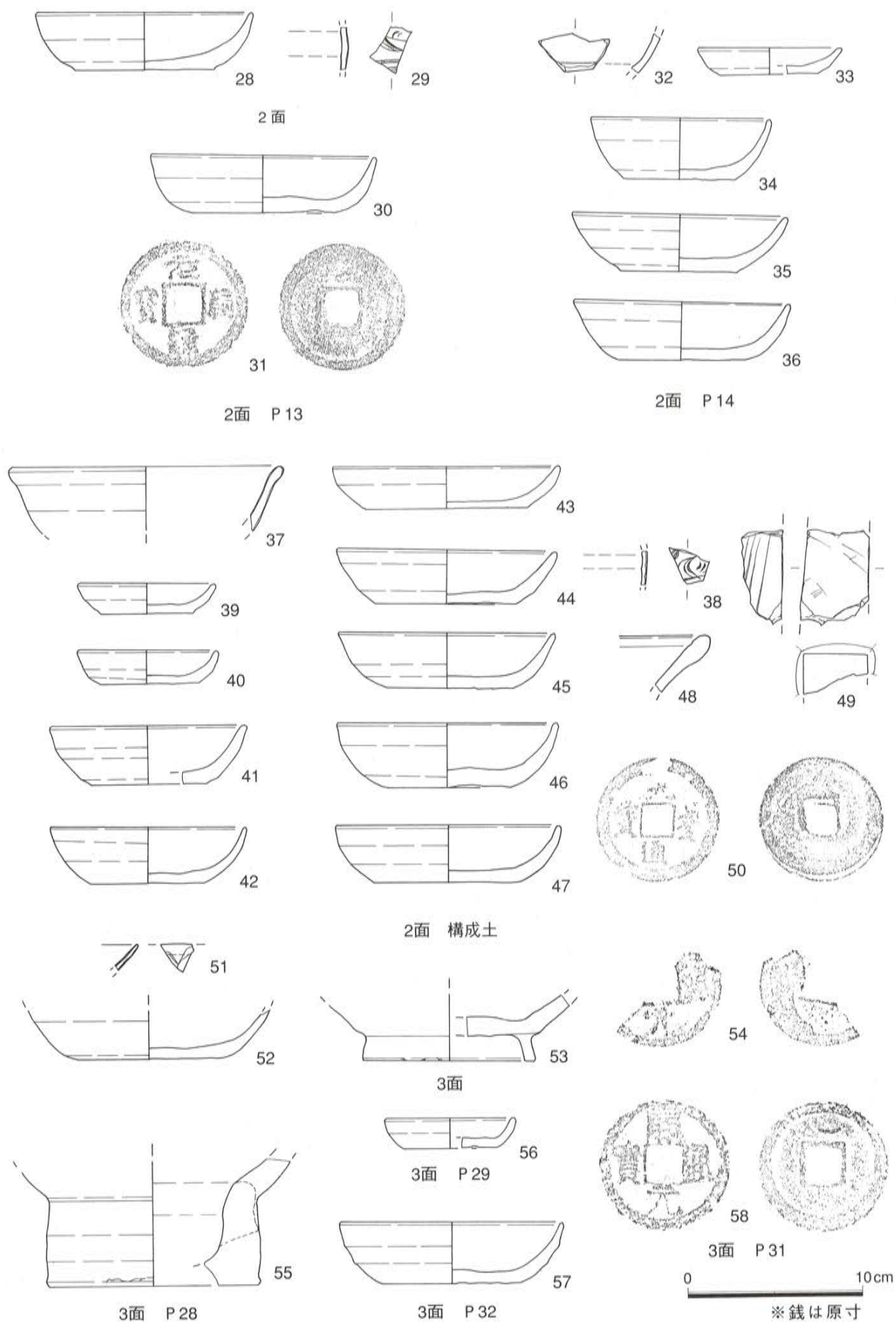


図35 第2調査地点出土遺物(2)

表15 第2調査地点出土遺物観察表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

層位・出土地点	番 号	遺 物 名		法 量			特 徴 等
		器 種	器 形	口径	底径	器高	
1面まで	図34-1	かわらけ	小皿	7.0	4.4	2.1	灯明皿 轆轤成形
	-2	青磁	折腰皿	—	(4.0)	—	
	-3	青白磁	梅瓶	—	—	—	
	-4	青磁	蓮弁文碗	—	—	—	
	-5	瀬戸	仏華瓶	最大径(7.4)			鉄釉 古瀬戸中期
	-6	瀬戸	皿	(10.0)	—	—	灰釉 ツケガケ 古瀬戸後期Ⅰ期
	-7	瀬戸	平碗	(12.8)	—	—	ハケヌリ 古瀬戸中期Ⅳ期
	-8	瀬戸	折縁皿	—	—	—	古瀬戸後期Ⅰ期
	-9	瀬戸	折縁皿	—	—	—	古瀬戸後期Ⅰ期
	-10	土器質	羽釜	—	—	—	南伊勢系
	-11	鉄製品	釘	長(5.8)	幅0.9	厚0.7	
	-12	鉄製品	釘	長(2.8)	幅0.5	厚0.3	
	-13	石製品	軽石	長4.7	幅4.7	厚3.9	加工品
	-14	石製品	砥石	長(3.5)	幅2.6	厚0.7	鳴滝 仕上砥
	-15	瓦	女瓦	—	—	厚2.0	離砂 格子叩き 鎌倉後期
1面	-16	青磁	碗	—	(4.8)	—	龍泉窯系
	-17	かわらけ	小皿	8.2	6.0	1.8	轆轤成形
	-18	かわらけ	大皿	(10.8)	8.0	2.8	轆轤成形
	-19	かわらけ	大皿	13.2	9.0	3.3	轆轤成形
	-20	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅰ類 常滑6a型式
1面P1a	-21	かわらけ	小皿	7.6	4.7	2.0	灯明皿 轆轤成形
サブトレンチ	-22	青磁	鉢	—	—	—	龍泉窯系 内面蓮弁文
	-23	かわらけ	小皿	(7.8)	5.8	1.7	轆轤成形
	-24	かわらけ	大皿	12.0	8.9	3.0	轆轤成形
	-25	常滑	甕	(24.8)	—	—	常滑5型式
	-26	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅱ類 常滑10型式
	-27	銅製品	銭	径2.4	重3.1g		政和通寶 初鑄1111年 北宋
2面	図35-28	かわらけ	大皿	12.4	8.0	3.3	轆轤成形
	-29	青白磁	梅瓶	—	—	—	38と同一個体か
2面P13	-30	かわらけ	大皿	(13.0)	(8.2)	3.3	轆轤成形
	-31	銅製品	銭	径2.5	重2.5g		元祐通寶 初鑄1086年 北宋
2面P14	-32	陶器	緑釉洗	—	—	—	泉州窯
	-33	かわらけ	小皿	8.2	5.6	1.5	轆轤成形
	-34	かわらけ	大皿	10.4	6.4	3.5	轆轤成形
	-35	かわらけ	大皿	12.4	6.6	3.3	轆轤成形
	-36	かわらけ	大皿	12.4	7.4	3.4	轆轤成形
2面構成土	-37	青磁	碗	(15.4)	—	—	龍泉窯系
	-38	青白磁	梅瓶	—	—	—	29と同一個体か
	-39	かわらけ	小皿	7.8	5.2	1.7	轆轤成形
	-40	かわらけ	小皿	8.0	5.7	1.9	轆轤成形
	-41	かわらけ	大皿	(11.2)	(6.8)	3.4	轆轤成形
	-42	かわらけ	大皿	11.2	6.5	3.2	轆轤成形
	-43	かわらけ	大皿	13.0	(9.4)	2.4	轆轤成形
	-44	かわらけ	大皿	(12.6)	(8.2)	3.1	轆轤成形
	-45	かわらけ	大皿	12.4	7.2	3.2	轆轤成形
	-46	かわらけ	大皿	12.6	7.0	3.7	轆轤成形
	-47	かわらけ	大皿	12.8	(8.4)	3.3	轆轤成形
	-48	常滑	片口鉢	—	—	—	Ⅰ類 常滑6a型式
	-49	石製品	砥石	長(5.5)	幅3.9	厚(2.5)	天草 中砥
	-50	銅製品	銭	径2.3	重2.8g		元豊通寶 初鑄1078年 北宋
3面	-51	青磁	蓮弁文碗	—	—	—	龍泉窯系
	-52	かわらけ	大皿	—	(8.0)	—	轆轤成形
	-53	常滑	片口鉢	—	—	(9.8)	Ⅰ類
	-54	銅製品	銭	—	重(0.7)g	—	○元通寶
3面P28	-55	土器質	火鉢か?	—	(12.0)	—	内面焼けている
3面P29	-56	かわらけ	小皿	7.4	5.4	1.7	轆轤成形
3面P32	-57	かわらけ	大皿	(12.8)	(8.0)	3.5	轆轤成形
3面P31	-58	銅製品	銭	径2.4	重2.6g		開元通寶 初鑄621年 唐 背文月星

第3節 やぐらの調査

1. やぐらの調査と出土した遺物

第1調査地点と第2調査地点の調査に併せて敷地内の丘陵に存在する「やぐら」の測量調査を行った。「日月やぐら」と「唐糸やぐら・地藏やぐら」のやぐら内の清掃(柱穴等は掘り下げずに確認のみ)と現況の詳細実測・写真撮影及び観察、第1調査地点周囲に存在する、平成11年度に行われた切通し周辺詳細分布調査時の記録から漏れている「衣張山やぐら群」に属するやぐらの確認・実測図作成を行った。

測量原点の国土座標(世界測地系)、原点23(X=75632.454 Y=24464.229 L=66.041)、原点24(X=75642.388 Y=24474.094 L=64.923)は、鎌倉市4級基準点I041(X=75761.086 Y=24403.666)、同I042(X=75795.487 Y=24418.511)、鎌倉市水準点No.53221 L=71.430mを移動して用いた。(日本測地系の座標データを国土地理院HP内のWeb版TKY2JGD Ver.1.3.79変換ソフトを用いて世界測地系の座標に置き換えた。)

出土遺物の編年は「全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 発表要旨集」に依る。

(1) 日月やぐら(図3・36、図版11・12)

釈迦堂切通しの上部を東側から西側に越えると標高約65m程の丘陵の中腹に、南東に開口する「日月やぐら」があり、計7基のやぐらが確認された。『鎌倉市史考古編』の中で「釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群」に分類されているやぐら群で6基と記されていたものだが、今回の調査で東側から数え5基目の左側に天井が落ち埋没しているやぐら1基を新たに確認したものである。調査時に便宜的に東側から1号2号と順に番号を付けた。壁面に穿たれた龕の形から日月やぐらと呼ばれるやぐらは3番目に当たるので3号やぐらとした。『鎌倉市史考古編』の中では、6基あるやぐらを西から数えているために日月やぐらは「中央第四号穴」と呼ばれている。更に約3～4m下方、南向きの東西斜面に沿って数基やぐらが展開しているが民有地内にあるため確認出来ていない。ほぼ同じ高さの東側には「釈迦堂口やぐら群」が展開している。

1 1号やぐら(図36、図版11)

玄室は幅1.35m、奥行1.2m、高さ1.1mの大きさで、幅1.4mの前庭との境に5cm程の段差が付く。玄室には積み直された(集められた)五輪塔の地輪(ア字)のみ一基と崩れた空風輪・火輪・地輪が重ねられたものが一基奥壁に沿って安置されている。納骨穴・龕、無し。天井の崩落が著しい。

出土した遺物(図38-1)

かわらけが1点、羨道部の右側壁際で出土した。1の法量は復元口径12.8cm、底径8cm、器高3.5cmの轆轤成形かわらけで、胎土精良の器壁が薄い製品である。やぐら羨道部分脇に貼りついていたものである。製作年代は14世紀前半代と考えられる。

2 2号やぐら(図36、図版11)

玄室のみで羨道はない。幅1.7m、奥行1.5m、高さ1.2m程である。奥壁は垂直に削られておらず床面の加工も粗雑である。奥壁中央に五輪塔一基。水輪(バ字)地輪(ア字)に梵字が残る。納骨穴・龕、無し。

出土した遺物(図38-2)

実測可能なかわらけが1点と細片が出土。2の法量は復元口径13.2cm、底径7.8cm、器高3.8cmの轆轤成形かわらけで、胎土精良の器壁が薄い製品である。崩落した岩の隙間から出土している。14世紀前半代と考えられる。

3 3号やぐら(日月やぐら)(図36、図版11)

日月やぐらについては、昭和32年の八幡義生氏らの調査研究(八幡1957)がある。

ここでその調査報告を抜粋すると、

「このやぐら玄室内は、左右幅九尺七寸、前後幅六尺七寸五分、高さ二尺七寸(曲尺に依る)あるもので、更に日輪文龕ある板碑形彫刻二基と月輪文龕ある板碑形彫刻一基とまた羨道右壁に薬研彫の雄渾なる阿弥陀如来の種字「キリク」を隠刻したる板碑形彫刻が、いづれも造りつけにされたる珍しいやぐらであり、殊に日輪文、月輪文には金箔をつけたる遺を見得るなど比等は数ある鎌倉やぐらのうちに於いても、はじめ発見したる唯一の立派な研究資料であることより、余は発見当時草速、このやぐらに対し、「日月やぐら」と新命名し、世に発表し、」(中略)

とある。これにより「日月やぐら」の命名は八幡義生氏によるものと知れる。

現況は玄室に短いながら羨道を備え、入口に当たる羨門も形よく残され、入口の両側には木材を立てた痕跡(柱穴・溝)が残る。玄室は奥壁の幅2.85m、奥行2.2m、高さ1.3m、奥壁と左右の壁沿いには床面より30cm程高く段状に削り出された幅40~80cmの段があり、段上に五輪塔が8基程安置されている。すべてが積み直された(集められた)もので、五輪(空風火水地)を成すものは2基のみである。段上には納骨穴が9穴穿たれている。中に火葬骨が見える。正面奥壁に3ヵ所、左側面に1ヵ所、左側面袖部に1ヵ所の計5ヵ所に龕が認められる。正面奥壁の中央と左側の龕は一辺25~30cm、奥行30cm程の方形の龕である。残り3つの龕はいずれも板碑形の龕で、浅く短冊形(高さ65~80cm、幅38~45cm)に掘り窪めた平らな面に直径35cm、奥行30cm程の円形の龕が穿たれている。日輪文龕、月輪文龕(それぞれ図36:3号やぐらA・C、B)には共に蓮座がレリーフされ、月輪文龕の上部には天蓋や瓔珞が刻まれている様子が観察できる。昭和32年の発見当時、日輪文龕や月輪文龕内には火葬骨が残り周囲の文様は金箔で装飾されていたようだが、今回の調査で詳細に観察を試みたものの、調査より50余年が過ぎ金箔は痕跡すら確認できなかった。やぐら全体が凍結融解や岩盤からの析出物によって風化が進み、壁面の阿弥陀如来の種子「キリク」や板碑形龕の蓮座のレリーフも見にくくなっている。

今回のやぐら調査は、現況状態の記録を主眼としたために、やぐら内の石塔を移動させることはせず、床面の清掃や泥を落とす程度に止めている。段上に穿たれている納骨穴の数は昭和32年の調査の成果を載せたものである。当時の玄室内の写真が『鎌倉市史考古編』「八、やぐら」第57図やぐら内部(壇と納骨穴)、第66図やぐら内壁の納骨穴(釈迦堂谷トンネル上やぐら)に収められている。

出土した遺物(図38-3~6)

出土した遺物はすべて玄室内床面の清掃時に出土したもので、轆轤成形かわらけ小皿と白磁口元皿、常滑甕体部小片が出土している。昭和32年に行われた調査時の取り残しと思われる。

かわらけは小型品で灯明に使用した痕跡を持つものが3点出土している。4は口径7.4cm、器高1.7cm、底径5.0cm、5は口径7.4cm、器高1.7cm、底径5.0cm、6は口径7.8cm、器高1.7cm、底径4.6cm、いずれも体部外面に稜線が付く。3は白磁口元皿体部小片か。小片のため法量等詳細は不明。他に常滑大甕体部片2点が出土している。小片のため図示していない。法量等詳細は不明。

昭和32年神奈川県立鎌倉高等学校地歴部による調査時には、完形のかかわらけ22個体と同破片多数、青磁破片、瀬戸水注が出土している(八幡1957)。

出土遺物について、調査報告を抜粋すると、

「(五)日月やぐら内出土資料について」 「…然処その際に古瀬戸製の注口を有する壺(完全品)一個、完全品のかわらけ二十二個、同破片多数、更に影青青椀片などが火葬したる人骨片多数と共に発見せられたのである。

ここに於いて此等の報告とその鑑定と調査研究とを余に依頼奉ったのであるが、此の古瀬戸製注口を有する壺は実測すれば、高さ十七糎、胴部直径十一糎、壺口直径六糎、底部直径七、五糎であり、殊に発見当時は、中に人骨片を持って満たされており、これが羨道右側の阿弥陀の種子「キリーク」を彫刻したる造り付け板碑形彫刻の直前に骨壺として埋葬せられたもので、埋葬法の一例として貴重な点を考察せられるのである。」

とある。この調査の記録と今回作成した遺構図を照合すると、当時出土した古瀬戸水注は、玄室右側壁「キリーク」のレリーフ真下の納骨穴から出土したことが明らかになった。報告の写真とスケッチ、法量から判断すると、出土した古瀬戸水注は古瀬戸編年の水注Ⅰ類で、記された法量、特徴から古瀬戸編年中期Ⅱ期頃に相当するものと考えられる。今回の調査で出土した轆轤成形かわらけ小皿、白磁口元皿も14世紀前半代と考えられるものである。

4 4号やぐら(図36、図版12)

玄室の幅は2.1m、奥行1.6m、高さ1.3m。規模・形態は5号やぐらとほぼ同じである。3基の五輪塔が安置されている。中央は水輪・地輪が欠損している。前面に幅1.55mの羨道と10cm程度の段差が付く。左の五輪塔の下に直径20cm程の納骨穴が穿たれていることが観察できる。中央と右側の五輪塔の下は現況不明だがおそらく穿たれていると思われる。

出土した遺物

かわらけ底部片が1点出土しているが細片のため図示出来ない。法量等詳細は不明。

5 5号やぐら(図36、図版12)

玄室の幅は2.05m、奥行1.6m、高さ1.25m。規模・形態は4号やぐらとほぼ同じである。前面には幅1.8mの羨道と25cm程度の段差が付く。床面上に4ないし5穴の納骨穴が切り合って穿たれていることが観察される。石塔・出土遺物は無し。

6 6号やぐら(図36、図版12)

これまで確認されていないやぐらである。5号やぐらと7号やぐらの前面部を調査中に岩盤の切れ込みが確認された。注意深く表土を削って行くと天井部が崩落して埋まったやぐらの輪郭を確認することが出来た。しかし今回の調査では、現況状態の記録を主眼としたために、やぐらを掘り下げる調査は行わず輪郭の把握にとどまった。玄室の幅約1.5m、奥行1.2m。長さ約1.2m程の羨道が付くが掘り下げていないため詳細は不明。検出した輪郭だけで比べるならば、2号やぐらに似ている。出土遺物は無し。

7 7号やぐら(図36、図版12)

玄室の幅は1.65m、奥行1.1m、高さ1.1m。前面に幅1.5mの羨道と20cm程度の段差が付く。玄室には積み直された(集められた)五輪塔が3基程安置されている。五輪塔下の床面には納骨穴が2穴以上穿たれている。羨道左壁に幅50cm、奥行50cm、高さ1.15cmの龕が掘り窪められ、中に高さ約84cmの五輪塔(表面に種子キャ・カ・ラ・バ・ア)が1基安置されている。玄室床面や羨道壁面に木材をはめ込んだ痕跡(溝や柱穴)が残る。出土遺物は無し。

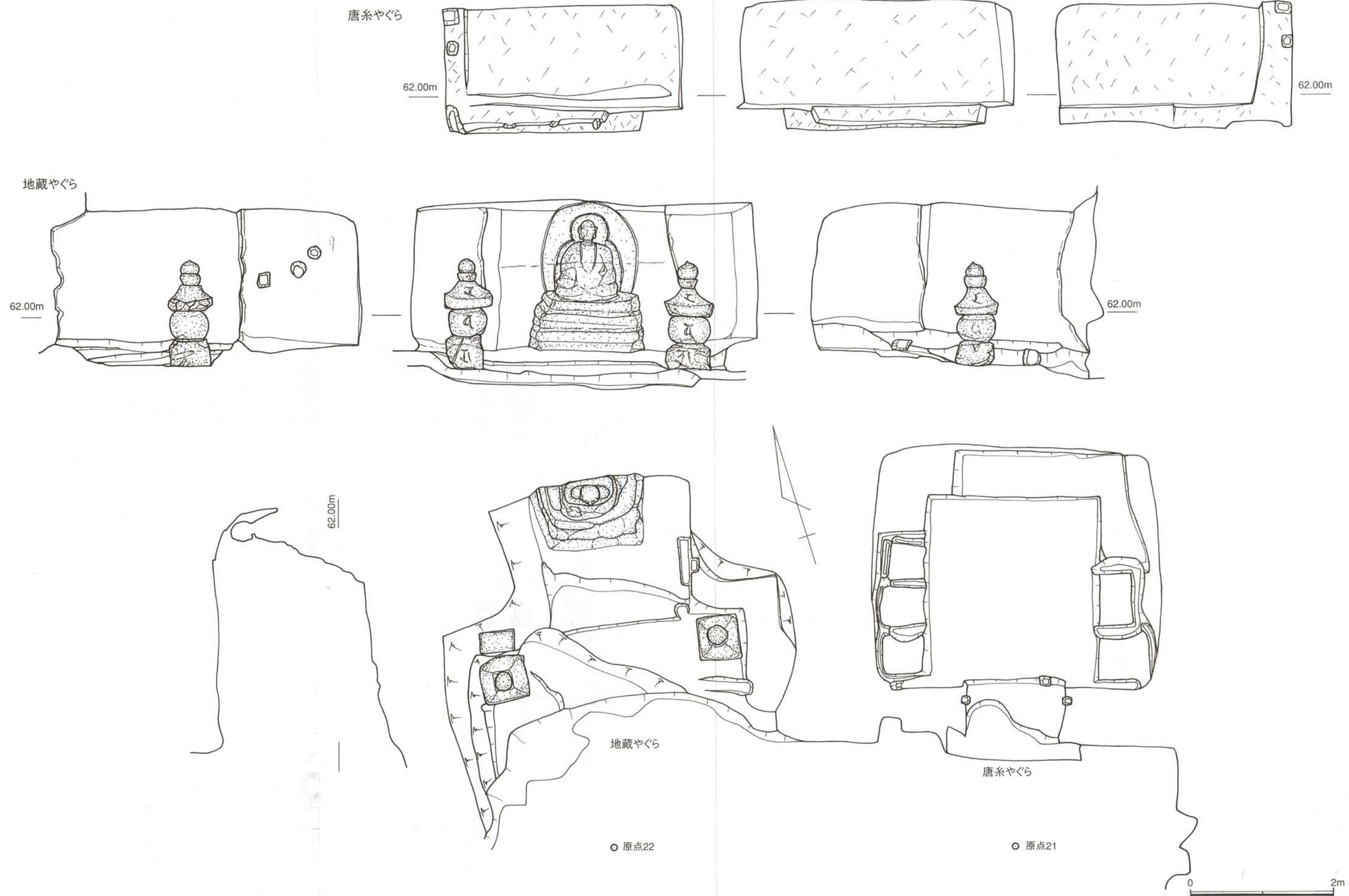


図37 唐系・地蔵やぐら群測量図

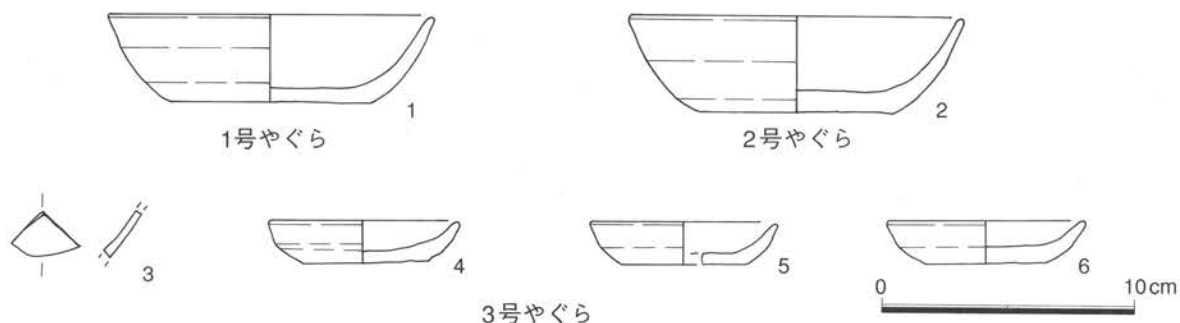


図38 やぐら出土遺物

表16 やぐら出土遺物観察表

(*)は復元値及び残長 単位はcm

層位・出土地点	番 号	遺 物 名		法 量			特 徴 等
		器 種	器 形	口径	底径	器高	
1号やぐら	図38-1	かわらけ	大皿	(12.8)	8.0		轆轤成形
2号やぐら	-2	かわらけ	大皿	(13.2)	(7.6)		轆轤成形
3号やぐら	-3	白磁	口元皿	—	—	—	
	-4	かわらけ	小皿	7.4	5.0	1.7	轆轤成形
	-5	かわらけ	小皿	7.4	5.0	1.7	轆轤成形
	-6	かわらけ	小皿	7.8	4.6	1.7	轆轤成形

(2)唐糸やぐら・地藏やぐら(図37、図版14)

木曾義仲の家人、手塚太郎光盛の女唐糸と娘万寿姫の物語『御伽草子』唐糸草子の言い伝えがあるやぐら。やぐらの始まりは鎌倉後期頃と考えられていることからあくまでも言い伝えや俗称に過ぎない。2基のやぐらが南面して並んでいる。「釈迦堂口やぐら群」・「釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群」の東側の谷奥に位置し衣張山やぐら群に属する。

測量原点の国土座標(世界測地系)、原点21(X=-75657.063 Y=-24385.703 L=61.183)、原点22(X=-75658.723 Y=-24380.364 L=61.231)は、鎌倉市4級基準点I041(X=-75761.086 Y=-24403.666)、I042(X=-75795.487 Y=-24418.511)、鎌倉市水準点No.53221 L=71.430mを移動して用いた。

1 唐糸やぐら(図37、図版14)

南向きに開口する2基のやぐらの内、向かって右側のやぐらである。玄室は幅4m、奥行3.3m、高さ1.8mで、短いながら幅1.4m、長さ1mの羨道を持っている。天井の崩落もなく遺存状態のよいやぐらである。内部の施設は奥壁と両側壁に沿って幅約70cm、高さ20～30cmの段が削り出されている。唐糸が閉じこめられた牢屋伝承のために片づけられたものか空っぽの状態である。かつては石塔が置かれていたらしく、段上には浅い溝で囲まれた50cm四方の区画が5ヵ所見られる。入口に近い玄室内の左右壁には梁材を固定する柱穴が4ヵ所穿たれている。出土遺物は無し。

2 地藏やぐら(図37、図版14)

南向きに開口する2基のやぐらの内、昭和32年の八幡義生氏らの調査研究(八幡1957)の中で「地藏やぐら」と記載されている向かって左側のやぐらである。寸法は最大幅4.8m、奥壁の幅2.8m、奥行現況3m、高さ2.2m。平面T字形、突出する奥壁には地藏菩薩座像が、手前両側には鎌倉石製の大型の五輪塔が2基安置されている。地藏菩薩は像高1.2m、座像で壁面の岩盤から直接丸彫りで削り出され、台座と光背も同様に岩盤から直接削り出されている。地藏菩薩の上半身は近年モルタルで補修された痕跡が認められ、

腕、足は欠損し辛うじて地藏菩薩と判別できる程風化が著しい。2基の五輪塔の表面には阿弥陀如来を表す種子(キャ・カ・ラ・バ・ア)が刻まれている。地藏と同様に風化が著しく地輪は大きく割れている。床面に納骨穴は見られない。地藏菩薩左側壁に龕もしくは柱穴が3穴確認された。出土遺物は無し。唐糸やぐら内地蔵菩薩座像としている文献(鎌倉国宝館1980)もある。

2. やぐらの分布調査(図4、図版13・14)

「釈迦堂口やぐら群」、「釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群」がある釈迦堂切通しの東隣の谷奥、第1調査地点(平場)の周囲に展開するやぐら群で「衣張山やぐら群」の範疇と考えられる。平成11年度に行われた釈迦堂切通し周辺の詳細分布調査時の記録からは漏れている。やぐら自体は過去にかなり手を入れられているものである。測量に用いた国土座標(世界測地系)は、原点4($X=-75688.435$ $Y=-24384.531$ $L=47.826$)、原点3($X=-75688.430$ $Y=-24399.533$ $L=47.346$)から求めたものを用いた。

(1) 1号やぐら 第1調査地点の西側斜面

第1調査地点(平場)の周囲で確認されたやぐら群の中で最大のやぐらである。開口部は東面、平面形は幅6m奥行5mの四角形である。床面は埋没している。前面が大きく崩落しているので羨道の有無及び詳細は不明。

(2) 2号やぐら 第1調査地点の西側斜面

開口部は東面、平面形は幅約4m、奥行2m程の四角形である。前面は天井部を含め大きく崩落している。やぐらに向かい階段が残る。玄室内には鎌倉石製の積み直された(集められた)五輪塔が14基安置され、それ以外の部材が散乱している。

(3) 3号やぐら 第1調査地点の西側斜面

2号やぐらの右脇、開口部は南面。平面形は幅3.7m、奥行2m程の四角形である。前面は2号やぐら同様に天井部を含め大きく崩落している。玄室内には鎌倉石製の積み直された(集められた)五輪塔が16基安置され、それ以外の部材が散乱している。

(4) 4～24号やぐら 第1調査地点の西側上段

第1調査地点(海拔46m程)の西側斜面(海拔53～55m)の平場で確認したやぐら群である。4～13号やぐらは開口部が東面、14～24までが南面ないしは東南に開口している。現況で幅1.5～2m、奥行1m程の大きさである。遺存状態は悪くほとんどのやぐらは天井部、両側壁が崩落し原形を留めていない。

(5) 25、26号やぐら 第1調査地点の北側上段

第1調査地点の北側から唐糸やぐらに向かうために付けられた園路階段脇の2基である。海拔52m程。開口部は南面。平面形は現況で25号やぐらは幅3m、奥行3m。26号やぐらは幅3.5m、奥行2.5m程の四角形である。遺存状態は悪く風化が著しい。両やぐら間の壁に穴が貫通している。

(6) 27号やぐら 第1調査地点の東側上段

第1調査地点の東側に3基存在するうちの1基。海拔50m程。開口部は西面する。遺存状態は悪く奥壁(幅3m)を残し崩落している。

(7)28号やぐら 第1調査地点の東側斜面

開口部は西面する。平面形は幅3.5m、奥行2.3m程。壁が崩落して29号と繋がっている。玄室内には鎌倉石製の積み直された(集められた)五輪塔が多数安置されている。正面の階段はおそらく近現代のもの。

(8)29号やぐら 第1調査地点の東側斜面

開口部は西面する。平面形は幅2m、奥行3.2m程。縦長のやぐらで壁が崩落して28号やぐらと繋がっている。玄室内には鎌倉石製の積み直された(集められた)五輪塔が多数安置されている。

3. 石塔の調査(表17・18、図39～41、図版13・14)

本項では本調査地点の周囲に点在する石塔について述べる。石塔が確認された地点は大別して2・3号やぐら、地藏やぐら、日月やぐら、27～29号やぐらおよび30地点である。どの地点もやぐらが機能していた時期から現存する石塔は無いと言える。よって部材別の報告を主体とし、判別不可能なものは除外した。比較的大型の石塔に関しては実測図を作成した。以下、位置別に見ていく。

(1)2・3号やぐら

現状で積み上げられた塔数は2号16基、3号17基、計33基である。2号やぐらの中央に立つ1基(図39-1)を除き積替えが行なわれている。この地点の石塔は土砂崩れの際、本調査地点近辺から出土したものという話があり、2・3地点に一括されたという。すべて五輪塔部材であり部材数にして空風輪29基、火輪28基、水輪34基、地輪40基を数える。石材別に見ると安山岩16基、凝灰岩115基で、文字類は五大種子(キャ・カ・ラ・バ・ア)43基、題目(妙・法・蓮・華・経)1基、大日報身真言(ア・ビ・ラ・ウーン・ケン)1基が確認できた。1は総高154.1cmを測る凝灰岩製で、東面にのみ五大種子を陰刻する(図40)。空風輪は大きさこそ他部材に合うものの、五大種子を有しない点、明らかに質感の違う凝灰岩である点から火・水・地と同一ではないと判断する。火輪の軒の厚さや、水輪の形状に凝灰岩製ながらも西大寺様式五輪塔の影響が窺え、軒の反りは緩やかであるものの、軒が若干外に広がる形式は、鎌倉後期から南北朝初期の様相を呈する。

(2)地藏やぐら

地藏菩薩を最奥部に肉彫するやぐらの前面に五輪塔2基が据えられる。原位置かどうかは疑わしく2基間での積替えが行なわれている可能性は大きい。比較的大型の塔であるため図化した(図40)。2基ともに凝灰岩製で四面に五大種子を陰刻する。向かって左の1は総高141.0cm、右の2は総高147.6cmを測る。1は空風輪が古手の様相を示すが水輪は簡素な造形のため判断が難しい。火輪の形式から鎌倉後期の塔とみたい。2は空風輪、水輪は簡素な造りである。火輪の形式から南北朝期の造立と考えられる。

(3)日月やぐら

日月やぐらの1号～7号やぐらの石塔の内、1号やぐら3基、2号やぐら5基、3号やぐら20基、4号やぐら11基、7号やぐら13基、計52基の部材が混在していた。やぐら内部に龕が掘られていることからやぐら機能期間に石塔が据えられていたと思われるが、すべて積替えが行なわれており、原位置に据えられていたと見える塔は皆無である。部材別で空風輪14基、火輪12基、水輪12基、地輪14基を数え、すべて凝灰岩製である。52基中30基に五大種子が陰刻される。全体的に鎌倉末から南北朝期の様相を呈する。

(4)27～29号やぐら

27～29号やぐらの内28、29号に石塔が存在する。部材にして空風輪14基、火輪7基、水輪14基、地輪11基に加え宝篋印塔(相輪・笠・基礎、各1基)、計49基が確認できる。石材別にみて安山岩26基、凝灰岩23基となる。同一個体と判断できた塔は五輪塔1基、宝篋印塔のみで、五輪塔は間に挟む小型の水輪と最下層の地輪を除外したもの、宝篋印塔は塔身が発見されなかったが残りを図化した(図40)。五輪塔は総高119.8cmを測る凝灰岩製であるが、空風輪は別個体のものであろう。残る火・水・地輪には五大種子が刻まれ、比較的大型の塔であるが風化が激しく、年代の判定は難しい。宝篋印塔の相輪は石質の違いから別個体のものと判断する。安山岩製の小型の塔であるが、現存する笠と基礎は関東形式の特徴をよく示す。笠の形状から鎌倉末から南北朝期の造立であると考えられる。

(5)30地点

25～29号やぐらの上段に位置する平場に残存する石塔群である。確認できた資料はすべて五輪塔であるが、近年開発された形跡があり、かなりの積替えが行なわれたと見える。部材にして空風輪13基、火輪23基、水輪14基、地輪33基、計83基が確認でき、石材別みると安山岩55基、凝灰岩28基となる。多くが無銘で、有紋は五大種子2基、題目3基のみとなる。全体的に南北朝から室町期の様相を呈する。

(6)その他

2・3号やぐらの上段に位置する平場に存在する。部材にして空風輪・火輪・水輪・地輪各1基である。空風輪のみ安山岩製で他は凝灰岩製である。風化が激しく年代判定には至らない。

(7)結語

本調査地点を取り巻くやぐらに現存する石塔の総数は部材数にして327基、組み合わせとしておよそ70基の五輪塔と2基の宝篋印塔が存在することになる。総合的に見ると、石塔の年代幅は鎌倉時代後期から室町時代にかけてとなる。ただ、多種多様な五輪塔が混在することから、後世この場所に近隣の石塔が持ち込まれた可能性も否定できず、石塔の年代幅をこの土地の機能していた期間にそのまま当てはめるのは危険であろう。後世において移動が困難とされる大型塔の年代のみを鑑み、鎌倉後期ごろには使用されていたと推測するに留まる。

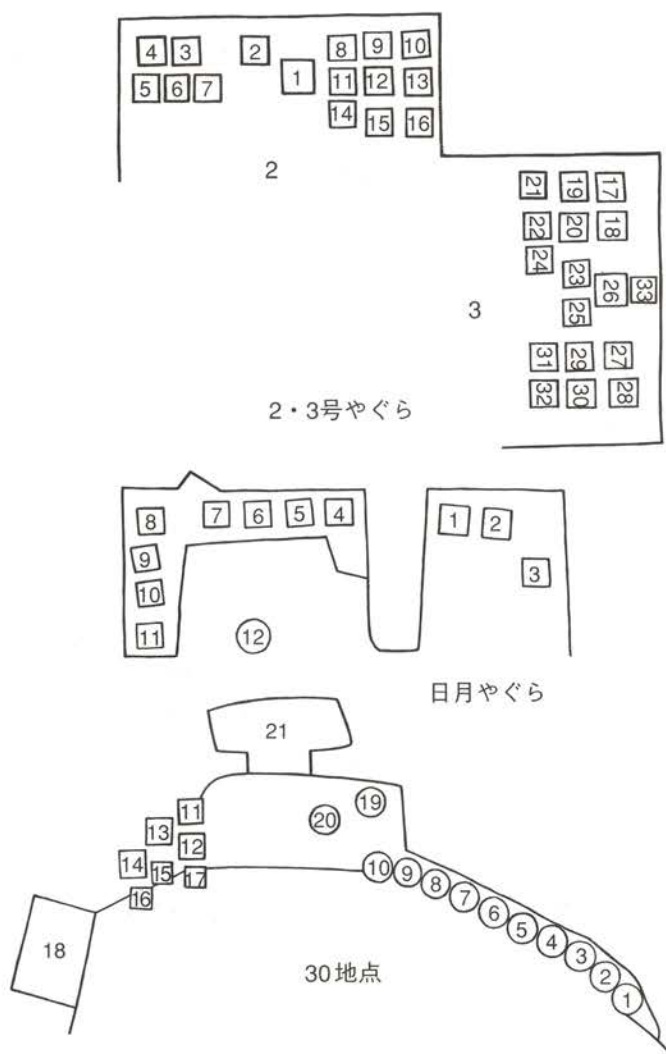
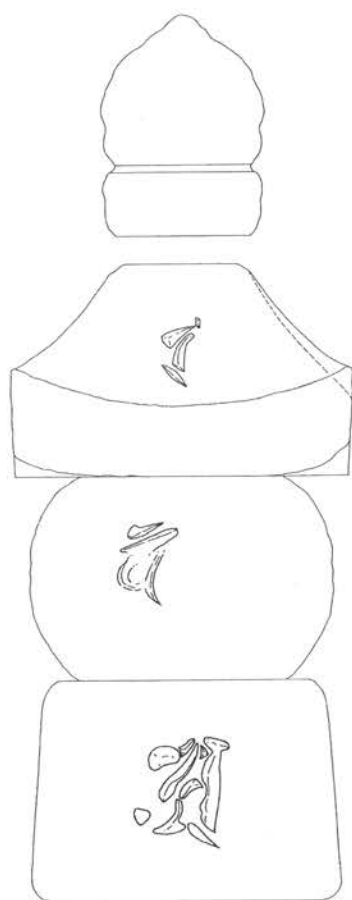
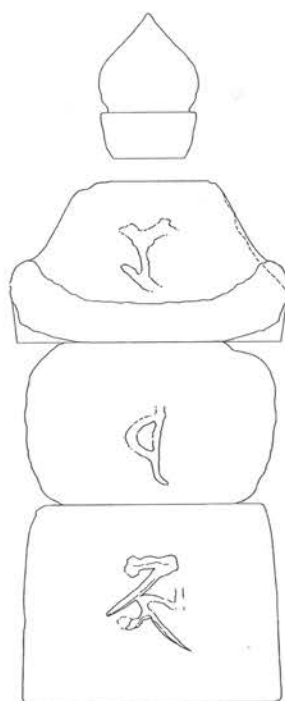


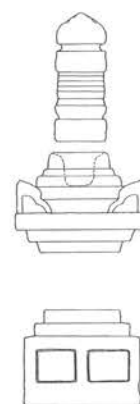
図39 やぐら内石塔位置図



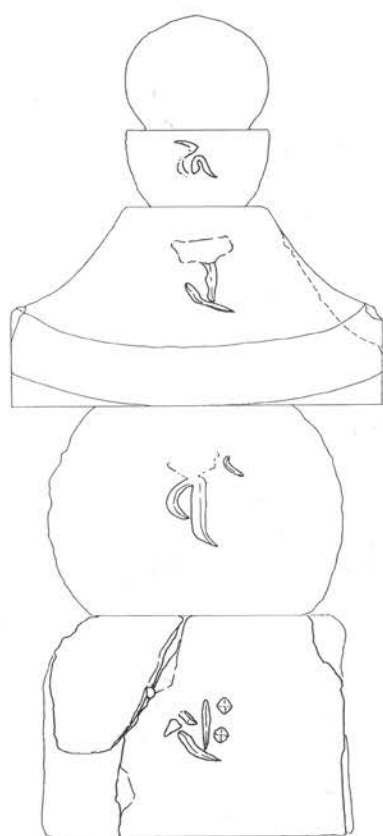
2・3号やぐら 1



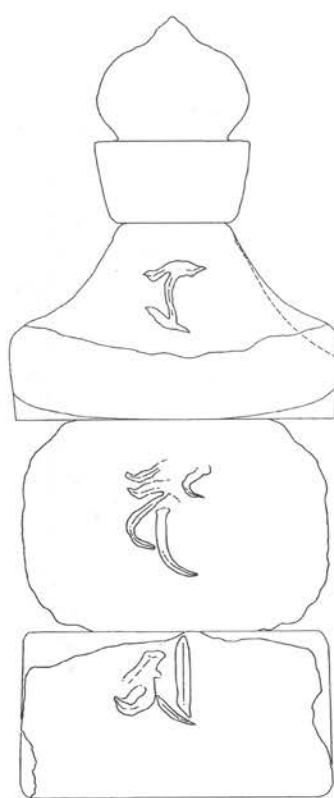
27~29号やぐら 1



27~29号やぐら 5



地藏やぐら 1



地藏やぐら 2

表17 宝篋印塔計測部位観察表

計測部位	27~29 地点5 基礎	27~29 地点5 笠	27~29 地点5 相輪 総高
a	20.9	14.5	22.4
b	17	2	
c	12	18.2	
d	6.9	2.1	最大幅
e	7	23.4	8.7
f	2.4	3.1	
g	14	23.3	
h	2.4	6	
i	13.2	5.9	
j		10.5	
k		2	
l		11.5	
m		2	
n		12.6	
o		2	
p		14.5	
q		1.3	
r		12.5	
s		3	
t		10.5	

アルファベットは図41に符号する

0 50cm

図40 やぐら内石塔実測図

表18 やぐら内石塔観察表

30地点					
番号	部材	材質	特徴	高	幅
1-1	火輪	安山岩		13.6	21.3
2	水輪	安山岩			19.4
3	地輪	安山岩		17.8	21.6
2-1	火輪	安山岩			20
2	水輪	安山岩		17.6	
3	地輪	安山岩		16.4	21
3-1	空風輪	安山岩	題目	13	20.2
2	火輪	安山岩		14.5	21.7
3	水輪	安山岩		16	21.2
4	地輪	安山岩		15.2	20.3
4-1	空風輪	安山岩	題目	13.5	20
2	火輪	安山岩		15.8	26
3	水輪	安山岩		17.3?	24.6
4	地輪	安山岩		15	19.4
5-1	火輪	安山岩		11.3	20.5
2	水輪	安山岩		14.3	19.6
3	地輪	安山岩		15.6	20.8
6-1	火輪	安山岩			19.2
2	水輪	安山岩		11	
3	地輪	安山岩		15.7	20.3
7-1	水輪	安山岩			
2	地輪	安山岩			
3	地輪	安山岩		14.7	17.6
4	火輪	安山岩		11.7	20.2
8-1	火輪	安山岩			
2	地輪	安山岩			
3	地輪	安山岩		11	15.6
4	火輪	安山岩			
9-1	火輪	安山岩			
2	地輪	安山岩			
3	空風輪	安山岩			
10-1	空風輪	安山岩		13.2	18.5
2	火輪	安山岩		15	26.4
3	水輪	安山岩		15.6	21.6
4	地輪	凝灰岩	五大種子	21.7	23.3
5	空風輪	安山岩		17.1	13.1
6	火輪	安山岩		13.9	21.1
7	空風輪	安山岩		23.8	14.3
8	空風輪	安山岩	題目	21.6	14.1
9	火輪	安山岩		16.8	24.6
11-1	火輪	凝灰岩		12.8	19.8
2	火輪	安山岩		13.8	22.3
3	地輪	安山岩		14.2	17.9
4	地輪	凝灰岩			
12-1	空風輪	安山岩		18.8	13.9
2	火輪	安山岩		14	19.9
3	地輪	安山岩		13	15.9
13-1	火輪	安山岩		13.4	22.5
2	水輪	安山岩		16.1	22.5
3	地輪	安山岩		18.6	23.5
14-1	水輪	安山岩		15.1	20.2
2	火輪	安山岩		13.8	21.4
3	地輪	安山岩		16.3	20.5
4	地輪	凝灰岩	五大種子	20.1	24.8
15-1	空風輪	安山岩			20.9
16-1	火輪	安山岩		15.6	23.4
2	地輪	凝灰岩			
17-1	地輪	凝灰岩		23.4	49
18-1	地輪	凝灰岩		19.8	24.4
2	地輪	凝灰岩		18.6	26
3	地輪	凝灰岩		17.5	
4	地輪	凝灰岩			
5	地輪	凝灰岩			
6	地輪	凝灰岩		15.4	19
7	地輪	凝灰岩		18.2	22.3
8	地輪	凝灰岩			
9	空風輪	凝灰岩		21.3	18.2
10	水輪	凝灰岩			
11	火輪	凝灰岩			
12	水輪	凝灰岩			
13	火輪	凝灰岩			
14	地輪	凝灰岩			
15	空風輪	凝灰岩			
16	地輪	凝灰岩			
17	地輪	凝灰岩			
18	火輪	凝灰岩			
19	水輪	凝灰岩			
19-1	空風輪	安山岩		31.2	19.4
2	地輪	凝灰岩		12.8	18.8
3	地輪	凝灰岩		14.6	17.7
20-1	地輪	凝灰岩			
2	水輪	安山岩			
21-1	空風輪	安山岩			

2・3号やぐら					
番号	部材	材質	特徴	高	幅
1-1	空風輪	凝灰岩		38.8	29.8
2	火輪	安山岩		38.3	60.4
3	水輪	安山岩		37	55
4	地輪	安山岩		40	56.4
2-1	空風輪	凝灰岩		23.5	20.2
2	火輪	凝灰岩	五大種子	19.3	32
3	水輪	凝灰岩		20.5	31.2
4	地輪	凝灰岩		30	36.7
5	空風輪	安山岩			
6	空風輪	凝灰岩			
7	水輪	凝灰岩			
3-1	空風輪	凝灰岩		29	20.8
2	火輪	凝灰岩	五大種子	20.4	33.9
3	水輪	凝灰岩	五大種子	20.4	34.3
4	水輪	安山岩		33.6	52.8
5	地輪	安山岩	五大種子	40.2	52.4
4-1	空風輪	凝灰岩		21.4	19
2	火輪	凝灰岩		17.2	34.6
3	水輪	凝灰岩	五大種子	16.8	30.1
4	地輪	凝灰岩	五大種子	24.2	32.7
5-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	23.3	19.9
2	火輪	凝灰岩	五大種子	23.1	33.9
3	水輪	凝灰岩		22.1	29.9
4	地輪	凝灰岩	五大種子		32.4
6-1	火輪	凝灰岩	五大種子	14.4	24.1
2	水輪	凝灰岩		18.8	25
3	地輪	凝灰岩			22.1
7-1	火輪	凝灰岩	五大種子	14.7	22.8
2	水輪	凝灰岩		13.9	21.8
3	水輪	凝灰岩		17.9	23
4	地輪	凝灰岩	五大種子	14.1	21
8-1	空風輪	凝灰岩		17.9	13.7
2	火輪	凝灰岩	五大種子	18.3	26.5
3	水輪	凝灰岩		15.2	22.9
4	地輪	凝灰岩		15.3	21.6
9-1	空風輪	凝灰岩		20.7	18.4
2	火輪	凝灰岩		23.2	37.3
3	水輪	凝灰岩		21.6	34.1
4	地輪	凝灰岩		29.1	33.4
10-1	火輪	凝灰岩			
2	水輪	凝灰岩		26.2	39.5
3	地輪	凝灰岩		26.6	40.2
11-1	空風輪	凝灰岩		18.1	13.5
2	火輪	凝灰岩		15.1	24.8
3	水輪	凝灰岩		15.3	22.9
4	地輪	凝灰岩	五大種子	16.3	20.9
12-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	25.6	18.7
2	火輪	安山岩	五大種子	20.6	34.5
3	水輪	凝灰岩	五大種子	23.5	36.3
4	地輪	凝灰岩	五大種子	25.1	32
13-1	空風輪	凝灰岩		18.1	15.5
2	火輪	凝灰岩	五大種子	19.2	33.3
3	水輪	凝灰岩	五大種子	17.9	21.9
4	地輪	凝灰岩	五大種子	20.5	26.2
5	地輪	安山岩		24	29.1
14-1	空風輪	凝灰岩			
2	火輪	凝灰岩	五大種子		
3	地輪	凝灰岩			
15-1	火輪	凝灰岩			
2	火輪	凝灰岩			
3	地輪	凝灰岩			
16-1	空風輪	凝灰岩		19.6	16.5
2	火輪	凝灰岩		18	29.3
3	水輪	凝灰岩	五大種子	21.2	32.1
4	地輪	凝灰岩	五大種子	26.6	30
17-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	22.1	16.2
2	火輪	凝灰岩		24.7	41.1
3	水輪	凝灰岩		27.5	30.6
4	地輪	凝灰岩		27.4	35.2
18-1	空風輪	凝灰岩		21.9	15.7
2	火輪	凝灰岩		13.2	30.5
3	水輪	凝灰岩		15.7	22.9
4	地輪	凝灰岩		21.9	28.2
19-1	空風輪	凝灰岩	五大種子		
2	水輪	凝灰岩			
3	地輪	凝灰岩			
4	地輪	凝灰岩			
20-1	火輪	凝灰岩			
2	水輪	凝灰岩	五大種子	22.9	30.1
3	地輪	凝灰岩		16.7	21.3
4	地輪	凝灰岩		25.8	32.2
21-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	20.1	17.7
2	火輪	安山岩	題目	17.6	27.6

2・3号やぐら					
番号	部材	材質	特徴	高	幅
3	水輪	凝灰岩	五大種子	20.3	30.3
4	地輪	凝灰岩		21.9	29.1
22-1	空風輪	凝灰岩		17.5	14.2
2	地輪	凝灰岩		17	22.6
3	地輪	凝灰岩		16.3	24.5
4	地輪	凝灰岩	五大種子	23.6	28.2
23-1	空風輪	凝灰岩		18	13.8
2	火輪	凝灰岩		15.6	24.4
3	水輪	凝灰岩			
4	地輪	凝灰岩		12.9	22.3
24-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	24.1	18.6
2	火輪	安山岩		13.2	21.5
3	地輪	安山岩		20	28.6
25-1	空風輪	安山岩	五大種子	21.1	16.6
2	火輪	凝灰岩	五大種子	19.2	30.6
3	水輪	凝灰岩		18.6	29.3
4	地輪	凝灰岩	五大種子	25.1	29.3
26-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	25.1	22.3
2	火輪	凝灰岩		22.8	59.1
3	水輪	凝灰岩	五大種子	24.6	37.7
4	地輪	凝灰岩		42.8	55.5
27-1	空風輪	安山岩		21.8	15.8
2	火輪	安山岩		18.2	28.7
3	水輪	安山岩	大日真言	20.5	27.5
4	地輪	凝灰岩		24.2	28.8
28-1	火輪	凝灰岩	五大種子	17.4	26.5
2	水輪	凝灰岩		14.7	20.8
3	地輪	凝灰岩	五大種子	21.1	24
4	地輪	凝灰岩		31.2	37.3
29-1	火輪	凝灰岩	五大種子	22.4	18.4
2	水輪	凝灰岩	五大種子	19.1	30.8
3	地輪	凝灰岩		13.2	19.9
4	地輪	凝灰岩		20.4	26.5
30-1	空風輪	安山岩	五大種子	22.1	19
2	火輪	凝灰岩	五大種子	18.9	17.8
3	水輪	凝灰岩		13.8	22.6
4	地輪	凝灰岩		22.3	29.5
31-1	空風輪	凝灰岩			
2	空風輪	凝灰岩			
3	地輪	凝灰岩		16.6	24
4	地輪	凝灰岩		20.9	28.9
32-1	水輪	凝灰岩		19.1	30
2	水輪	凝灰岩		23.6	35.2
3	地輪	凝灰岩		21.4	38.3
33-1	空風輪	凝灰岩		15.3	12.8
2	火輪	凝灰岩		13.2	31.6
3	水輪	凝灰岩		11.6	21.7
4	地輪	凝灰岩		22.6	35

地蔵やぐら

番号	部材	材質	特徴	高	幅
1-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	33.5	26
2	火輪	凝灰岩	五大種子	36	66.7
3	水輪	凝灰岩	五大種子	38.1	38.1
4	地輪	凝灰岩	五大種子	40	55.5
2-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	37	28
2	火輪	凝灰岩	五大種子	35.5	56.5
3	水輪	凝灰岩	五大種子	38.5	56
4	地輪	凝灰岩	五大種子	30	56.6

日月やぐら

番号	部材	材質	特徴	高	幅
1-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	20.5	18.2
2	火輪	凝灰岩	五大種子	16	29.5
3	水輪	凝灰岩	五大種子	19.2	28.2
4	地輪	凝灰岩		25.6	33.6
2-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	23.2	18.6
2	水輪	凝灰岩	五大種子		
3	水輪	凝灰岩	五大種子		30.5
4	地輪	凝灰岩	五大種子	19.3	28.1
3-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	24.4	
2	火輪	凝灰岩	五大種子	24	
4-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	24	17.1
2	水輪	凝灰岩	五大種子	18.8	30.1
3	水輪	凝灰岩		21.2	32.4?
5-1	空風輪	凝灰岩		20.8	16.7
2	空風輪	凝灰岩	五大種子	21.7	32.1
3	水輪	凝灰岩		21.7	31.2
4	地輪	凝灰岩		27	33.7
6-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	29.2	33.7
2	火輪	凝灰岩	五大種子	24.8	36.3

日月やぐら

番号	部材	材質	特徴	高	幅
7-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	22.4	17.1
2	火輪	凝灰岩	五大種子	23	31.5
3	水輪	凝灰岩	五大種子	31.5	28.6
4	地輪	凝灰岩	五大種子	20	28.3
8-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	27.7	31.1
9-1	地輪	凝灰岩	五大種子		32.4
10-1	地輪	凝灰岩	五大種子	19	29
11-1	空風輪	凝灰岩		21.8	17.5
2	火輪	凝灰岩	五大種子	25.3	40
12-1	空風輪	凝灰岩			
2	火輪	凝灰岩		14.2	25.2
3	水輪	凝灰岩		13.7	21.2
4	地輪	凝灰岩		20.2	30
13-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	18.7	16.1
2	火輪	凝灰岩	五大種子	17.8	30.3
3	水輪	凝灰岩		18.3	27.7
4	地輪	凝灰岩		27.1	33.3
14-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	22	17.7
2	火輪	凝灰岩	五大種子	23.1	33.4
3	水輪	凝灰岩	五大種子	20.4	32.1
4	地輪	凝灰岩	五大種子	24.8	31.1
15-1	火輪	凝灰岩		16.7	24.7
2	水輪	凝灰岩		19.3	27
16-1	地輪	凝灰岩		18.1	22.3
2	空風輪	凝灰岩		16.4	13.2
17-1	空風輪	凝灰岩		19.1	18.2
2	地輪	凝灰岩		27.9	33.3
3	水輪	凝灰岩		18.9	30.8
4	地輪	凝灰岩	五大種子	23.2	32.9
18-1	火輪	凝灰岩		11.1?	20.3
19-1	火輪	凝灰岩		24.8	35.4
2	地輪	凝灰岩		32.8	38.7
20-1	地輪	凝灰岩	五大種子	28.5	31.5

27～29号やぐら

番号	部材	材質	特徴	高	幅
1-1	空風輪	凝灰岩	五大種子	25.9	18
2	火輪	凝灰岩	五大種子	29.1	47.4
3	水輪	凝灰岩	五大種子	19	29.1
4	水輪	凝灰岩	五大種子	29.1	45.4
5	地輪	凝灰岩	五大種子	46.7	35.7
6	地輪	凝灰岩	五大種子		
2-1	空風輪	安山岩			
2	水輪	安山岩			
3	地輪	凝灰岩			31.2
4	空風輪	凝灰岩			
3-1	空風輪	安山岩		20.9	14.5
2	火輪	安山岩		16.1	25.3
4-1	空風輪	安山岩	五大種子	24.7	16.9
2	火輪	安山岩	五大種子	17.8	29.5
3	水輪	安山岩		14.9	22.1
4	地輪	安山岩		16.4	20.8
5-1	相輪	安山岩	宝篋印塔		
2	笠	安山岩	宝篋印塔		
3	水輪	凝灰岩		12.4	18
4	基礎	安山岩	宝篋印塔		
6-1	火輪	凝灰岩		17.9	18.1
2	水輪	凝灰岩		14	22.4
3	地輪	安山岩		14	16.6
4	地輪	安山岩		17.6	19.7
5	空風輪	安山岩			
6	空風輪	安山岩			
7-1	空風輪	安山岩			
2	空風輪	安山岩			
3	火輪	凝灰岩		14.2	20
4	水輪	凝灰岩		10.3	19.5
5	水輪	凝灰岩		16.1	24.3
6	地輪	凝灰岩		20.2	
7	水輪	安山岩		15.8	
8	地輪	安山岩			19.5
9	空風輪	安山岩			
8-1	水輪	安山岩			
2	地輪	安山岩			
9-1	火輪	安山岩		13	20.3
2	地輪	凝灰岩	五大種子	20.7	23.1
10-1	空風輪	凝灰岩		15.2	14
2	火輪	安山岩		12.3	21.5
3	水輪	凝灰岩		16.1	24.3
4	空風輪	凝灰岩	五大種子	14.2	
11-1	空風輪	凝灰岩		19.9	14.7
2	水輪	凝灰岩		17.8	24.9
3	地輪	凝灰岩		21	27.2

27～29号やぐら

番号	部材	材質	特徴	高	幅
11-4	水輪	安山岩			
5	空風輪	安山岩		23.9	14
12-1	水輪	凝灰岩		14.1	23

その他

番号	部材	材質	特徴	高	幅
1-1	火輪	凝灰岩		17.3	27.4
2	水輪	凝灰岩		18	25.4
3	地輪	安山岩			26.1
4	空風輪	凝灰岩		23	

総計

	安山岩	凝灰岩	合計
空風輪	24	49	73
火輪	27	46	73
水輪	19	58	77
地輪	25	76	101
宝篋印塔	3	0	3
合計	98	229	327

30地点集計

	安山岩	凝灰岩	合計
空風輪	11	2	13
火輪	18	5	23
水輪	11	3	14
地輪	15	18	33
合計	55	28	83

2・3号やぐら集計

	安山岩	凝灰岩	合計
空風輪	4	25	29
火輪	5	23	28
水輪	3	31	34
地輪	4	36	40
合計	16	115	131

27～29号やぐら集計

	安山岩	凝灰岩	合計
空風輪	9	5	14
火輪	4	3	7
水輪	5	9	14
地輪	5	6	11
宝篋印塔	3	0	3
合計	26	23	49

地蔵やぐら集計

	安山岩	凝灰岩	合計
空風輪	0	2	2
火輪	0	2	2
水輪	0	2	2
地輪	0	2	2
合計	0	8	8

日月やぐら集計

	安山岩	凝灰岩	合計
空風輪	0	14	14
火輪	0	12	12
水輪	0	12	12
地輪	0	14	14
合計	0	52	52

その他集計

	安山岩	凝灰岩	合計
空風輪	1	0	1
火輪	0	1	1
水輪	0	1	1
地輪	0	1	1
合計	1	3	4

五輪塔計測部位観察表

計測部位	2・3地点1	地蔵やぐら1	地蔵やぐら2	27～29地点1
a	56.4	56.6	55.5	46.7
b	50	55	53.8	44.2
c	40	30	40	35.7
d	35.8	44.5	39.2	39
e	55	56	54	45.4
f	37.7	41	39	36.7
g	37	38.5	38.1	29.1
h	19.7	20	18.6	14.8
i	23.3	20.2	26	22.2
j	61.5	59	67	47.5
k	60.4	56.5	66.7	47.4
l	13	11.2	11.5	7
m	13.8	11	11	9.4
n	38.3	35.5	36	29.1
o	5.8	5.5	8.2	7.1
p	5.4	5.5	6	5.2
q	28.1	28	26	17.2
r	25.2	21.3	18	12.9
s	11	15	14	7.9
t	29.8	27	26	18
u	24.1	20.8	20.5	14.7
v	27.8	22	19.5	18
w	11.3	7.8	8.3	12.3
総高	154.1	141	147.6	119.8

アルファベットは図41に符合する

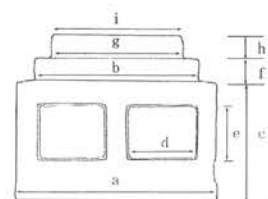
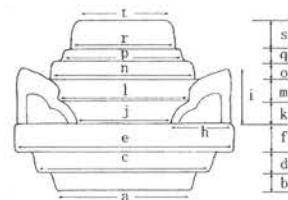
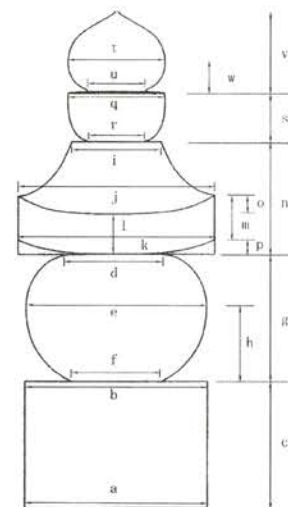


図41 石塔計測部位

第4節 遺物の出土状況

今回の調査では総数4581点の遺物が出土した。内訳は第1調査地点で4069点、第2調査地点で390点、やぐらで122点であり、近世以降の遺物187点と古代以前の遺物14点以外は中世の遺物である。

出土遺物は可能な限り三次元的に出土位置を記録したものの、記録できた遺物の総数は569点であり、全出土遺物数の約12.4%であった。内訳は第1調査地点が371点、第2調査地点が198点である。総数に対して割合が低いのは、攪乱や中世面に達するまでの遺物を一括で取りあげたことに加え、位置の記録が徹底できなかったためである。出土状況を語るには不十分であることは否めないが、分布の検討を行うと興味深い結果が得られたのも事実なので、ここで簡単ながら報告しておくこととしたい。図42～45にはそれらの出土状況を器種・時期別に分けてそれぞれシンボルで示した。実測したものは報告番号を記し、接合関係は遺物同士を繋いである(ただし、一括遺物と接合している場合は除く)。遺物が出土した遺構は、検出面の別なく外形を表示した。以下、遺物の出土状況について概観しておく。

1. 第1調査地点(図42・43)

図42には第1調査地点から出土した遺物のうち、出土位置を記録した全点の分布を器種別に提示した。図43には生産年代の判明するものとかわらけの分布をあわせて提示した。

図42を見ると場所によって遺物の密度に違いがある。これには遺構の多寡や調査深度など、様々な要因が考えられるので、その都度触れることにする。

第1トレンチは、西側では4面まで調査を実施したため、3面構成土や、4面で確認したピットから多くの常滑産の甕・壺片(●)やかわらけ(・)が出土した。P11-14間、P11-17間で常滑産甕破片2個体が接合した。一方、トレンチ中央から東側の分布はまばらである。残存状況の良好な1面までの掘削にとどめたことに加え、東端で確認したピット・溝中より遺物が出土しなかったことを反映した結果である。第2トレンチでは表土直下で中世地山面が露出するため、遺物がほとんど出土していない。

第3～5トレンチでは「面上」よりもサブトレンチ内からの出土が目立つ。断面C-Dでは遺物は造成土中から多く出土していることが看取でき、第4・5トレンチでは濃密な遺物分布地点が確認できた(図42：a～d)。

a・bは、前述のように(20ページ)、第4・5トレンチの土層断面を観察する際に掘削した大型攪乱の間の部分である。かわらけ片が多量に出土し、一部は接合している(・134)。あわせて白磁口元皿(□132)なども出土した。

分布cは、ちょうど2面構成土(基本土層Ⅲ-6層)が南へ傾斜する部分(前掲図6：断面E-F①c)に該当する。平面分布は同じように見えるが、断面分布を見ると遺物が上層と下層に分かれているので、実際は時期差のある別々の分布が重複したものと考えるのが妥当だろう。上層の遺物は、基本土層Ⅲ-6層上に堆積した黒色土(11ページ)中から出土した遺物である。かわらけや常滑産甕の破片、瓦質火鉢(◎126)が見られ、かわらけ163が接合した。下層は、攪乱の底面で確認した3面を精査した際の出土遺物である。青磁碗(▲)は上層よりも多く、また、同じ深さでは、手捏ね成型のかわらけ小皿片(図中：手捏ね)など、今回の出土遺物の中でも比較的古手の遺物が出土している(図42：C-D断面)。

分布dは2面構成土の上層を掘削した際の出土遺物で、常滑産の甕片が集中している。大半が胴部破片であり、接合しない破片も多いため全てが同一個体とはいえない。また、かわらけ177が4mほど離れた分布c上層の破片と接合した。堆積土層からすれば分布d(2面構成土上層)→分布c上層(2面上黒色土)となろうが、この接合から判断すると、分布c上層と分布d周辺はほぼ同時期に造成されたものと考えられよう。また、分布dは砥石(★)も他の場所に比べて多い。

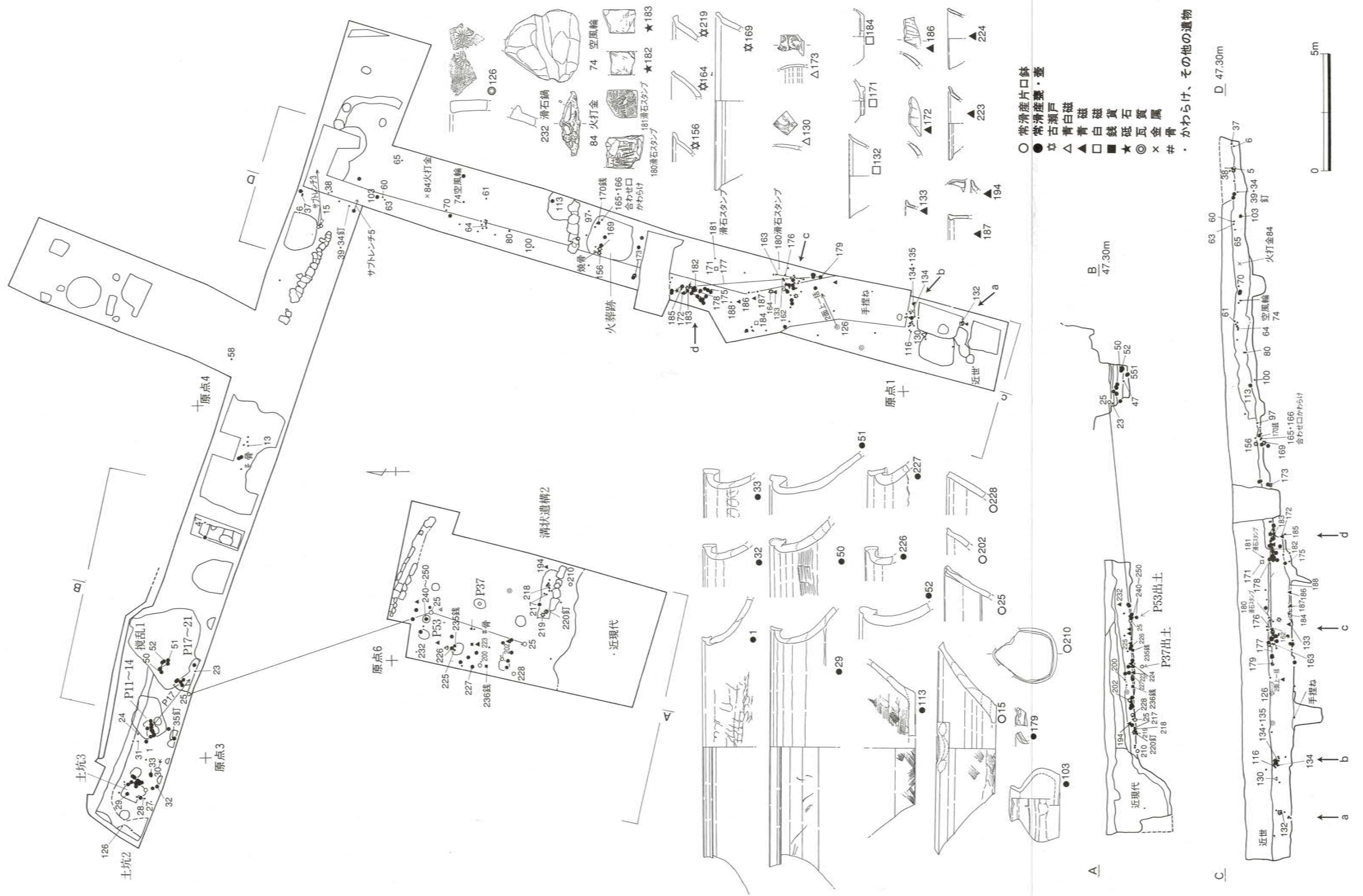


図42 第1調査地点器種別遺物分布図

第6トレンチは、東西で分布に差があるが、冒頭に述べたように東側の少なさは出土位置を記録せずに取り上げた遺物が多かったという理由による。おそらくは西側と同様な分布であったろう。

1面の溝状遺構2は出土遺物が多く、かわらけ217・218や古瀬戸219(☆)などが出土している。2面上では、掘立柱建物の一部となるP37から常滑産甕の破片が出土しているほか、建物に接するP53からは埋納された常滑産の壺とかわらけ(図43：・240～249、○250)が出土した(33ページ)。

特筆すべきは常滑産片口鉢25の接合状況であり(図42：○25)、平面では10m以上離れ、約1mの高低差をもって接合した。それぞれ第6トレンチ2面上と第1トレンチ3面上から出土しているのを確認しているので、第1トレンチ3面と第6トレンチ2面は、ほぼ同時期に埋没したと想定できる。

また、一括資料との接合であったため接合関係は図示できていないが、P53出土のかわらけのうち、1番上の蓋に使用されていたかわらけ248は、第6トレンチ1面上出土の遺物と接合した。P53は1面に伴わないため、埋没後に何らかの理由で遺構上面が削平され、その際248の破片が1面の造成土中に混入したと考えられよう。

さて、ここで時期別分布を確認すると(図43)、第1トレンチ東では1面上で15世紀前半と考えられる常滑産片口鉢(☆15)が出土しており、サブトレンチ3出土の破片と接合している。この面は第3トレンチ1面と同一面であり、両者は15世紀前半頃までは生活面であったことがわかる。

1面構成土出土遺物で生産時期が明確なものは、13世紀後半代に比定される常滑産鳶口壺(図43：C-D断面○103)のほか、一括遺物として取りあげた常滑片口鉢83・青磁鉢98・青磁香炉99のみである。いずれもサブトレンチ5内において、基本土層Ⅳ層より上層から出土したものである。

第4・5トレンチでは、生産時期が15世紀代まで下る遺物は出土しておらず、2面上・2面構成土中で13世紀代(特に後半)の遺物量が増加する状況が見て取れる(▲・○)。

攪乱以外の場所から出土した遺物で最も新しい時期に比定できたものは2面火葬跡の底から出土した14世紀中葉頃の古瀬戸折縁皿(●169)である。また、2面の落ち込み部分でも14世紀前半に比定される古瀬戸卸皿(●164)が出土していることから、前述の通り(35ページ)2面上が生活面となったのは14世紀前半より後のことであり、火葬跡の機能・廃絶・埋没も14世紀中葉以降ということになる。必然的に合わせ口かわらけも14世紀中葉以降のものということになる。

これらの出土遺物と、確認した土層の対応関係から、1面構成土についても14世紀中葉以降、15世紀前半頃までには造成されたと考えられる。まさに造成の年代を物語る出土状況である。さらに下層の3面では、14世紀代の遺物が出土しなくなり、13世紀後半代の遺物が大半を占めるようになる。3面構成土中では手捏ね成形のかわらけ片が出土している。13世紀後半頃には3面が使用されており、14世紀前半までに2面が生活面となったと考えられる。

第6トレンチについては1面構成土以下2面上までの出土遺物の分布が反映されているが、13世紀代の遺物に混じって15世紀代の遺物も数点出土していることがわかる。先述したように、第1トレンチ3面上出土破片と接合する片口鉢25は、15世紀前半代の製品であることから、15世紀までは第1トレンチ3面と第6トレンチ2面が機能していたという解釈になろうか。2面の最終埋没時期は15世紀であろう。残念ながら2面下の版築様盛土内からは遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

2. 第2調査地点(図44・45)

第1調査地点と同様、図44には出土遺物全点を器種別に表示し、図45は生産時期の判明するものとかわらけを併せて示した。遺物密度が高いため、44・45図ともC-D断面の遺物番号は必要最低限の記載とし、煩雑になるのを避けた。

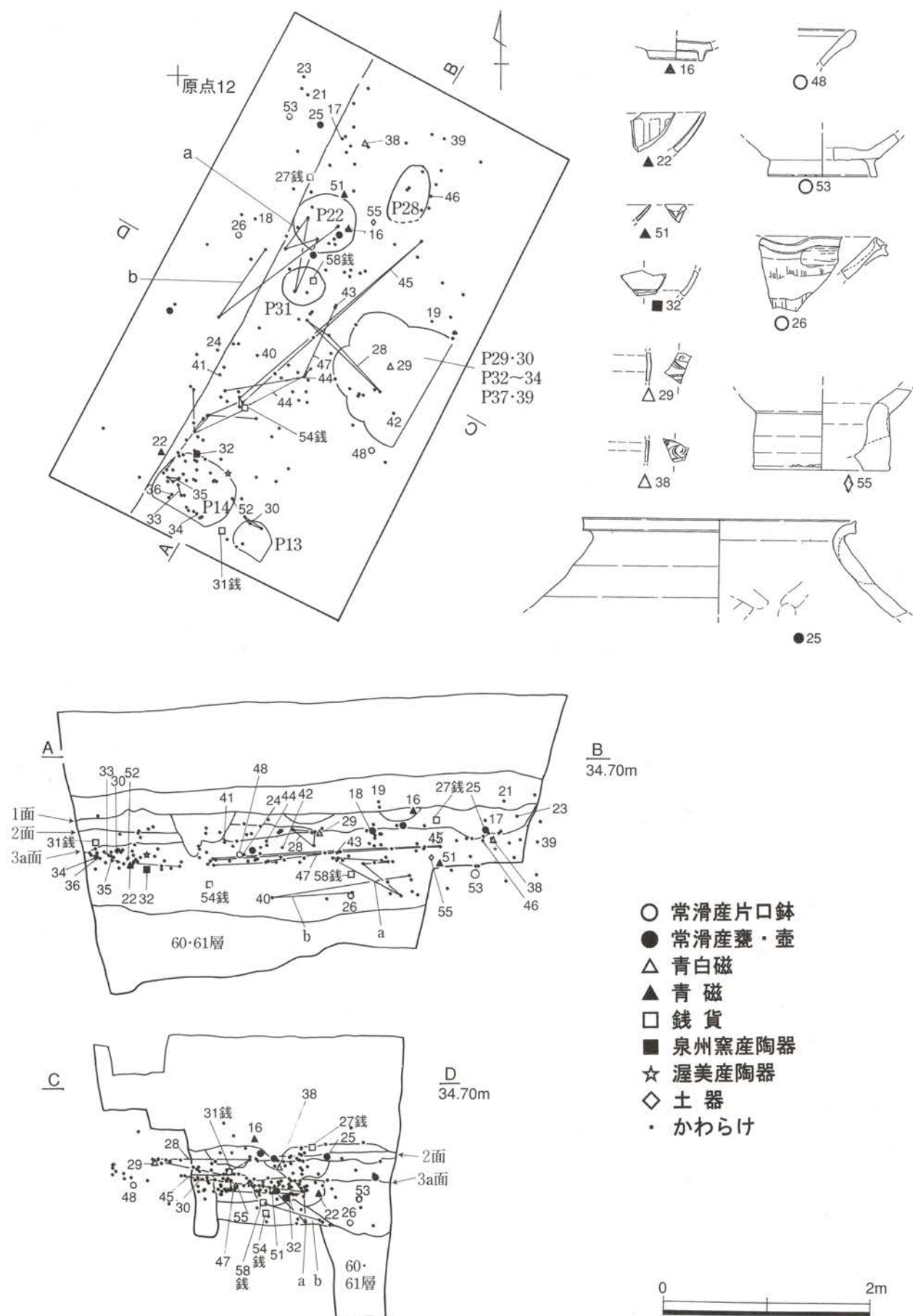
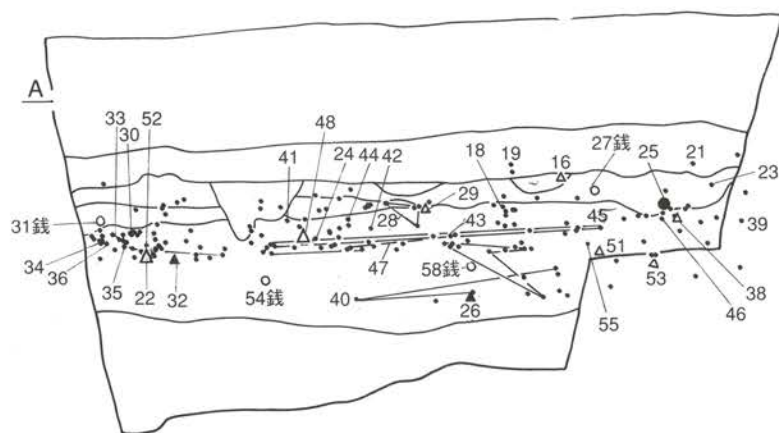
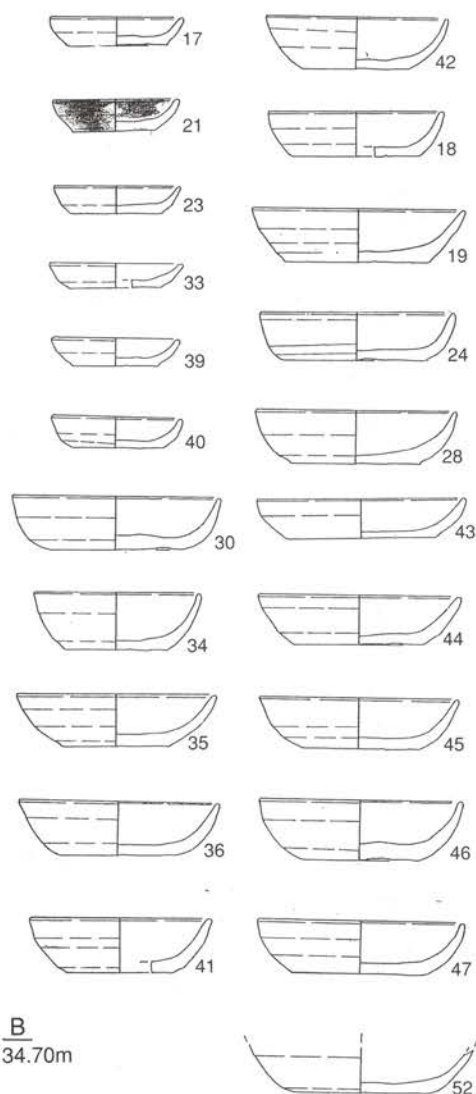
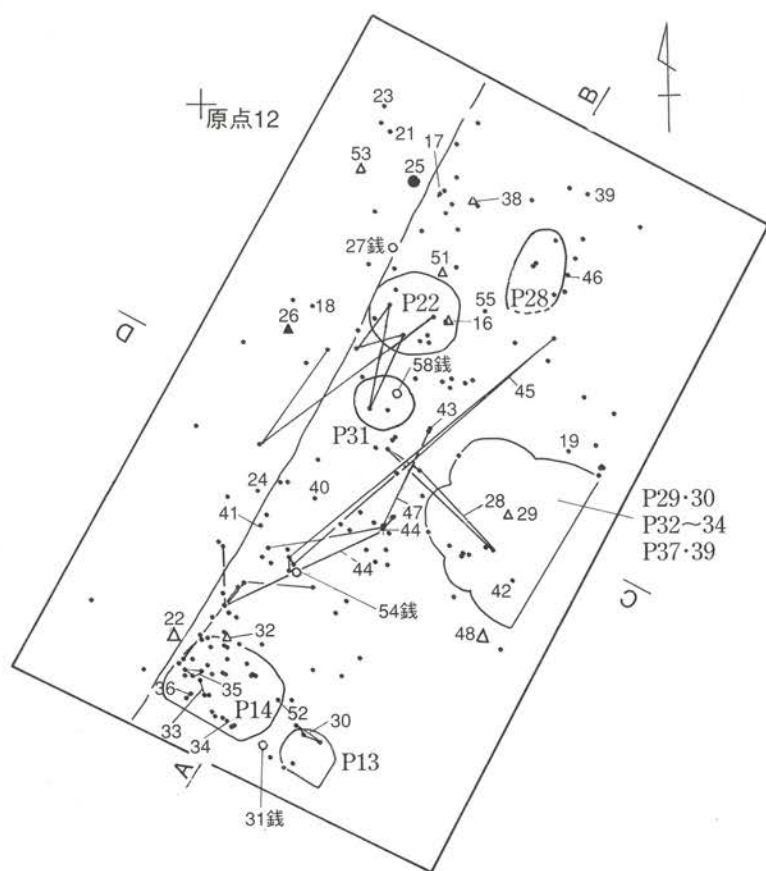
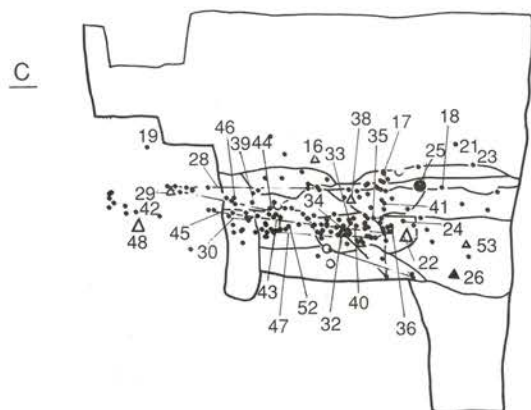


図44 第2調査地点器種別遺物分布図



B
34.70m



D
34.70m

- 古代の遺物
- 13世紀前半の遺物
- △ 13世紀後半の遺物
- ▲ 15世紀の遺物
- ・ かわらけ、土器



図45 第2調査地点時期別遺物分布図

平面分布を見ると、場所によって粗密はあるが、土坑1のある北東隅と、調査区内へ降りるため階段状に掘り残した南東隅以外はおおむねどの器種も調査区内にまんべんなく分布していると言えるだろう。断面分布を見ると、遺物は主に第1面構成土以下にあり、なかでも3a面構成土中に最も多く見られる(図44:断面A-B)。しかも岩盤上の堆積土中(基本土層60・61層)より上層に分布している。

生活什器としての器種構成は第1調査地点と大きな隔たりはない。ただし、白磁碗・皿や手捏ね成形のかわらけは出土せず、土器55(図44:◇)のようなあまり例を見ない遺物が出土する。

当該調査地点で接合した遺物は全てかわらけ(・)であった。距離を隔てて接合するものが目立つが、ほとんどがほぼ同じ標高で出土した破片どうしの接合である(45・47)。平坦な整地面上に分散したような状況といえる。平坦面上に盛土した土中に含まれていたか、もしくは、実測に耐えうるほどの残存状況の遺物もあることから、当時この場所で用いられていたものである可能性も高いだろう。

P22中から破片が出土している接合個体2個体(図中a・b)のうち、aはP22の埋土中に混入した破片と生活面上に残された破片の接合として理解できよう。bは遺構外出土破片の方がP22中の破片よりも出土レベルが低い。前述のように(52ページ)、調査区西側における3面以下の土層堆積状況は東側とは異なっており、泥岩地業のない落ち込み部分を埋めて平坦にしたような状況が見られる。bの遺構外出土破片もその落ち込みの堆積土中から出土しており(図44:C-D断面)、P22と調査区西側の埋土との関係性を示唆するものである。落ち込み部分からはほかに、少ないながらもかわらけや常滑産片口鉢(○26・53)、銭貨(□54)が出土している。

時期別分布を見ると(図45)古いものは7世紀の唐銭(○58)から、新しいものは15世紀後半の常滑産片口鉢(▲26)までが見られる。ただし15世紀代の遺物は片口鉢26の1点しか出土しておらず、14世紀代の遺物は上層の包含層中に古瀬戸片が4点含まれていただけで中世の堆積土層中(1層以下)からは1点も出土していない。最も多いのは13世紀代の遺物であり、そのほとんどは13世紀後半頃の青磁・青白磁の破片である。断面を見ると3a面構成土相当の深さまで13世紀後半の製品が分布しており(図中△51)、3a面が13世紀後半以降の生活面であることが判明する。

ここで、13世紀後半代の遺物よりもさらに深い場所で15世紀代の遺物(▲26)が出土していることに注目しなければならない。これは先述した西側の堆積土中からの出土であるが、落ち込みは2面より下で埋没が完了しており、遺物の項で想定した2面の時期と齟齬をきたすことになる。サブトレンチ内からの出土であることから、トレンチ掘削時に上層から掘り込まれていた遺構を見落とした可能性も高く、これの検討については今後の調査の機会に譲りたい。

かわらけについては時間の都合等もあり、分布には細分を反映できなかった。とはいえ前述のように(54ページ)2面構成土と3面上からいわゆる「薄手丸深」のかわらけが出土したことから、3面は14世紀代と想定されている。手捏ね成形のかわらけが出土していないことなどから考えても、当該地での土地利用の開始は13世紀後半でも新しい段階か、もしくは14世紀初頭までと想定できよう。

3. まとめ

今回接合した遺物の中には、「面上」出土遺物と「面下(構成土)」出土遺物の接合が多数見られた。1面上とその構成土である場合もあれば、2面上と1面構成土の場合もある。それには遺跡形成に関わる様々な要因が考えられようが、「面上」出土遺物のみで生活面の時期決定ができるわけではないことを物語っている。全ての出土遺物を大切に、遺物と遺構との関係性はもちろんのこと遺物相互の関係性も総合的に検討することで、遺跡のより正確な理解へと繋がるはずである。今回はかわらけの詳細な分類はあえて行わなかったが、胎土・形状等の属性で分類を行うことでより詳細な時期決定が可能となろう。

第3章 考察とまとめ

第1節 検出された遺構とその変遷

今回の調査では、谷戸内の平場として第1調査地点・第2調査地点、そして北側丘陵部ではやぐらの調査を行った。その結果、13世紀後半頃に谷戸の大規模な造成が行われ、15世紀に至るまで土地利用がなされてきたことと、その詳細な内容を確認することができた。検出した遺構は大きく3期、生活面としては7面に分けることができる。

以下、その成果を元に谷戸の造成の様子と土地利用変遷について概観する。ただし、造成の状況や確認できた生活面の数・遺構の種類は、調査地点ごととはもとより第1調査地点内でも場所によって大きく異なっているため、調査段階においても同時性を把握することが困難であった。そこで、今回の成果を地点別・時期別に整理し、表19に示したので、適宜参照していただきたい。

1期の様相(13世紀後半から14世紀前半)(図47)

谷戸奥の大造成が開始された時期である。第1・第2調査地点ともに建物が建立され、ほぼ同時期に丘陵部にはやぐらが造られ始める。

第1調査地点では、谷戸奥の東側と西側の岩盤を削り、前面に盛土をして平場を造成している状況が明らかとなった(図47：平場A・B)。東と西では1m～1.5mの高低差があり(図47東西断面)、西側の平場Bが高い(標高約46m)。この時点で谷戸北側最奥(第2トレンチ付近)は削平を受けておらず、現在見られるような平場ではなく丘陵裾の斜面であったと考えられる。

平場Bの南側は版築状の盛土がなされ、その上層の整地層上で礎石列、溝状遺構、掘立柱建物跡、ピット群、土坑、玉石敷き、常滑壺埋納遺構が出土した(第6トレンチ2面)。古いものから、「礎石列・石組み溝・溝状遺構」→「玉石敷き」→「掘立柱建物跡・ピット群・土坑・常滑壺埋納遺構」の順に変遷する。掘立柱建物はトレンチ内で1間×2間分を確認しており、西側へ展開すると考えられる。これらの遺構は、

表19 検出面・遺構 所属時期対応表

		第1調査地点				第2調査地点		丘陵部 やぐら
		第1トレンチ	第2トレンチ	第3～5トレンチ	第6トレンチ			
3期	15世紀以降	1面 東：石列 溝状遺構 ピット 西：溝状遺構 2面 土坑、ピット	1面 地山削 平面	1面 石積み 遺構	1面 ピット、 土坑	1面	ピット 土坑	存続 新規築造は なし
2期	14世紀後半 14世紀中頃	3面 溝状遺構 4面 柱穴 (掘立柱建物跡) (5面) (6面)		2面 あわせ口 かわらけ 埋納遺構、 火葬跡 柱穴、土坑	2面 玉石敷き 常滑壺埋納遺構 ・ 掘立柱建物跡 ピット群、土坑 ↑ 礎石列 石組み溝 溝状遺構 ↑ 版築	1面 ピット 土坑 2面		最盛期
1期	14世紀前半 13世紀後半	7面 (岩盤削 平面) 溝状遺構		3面 4面 (岩盤削 平面) ピット		3面 4面 ピット 土坑 礎石		出現期 (地藏やぐら、 唐糸やぐら)

土遺物の様相から次の2期まで存続すると考えられる。平場Aでは第4トレンチ3面上でピットを確認した。

第1調査地点のうち、今回調査対象とならなかった南半部は北半部よりも標高が低かったと考えられる。昭和40年代までは敷地の中央に段差が存在していたことが確認できているほか(図50)、西側に確認できるやぐら1の床面の標高が44.5m以下であるため、やぐら構築当時には同一かそれ以下の標高であったと想定できるからである。

第2調査地点では、岩盤上に盛土をして平場を形成した様子がうかがえる。4面ではピット、3面ではピット、土坑、砂岩の礎石2個が出土した。礎石を境として調査区東側にはしっかりとした泥岩の地業面が存在する。

やぐらはこの谷戸における出現期と考えられ、地蔵やぐら、唐糸やぐら、第1調査地点西側の2・3号やぐらが該当する。やぐら内の石塔は地蔵やぐら内の五輪塔が14世紀前半頃の製作であり最も古い(65ページ)。

なお、今回の調査では深度の関係もあり、第6トレンチの版築様盛土下の基盤層は確認できていない。1期をさらにさかのぼる遺構が存在する可能性は否定できない。

2期の様相(14世紀中頃～14世紀後半)(図47)

第1調査地点では1期から存在する建物に加え、新たに造成された平場奥に掘立柱建物や溝が構築されており、同時に2棟以上の建物が機能していた可能性がある。さらに東側平場では火葬が行われており、同じ平場でも西側と東側で使われ方が異なっていたことが判明した。

1期に造成した平場Bにあわせるように、平場Aと谷の中央部分を中心に盛土が行われ、東西の高低差がほとんどない広い平場Cが谷戸奥に形成される(図46：C-D断面 第3～5トレンチ2面、標高46m前後)。最初の粗造成には大型砂岩塊を用いて一気にかさ上げが行われている(図46：A-B断面、C-D断面 大型砂岩塊造成土)。

一方で1期に造成された平場Bは、2期を迎えてもほとんど標高に変化がないまま平場Cへと移行する。ここには1期から引き続き建物などが存在したと考えられる(第6トレンチ付近)。

平場C東側(第4・5トレンチ付近)では、合わせ口かわらけ埋納遺構、火葬跡が検出された。その南東側(第4トレンチ中央付近)ではさらにもう一度大がかりな盛土が行われており(図46：C-D断面 南)、その上面には土坑・ピットが存在する。

谷戸の北西部(第1トレンチ西側付近)は単独で盛土を繰り返しており、2期の最終段階では南側の平場C(第6トレンチ付近)より標高が1mほど高くなる(図46：E-F断面北、標高約47m)。その間の生活面が第1トレンチ3～6面で、3・4面では掘立柱建物が構築され、岩盤際に溝も掘削されている。溝覆土は焼土・炭化物であり、火災の痕跡と考えられる。5・6面は断面で確認したのみで遺構は確認できていないが、面上に炭化物の堆積が見られる。

第2調査地点では、1期のように東側だけでなく調査区全面に泥岩地業を行っている。1・2面が2期に相当する。ピット、土坑が確認できた。

やぐらは最盛期と考えられる。西側丘陵4～24号など、最も多くのやぐらが造られた時期である。日月やぐらとその周辺のやぐらもこの時期と考えられるが、1期まで遡る可能性もある。

3期の様相(15世紀以降)(図47)

第1調査地点の東奥に存在したであろう小規模な建物以外は、第1・第2調査地点ともに前時期に比して遺構の密度は低くなる。出土遺物からは、15世紀前半頃が最終的に利用されていた時期と考えられる(35ページ)。やぐらも新たな築造はなくなる。

第1調査地点では、2期に造成された平場Cの北側に一段高い平場Dが造成される(第1トレンチ1・2面、第3トレンチ1面：標高約47m)。谷戸の北東部(第1トレンチ東端)ではほぼ同時に東側の岩盤を掘削し平場を広げている。掘削した岩盤上面の標高は47mで、溝、柱穴が上面に穿たれている。第1トレンチ西側2面では、ピット・土坑を確認した。

平場Dと北側丘陵との境には凝灰質砂岩を用いた土留めの石列1が設けられ、平場南端には同じく凝灰質砂岩による土留めの石積み1が構築されている。石積み1の南側段下、つまり平場Cについては、引き続き生活面となっていたであろう。ただしこの頃には火葬跡は埋没しており機能していなかったと思われる。

第6トレンチ付近でも2期から1m近く盛土を行っている。上面でピット・土坑・溝状遺構などが検出できているが、第1トレンチ1面との間にはまだ50cm程度の標高差が存在する(標高46.5m～47m)。

この時期、第6トレンチ南側には南へ下がる段差が確認できる。段下となる平場南半部との境であろうか。第6トレンチ1面の石列がその境に存在する。

第2調査地点では、平場全面に泥岩による地業を行っている。調査時点で地業面の上面は荒れており、生活面は削平されてしまった可能性がある。上面でピットを確認した。

やぐらについては、新たな築造はなくなると考えられるが、既存のやぐらを埋葬施設として用いるなど、何らかの利用は行われていたと考えられる。

15世紀後半以降の土地利用変遷

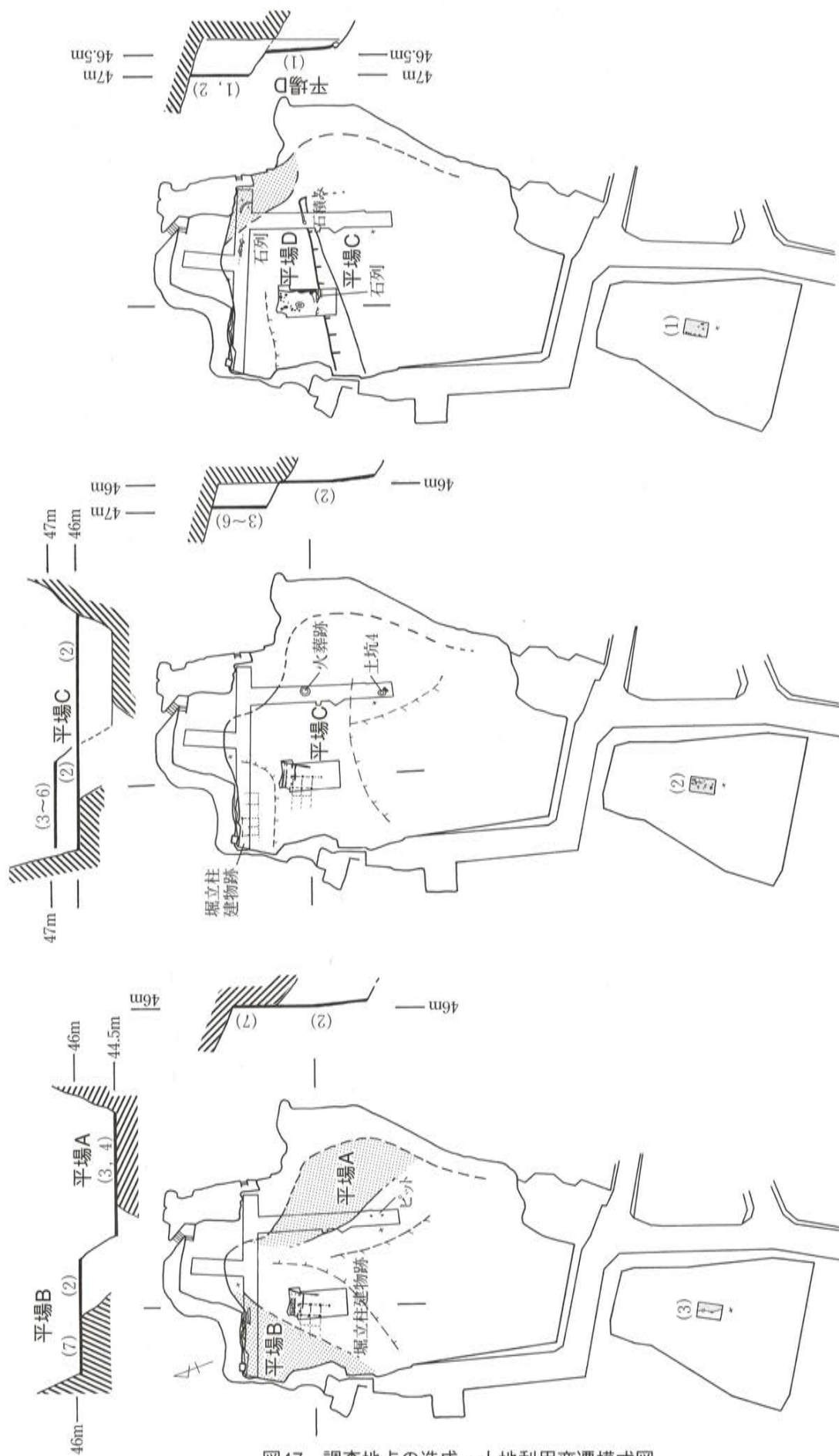
第1トレンチ1面において確認された15世紀前半代の土地利用痕跡を最後に、当該地において遺構は検出されなかった。遺物も製作年代が15世紀後半以降と判断されるものは、3期の面より上層の堆積土層中(前掲図6：I層)で近世の陶磁器が数点確認されたほかは全て近現代の遺物であった。「攪乱」と呼んだ掘り込みも、近現代のものである。

おそらく15世紀後半代には建物は廃絶しており、その後の土地利用はあまり活発ではなかったと判断される。荒地と化したか、耕地として利用されていたのであろう。この場所についての記録は近世の地誌類にも見られず、文献等からの確認もできない。

この土地の状況がわかるようになるのは、前述のように、明治15年測量の迅速図や旧公図(明治時代に作成、昭和40年代まで使用)によってである。旧公図で調査地点は耕地として記載されており(図49)、迅速図においても宅地と判断できる要素はない(図48)。とくに迅速図と同様明治15年に作成された地形図(図48左下、(財)日本地図センター発行「明治前期測量2万分1フランス式彩色地図 横浜市金沢区、鎌倉市東部、逗子市周辺」)には第2調査地点の東側に位置する平場に「畑」との記載もある。明治初頭の地形が概ね近世末段階のものを踏襲しているものと想定するならば、調査地点は近世から近代にかけて耕地であったと判断できるだろう。

なお、旧公図では第1調査地点に当たる場所に現在は存在しない土手と道が記載されており、それらに区画された平場が南(1445番)・北(1446番)・東(1450番)の3カ所存在したことが見て取れる。東の平場については不明ながら、第1調査地点が過去に南・北の上下二段に分かれていたことは住宅地図や航空写真からも明らかである(図50、図版1-2)。

例えば昭和44(1969)年の住宅地図(図50)においては段差部分が石垣のように表現されているなど、土手の勾配などは多少の埋没や人為的改変を受けて変化している可能性はあるが、旧公図作成時から、高低差のある南・北2カ所の平場が維持されていたことがわかるだろう。しかしこの段差はその後埋め立てられ、第1調査地点は現在のような平場となった。



1期 (13世紀後半～14世紀前半)

2期 (14世紀中頃～14世紀後半)

3期 (15世紀以降)

() 内数字は面の番号、網かけは岩盤削平部分

図47 調査地点の造成・土地利用変遷模式図

おそらく第6トレンチ掘削段階で確認した南側の落ち込み(26ページ)は土手部分に該当しよう。先述したように、1期でも第1調査地点の南北で高低差が想定できることから(74ページ)、古くは13世紀後半から引き継がれてきた地形だったのだと想定できる。

また、明治36年の地形測量図(図48右下、大日本帝国陸地測量部「二万分一地形図 東京湾要塞近傍十五號(共十七面)『鎌倉』」)では、釈迦堂切通(トンネル)部分が隧道として表現されている(図中:A)。現在見られるような隧道状の姿は、少なくともここまでは遡れるだろう。

第2節 遺構の検討とその性格

調査地点となった谷戸が、過去どのような性格の場所であったのか、その歴史的な位置づけを明らかにするには、北側丘陵部のやぐら群と、今回検出した平場の建物跡、そして火葬跡が鍵となる。ここではそれらを手がかりに、今回の調査で確認された遺構群、そして当該谷戸の性格について考察する。

1. 建物跡

建物跡は第1調査地点において第1トレンチ4面、第6トレンチ2面で掘立柱建物跡が確認されたほか、第2調査地点では3面で礎石2基が確認できた。

そのうち1期に構築されたのは第6トレンチの掘立柱建物跡(建物1とする)と第2調査区の礎石建物跡(建物2とする)である。

建物2については、礎石2基が検出されたのみであった。このため全体の規模は不明であるが、礎石の東側だけに泥岩地業面が展開する状況から、建物西端の礎石を検出したと考えるのが妥当であろう。しかし平場全体で見ると若干東側に偏っている印象もある。出土遺物はかわらけや青磁片が中心で、特殊な遺物の出土は認められない。

建物1は東側の1間×2間を調査区内で検出した。建物1自体は西側に展開すると考えられる。同一面にはほかにもピット群が存在するため、屋敷地として繰り返し利用されたことが想定できる。建物1の周囲には石組み溝や玉石敷きなど、建物に付随するような遺構が密度高く存在することも、それを裏付けよう。さらに建物北側に分布している玉石敷きは、当該平場が単なる庶民の宅地ではなかったことを想定させる。

それらの遺構の変遷については上述したとおりであり、建物1の構築については2面が機能していた時期でもより新しい段階にあたると考えられる。

それ以前の建物については、今回確認された第6トレンチ2面下の版築様盛土について、建築史を専門とする鈴木亘氏に実見していただいたところ、「礎石建ての建物を建てるために行った版築ではないか」との意見をいただいた。建物の中心的な柱を支えるような礎石は残存していなかったが、掘立柱建物を建てるなど後世の土地利用によって撤去された可能性はあろう。すると今回検出された小振りな礎石列(前掲図21:石1～石3)はその名残であり、縁の束柱を支えていたものだったとも考えられる。そうすれば、北側に平行に存在する石組み溝(溝状遺構3)は雨落ち溝と考えることもできる。

当該調査地点における屋敷地としての利用は14世紀代を中心とする2期まで引き継がれる。さらに2期には北側に造成された1段高い平場で新たに掘立柱建物が建てられることから、同時に2棟以上の建物が存在する景観が想定できる。



明治15(1882)年



明治15(1882)年



明治36(1903)年

図48 明治時代の調査地点周辺

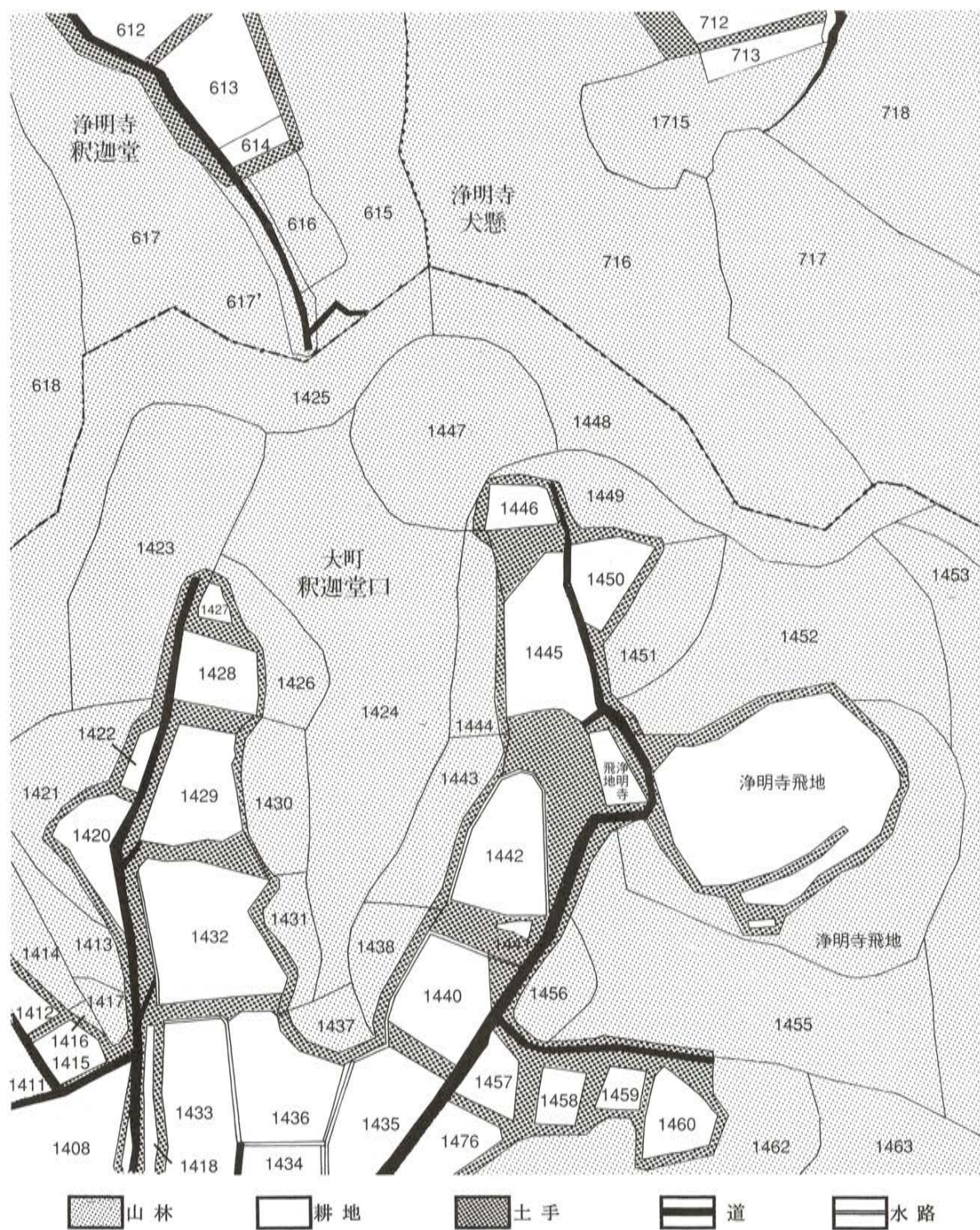


図49 旧公図



図50 昭和44(1969)年の調査地点

2. 火葬跡

建物の増加する2期には、同一の平場において、火葬が行われていた痕跡も確認できた。

火葬跡の検出事例は市内でも十数カ所存在するが、建物と同時存在する事例は、国指定史跡「朝夷奈切通」の追加指定箇所である納骨堂跡が挙げられよう(浜野2002)。ここでは岩盤を掘削して造られた平場で納骨堂跡が検出され、その傍らで火葬跡(報告書では「茶毘跡」と記載されている)が検出された。建物とともに14世紀後半から15世紀前半にかけての年代が与えられており、今回検出した火葬跡よりは新しいが、納骨堂跡前面にピット群、堂裏手の岩盤にはやぐら2基が造られているなど、立地や周囲の遺構は今回検出した火葬跡の例と非常に似ている。

このように酷似する事例が、納骨堂という仏教的な建物に付随する火葬跡であることから、今回検出の遺構も同様、宗教的な空間に存在する建物・火葬跡であると考えられよう。

3. 谷戸の造成

今回の調査では、当該谷戸で13世紀後半以降に行われた大規模な土地造成の様子が明らかとなった。これはかわらけなどの生活什器のうち、今回調査の及んだ最下層で出土した遺物の生産年代から想定したものである。この時期は、一般的に鎌倉市内で谷戸の開発が行われると言われる時期とほぼ同時期と考えてよいだろう(馬淵1992)。

調査地における谷戸利用の契機については、残念ながら文献もなく確定的なことは言いがたい。しかし北側丘陵のやぐらもこの造成の開始と軌を一にして構築され始めているところに注目したい。やぐらを構築しながら前面の平場の環境を整えてゆく状況は、宗教的な目的での開発であったことを物語っていよう。

市内で同様の造成を行っている例は、浄明寺の釈迦堂ヶ谷遺跡や、二階堂の永福寺跡(杉ヶ谷地点)でも

見られる。前者は第1章で述べたように、今回の調査地点とは北側丘陵を挟んで隣接している谷戸内である。背面の岩盤を削って前面に盛土することで平場を造り、建物を構築しているとともに、やぐらも造り出している。

4. やぐら群

丘陵部の調査では、これまで確認されていなかったやぐらが新たに29基確認され(日月やぐら群の埋没やぐら1基を含む)、北側丘陵部の南側斜面に存在するやぐらは、発掘調査地点に面するものが33基、谷戸を越えて西側の尾根筋に面するものは31基、総数64基を数えるに至った。これらは丘陵部の上段・中段・下段に分布しており、一大やぐら群を形成していることが改めて確認された。

さらにこのやぐら群は、今回行った石塔の検討によって谷戸内の平場で発見された遺構群とほぼ同時期に形成されたことが明らかになり、南側平場の遺構群と一体のものとして把握することができるようになった。当時、この一帯が荘厳な景観を創出していたであろうことは想像に難くない。

市内に存在するやぐら群のうち、大規模なものとしては、200基が確認されている百八やぐら(国指定史跡覚園寺境内)、101基が確認されている清涼寺谷やぐら群、108基が確認されている瑞泉寺裏山やぐら群(国指定史跡瑞泉寺境内)などが挙げられる。

今回の調査で確認されたやぐらは数でこそこれらのやぐら群より少ないが、個別に見れば「地藏やぐら」や「日月やぐら」の壁面に彫られた仏像や梵字等のレリーフは百八やぐらや史跡仮粧坂瓜ヶ谷やぐら等にも同様の事例を見ることができる。やぐら群としての内容は決して見劣りするものではなく、同等とも言えるだろう。

上記のように大規模なやぐら群の面する谷戸には、通常寺院が存在している。その意味では、当該平場にも宗教施設が存在した可能性は高いだろう。

また、当該やぐら群は保存状態も比較的良好に保たれており、稀少な事例であるとともに歴史資料としても重要な価値を有するものであると言えるだろう。

5. 東京国立博物館所蔵の伝敷地内出土青磁鉢

当該地では昭和28年に青磁の鉢3点が土中より発見されたと伝えられている。いずれも昭和42(1967)年に国指定重要文化財に指定され、現在は東京国立博物館に蔵されている優品である(図版22)。

しかし、実際の出土地点については以前より各説あり定まっていない。今回の調査でも類似する事例は発見できず新たな知見を追加することはできないが、これまでの経過を整理しておくことは重要であろう。

この青磁鉢の存在が初めて公にされたのは昭和29(1954)年のことであり、出土直後(昭和28(1953)年5月)に現地で資料を実見した八幡義生氏が国史学会研究発表大会において発表している。実見の経緯については『星月』第九号にも記載されており、「鎌倉市大町名越大谷戸の奥から」出土した青磁鉢の調査のため、その現場である「鎌倉市大町名越大谷戸、釈迦堂口一四四八番地」の邸宅を訪れ、住人より出土青磁鉢を見せてもらったとの記事がある(八幡1957)。

その後昭和32(1957)年に文化財保護委員会が発行した『文化財要覧一』では、出土地が「鎌倉市大町1448番地」と記されており、「庭園内から、植木職による作業中に発見されたもの」で、「表土下に板石があり、その下に大形の鉢を伏せ、中に小形の鉢二個を重ね、やはり伏せて納めてあつた」という出土状況が記されている。

現在の公図で、同地番は調査地点の北東部に位置する丘陵尾根にあたり、「庭園内」というような場所

ではない。確かに旧土地所有者が設置した遊歩道で丘陵部を散策できるようになってはいるものの、昭和28(1953)年段階で同ルートの道が存在したのか、庭園として整備されていたかどうかは定かではない。おそらく文化財要覧では『星月』第九号に記された邸宅の番地を「出土地」として記述したのであろう。

また、これまで展示図録等に記載される青磁鉢の出土地は「大町衣張山」であり、いかにも当該谷戸北東側に存在する衣張山山中から出土したように見えるが、発見当初は「衣張山」という言葉は使われていない。山中出土でないとするれば、「庭園内」という記述からも、現在ある平場から出土したと考えるのが最も素直ではないだろうか。発見当時、平場奥には建物が存在していたことから(昭和44年住宅地図：図50)、出土地は平場北西奥ではなく空閑地が存在する平場東側となろう。

なお、出土した鉢はいずれも13世紀後半代の製品である。生産時期から大きく隔たらない時期に埋納したとすれば、当該遺跡の時期区分における1、2期頃に埋納したということになる。平場における当時の地表面は最高で標高46m前後であるので、昭和28年当時の地表面の具体的な標高は不明ながら、おおよそ1m程度の掘削をしないと、埋納遺構に達することはできなかったであろう。可能性としては、植木を植えるための掘削時などの発見が考えられる。

以上のように出土地点は未だ不明といわざるを得ないが、青磁の鉢の中でもこのように大型の製品が3個体一緒に埋納されていたという状況は市内でも非常に特殊である。類例としては、器種・時期は異なるが白磁水注・天目茶碗・白磁皿・銅製銚子が出土した笹目遺跡の埋納遺構が挙げられよう(大河内1991)。これらは地鎮に用いられた道具と考えられており、当該地出土の青磁鉢も上述のように意図的に埋納されていることから、地鎮・あるいはやぐらの骨蔵器として埋納された可能性が指摘されている。しかし骨蔵器とするには全て伏せて埋納されていた状況などから、やや不自然な点も残る。

第3節 まとめ

以上の検討から、今回の調査地点である谷戸奥の平場では13世紀後半頃に大規模な造成が行われ、その後も北側丘陵にはやぐら、平場には火葬場が営まれる宗教的な場として用いられていたことが判明する。同時期に存在したと考えられる建物も、住宅というよりは寺院など宗教的な建物であったと考えるのが妥当であろう。とくに、第6トレンチにおいて確認された版築様の盛土からは、堅固な基礎を持つ礎石建物の存在が想定できる。第2調査地点で出土した礎石とあわせ、当該谷戸における平場の利用を考える上で重要な手掛かりであることは言うまでもない。

今回設定した調査区は谷戸のごく一部に過ぎないが、検出された遺構群は、鎌倉における宗教的な目的で行われた谷戸開発と土地利用の良好な事例であると言えよう。現在は廃寺にも比定されていない場所であるが、今後の発掘調査や文献史学の成果によって新たな候補が現れる可能性は、大いに期待できるであろう。

現在このようにやぐらと平場の遺構が一体で残存していると思われる場所は、すでに史跡として指定されている史跡朝夷奈切通のうちの追加指定地を除けばほぼ皆無と言ってよく、当該遺跡は希少かつ貴重な事例として位置づけられよう。

ここで、その希少性が保たれてきた経緯についても若干触れておきたい。

昭和30年代から40年代にかけてのいわゆる高度経済成長期には、鎌倉にも大規模な宅地開発の波が押し寄せ、宅地の確保と引き替えに谷戸や丘陵にあった多くの貴重な自然と歴史的な地形・景観が消えていく状況があった。

今回の調査地点が存在する谷戸も例外ではなかったが、当該地だけは大幅な地形改変を免れ、その結果

地下の遺跡も良好に保存されてきたのであった。その背景には、研究者や土地所有者を含む地元の人々の歴史的関心と保護への取り組みも存在した。

最初は、昭和15（1940）年頃に八幡義生氏が「北条時政邸跡」と推定し、地図にその名称を記載するなど盛んな研究活動によって広く発表したことがきっかけである。それにより、この場所が歴史的に重要な場所であるという認識が地元へ深く浸透することとなった。

その後、企業の保養所となっていた昭和50年代以降は、所有者が丘陵部分に散策路を設け、やぐらを保護するとともに一般にも見学できるよう開放していた。そのため住民も日頃からやぐら群などの中世的な景観に親しむ機会を得、これらを身近なものと考えようになったのであろう。

またこの間には、昭和41（1966）年における古都保存法制定の端緒ともなったいわゆる「御谷騒動」に代表されるように、歴史的環境や自然環境に対する保護の意識が市民の間に醸成されていた。それも決して無関係ではなく、こうした条件の下で、身近に接している場所の大切な歴史・景観を守りたいという意識が住民に芽生え、結果として現代までこの景観が維持されることにつながったと考えられる。こうした経過もまた、名越の地に記憶されるべき事柄と言えよう。

今回行った発掘調査によって、当該地における中世の景観がより一層鮮明になったと言える。名越ヶ谷、さらには鎌倉の歴史叙述に新たな1ページを加えうる成果と言えよう。地元の人々に大切にされてきた土地でもあり、この景観と歴史を後世に伝えてゆくためにも、一帯は永く保存してゆくことが必要であろう。

引用参考文献

- 赤星直忠 1959 『鎌倉市史 考古編』 鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館
- 秋山哲雄 2006 『北条氏権力と都市鎌倉』 吉川弘文館
- 池田治・井辺一徳・宍戸信 2001 『山王堂東谷やぐら群』 かながわ考古学財団調査報告117
- 井関文明・鈴木庸一郎 2005 『山王堂東谷やぐら群Ⅳ』 かながわ考古学財団調査報告184
- 大河内勉 1991 『神奈川県・鎌倉市 笹目遺跡発掘調査報告書 鎌倉市笹目町330番-1 地点』
笹目遺跡発掘調査団
- 鎌倉国宝館 1980 『鎌倉の石仏・宝塔』 鎌倉国宝館図録第二十三集
- 鎌倉市教育委員会 1983 「6 釈迦堂跡」「10 釈迦堂跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』
- 鎌倉市教育委員会 2001 『切通周辺詳細分布調査報告書』
- 汐見一夫・野本賢二ほか 2000 「名越ヶ谷遺跡」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16（第2分冊）鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫 2004 「名越ヶ谷遺跡」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20（第2分冊）鎌倉市教育委員会
- 宗墓富貴子 1998 「名越ヶ谷遺跡」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第1分冊）鎌倉市教育委員会
- 鈴木次郎・井関文明・汐見一夫 2005 『山王堂東谷やぐら群Ⅴ』 かながわ考古学財団調査報告186
- 鈴木庸一郎・木村吉行 2000 『鎌倉城（大町3丁目）所在やぐら』 かながわ考古学財団調査報告89
- 鈴木庸一郎 2001 「第7編 第Ⅱ章」『『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査』
神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木庸一郎・宮坂淳一・村上吉正 2002 『山王堂東谷やぐら群Ⅱ』 かながわ考古学財団調査報告140
- 鈴木庸一郎 2005 『山王堂東谷やぐら群Ⅲ』 かながわ考古学財団調査報告182
- 高橋慎一郎 2005 『武家の古都・鎌倉』 日本史リブレット21 山川出版社
- 滝沢晶子・諸星真澄・宮田眞 2001 『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』 名越ヶ谷遺跡発掘調査団
- 滝沢晶子・宮田眞 2003 『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書（医療法人財団額田記念会
老健ぬかだ 建設に伴う発掘調査）』 名越ヶ谷遺跡発掘調査団、有限会社博通
- 田代郁夫 1995 「名越ヶ谷遺跡」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11（第1分冊）鎌倉市教育委員会
- 玉林美男 1986 「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2 鎌倉市教育委員会
- 中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 手塚直樹・田畑佐和子 1989 『浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡』 浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団
- 手塚直樹 2002 「名越ヶ谷遺跡」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18（第2分冊）鎌倉市教育委員会
- 中野晴久 2005 「常滑・渥美」
『全国シンポジウム 中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 発表要旨集』
- 貫 達人 1971 「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要8号』
- 貫達人・川副武胤 1980 『鎌倉廃寺辞典』 有隣堂
- 浜野浩美 2002 『朝比奈砦発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会
- 福田 誠 1994 「永福寺跡」『鎌倉市緊急調査報告書』10（第1分冊）鎌倉市教育委員会

- 福田 誠 2003 「名越ヶ谷遺跡（2356番10地点）」『鎌倉市緊急調査報告書』19 鎌倉市教育委員会
- 藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」
『全国シンポジウム 中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 発表要旨集』
- 松尾宣方 1983 「安国論寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1992 「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』第六十九号 鎌倉文化研究会
- 馬淵和雄 1995 「上杉氏憲邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会
- 三浦勝男編 2005 『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版
- 宮田 眞 2003 「名越ヶ谷遺跡（2356番11地点）」『鎌倉市緊急調査報告書』19 鎌倉市教育委員会
- 森 孝子 2004a 「名越ヶ谷遺跡」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20（第1分冊）鎌倉市教育委員会
- 森 孝子 2004b 『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』有限会社博通
- 八幡義生 1957 「鎌倉市大町名越奥「日月やぐら」と出土資料に就いて」
『星月』第九号 鎌倉史学同好会刊